# 博　多　31

—博多遺跡群第63次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第286集

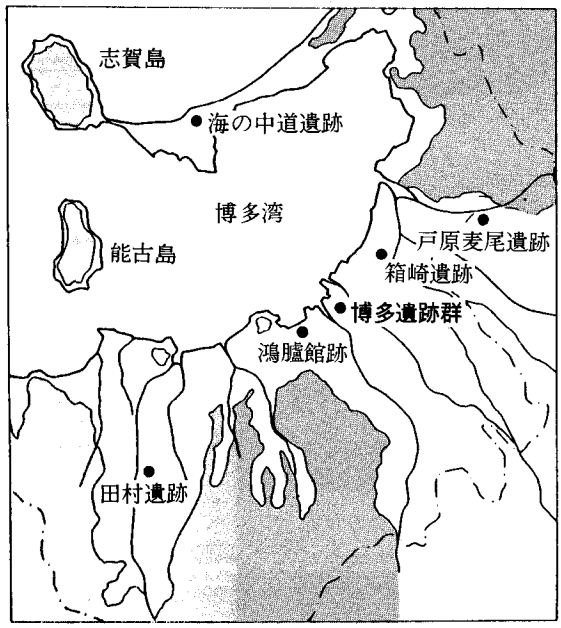
1992

福 岡 市 教 育 委 員 会

# 博　多　31

—博多遺跡群第63次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第286集




遺跡調査番号8974
遺跡略号　ＨＫＴ-63

1992

福岡市教育委員会

# 序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていくことは、云うまでもなく我々の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともない、やむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は平成２年に調査した博多遺跡群63次調査の成果を報告するものです。博多は古代から中世にかけて対外貿易の一大拠点として栄えた地域であります。この調査でも、古墳時代から江戸時代にいたる数多くの遺構と遺物を確認しました。そのなかでも特に中世のものが多く、中世都市博多を復元するうえでひとつの手がかりとなるものと考えられます。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、調査に際してご協力をいただいた南建設株式会社、またご指導を賜りました関係各位に対し、心から謝意を表する次第であります。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉

# 例　　言

1．　本書は博多区冷泉町９番地他の共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が平成２（1990）年２月13日から４月20日に発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第63次調査の報告である。

1．　本書に掲載した遺構、遺物の実測は濱石哲也、菅波正人、林田憲三、英豪之、黒田和生がおこなった。製図は上記の他、松尾秋代があたった。

1．　遺構、遺物の写真撮影は濱石、菅波が行った。

1．　本報告書作成にあたっては西島信枝、前田みゆき、山田由美子、太田順子、上田保子、緒方まきよ、有島美江、藤信子、佐々木涼子、岩崎加奈子の協力を得た。

1．　遺構番号は発掘時に検出した順に通しで番号をふり、本書では遺構の略号をその番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SX（墓）である。なお挿図ではこの遺構略号を省いた。

1．　本書の遺物は通し番号で示し、挿図・図版とも一致する。

1．　遺構図に用いた方位は磁北である。

1．　本報告に関わる図面、写真、遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化センターに収蔵・保管される予定である。

1．　本書の執筆は１・２・４・５を濱石、３・６・７を菅波が分担した。また、陶磁器の分類表は有島が作成した。

1．　本書の編集は林田の協力のもと濱石、菅波が行った。

# 本　文　目　次

本文頁

1　調査にいたる経緯……1
2　調査の組織……1
3　遺跡の位置と歴史的環境……3
　1）位置……3
　2）周辺の遺跡……3
　3）これまでの調査……5
4　調査の概要……9
　1）調査経過……9
　2）層序……9
　3）第Ⅰ～Ⅲ面の概要……10
5　検出遺構……14
　1）竪穴住居……14
　2）井戸……14
　3）土坑……19
　4）墓……30
　5）溝……30
6　出土遺物……33
　1）掘立柱建物・竪穴住居・ピット出土遺物……33
　2）井戸出土遺物……40
　3）土坑出土遺物……48
　4）土壙墓出土遺物……61
　5）溝出土遺物……61
　6）その他の出土遺物……63
7　まとめ……69

# 図　版　目　次

図版1　1　第Ⅰ面全景（東から）　2　第Ⅱ面全景（東から）
図版2　1　第Ⅱ面 SD0309周辺（東から）　2　第Ⅲ面全景（東から）
図版3　1　第Ⅲ面 SC0406周辺（北東から）　2　第Ⅲ面 SX0486周辺（東南から）
図版4　1　SC0406（東から）　2　SC0429・SD0428（西から）
図版5　1　SE0013・0014（南から）　2　SE0104井戸側（東から）
図版6　1　SE0050（東から）　2　SE0107・0139（南から）
図版7　1　SE0119（西から）　2　SE0342（東から）
図版8　1　SK0024（北から）　2　SK0045（南から）
図版9　1　SK0307（北から）　2　SK0308（北から）
図版10　1　SK0407（南から）　2　SK0465（東から）
図版11　1　SK0503（東から）　2　SK0507（東から）
図版12　1　SX0486（南から）　2　SX0486人骨（東北から）
図版13　出土遺物Ⅰ　図版14　出土遺物Ⅱ　図版15　出土遺物Ⅲ
図版16　出土遺物Ⅳ　図版17　出土遺物Ⅴ　図版18　出土遺物Ⅵ

# 挿　図　目　次


本文頁

第１図　博多遺跡群と周辺の遺跡……2
第２図　博多遺跡群調査位置図……4
第３図　博多遺跡群第63次調査地点位置図……6
第４図　調査区東壁土層図……9
第５図　第Ⅰ面全体図……11
第６図　第Ⅱ面全体図……12
第７図　第Ⅲ面全体図……13
第８図　SC0406・0512・0514竪穴住居実測図……15
第９図　SE0005・0013・0015・0035・0385井戸実測図……16
第10図　SE0104井戸実測図……18
第11図　SE0119・0132・0134・0218・0307・0342井戸実測図…20
第12図　SK0017・0024・0118・0138・0155・
0171・0180・0185・0188・0193土坑実測図……22
第13図　SK0045土坑実測図……23
第14図　SK0136土坑実測図……24
第15図　SK0308・0322・0347・0379・0384・0407土坑実測図…26
第16図　SK0465・0470・0484・0507土坑実測図　28
第17図　SK0516土坑実測図……29
第18図　SX0023・0430・0477墓実測図……31
第19図　SD0309溝実測図……32
第20図　SB0106、SC0406出土遺物実測図……34
第21図　SC0429出土遺物実測図(1)……35
第22図　SC0429出土遺物実測図(2)……36
第23図　SC0429出土遺物実測図(3)……37

本文頁

第24図　SC0429(4)・0514出土遺物実測図……38
第25図　ピット出土遺物実測図……39
第26図　SE0050出土遺物実測図(1)……41
第27図　SE0050(2)・0104出土遺物実測図……42
第28図　SE0119・0132・0134出土遺物実測図……43
第29図　SE0137・0218・0307出土遺物実測図……45
第30図　SE0342・0385出土遺物実測図……46
第31図　SK0024・0025・0045(1)出土遺物実測図……49
第32図　SK0045出土遺物実測図(2)……50
第33図　SK0045出土遺物実測図(3)……51
第34図　SK0045出土遺物実測図(4)……52
第35図　SK0133・0135・0136出土遺物実測図……53
第36図　SK0140・0155・0185・0193出土遺物実測図……54
第37図　SK0306・0308(1)出土遺物実測図……55
第38図　SK0308(2)・0407出土遺物実測図……56
第39図　SK0465出土遺物実測図……58
第40図　SK0516出土遺物実測図……59
第41図　SX0486出土遺物実測図……61
第42図　SD0309・0428出土遺物実測図……62
第43図　黒色土器・青磁実測図……64
第44図　白磁・青白磁・天目・墨書土器実測図…65
第45図　石製品・土製品実測図……66
第46図　その他の出土遺物実測図……67
第47図　出土銅銭拓影……68


# 表　目　次


第１表　博多遺跡群調査地点一覧表……7、8
第２表　出土銅銭一覧表……68
第３表　土師器皿・坏法量一覧表……71～73
第４表　陶磁器分類一覧表……74～76

# 1　調査にいたる経緯

昭和52年（1977）の地下鉄工事に端を発した福岡市教育委員会による博多遺跡群の発掘調査は、以後道路拡幅、民間再開発ビル建設などにより平成３年（1991）３月末で70次に及んでいる（第１・２表)。これにより、弥生時代から江戸時代にいたる博多の歴史が具体的に解明されつつあるとともに、中世を中心とした全国に類のない膨大な輸入陶磁器などの資料が蓄積されることとなった。

平成元年（1989）７月21日、博多区冷泉町９番外で共同住宅建設の計画が上がり、施行者の南建設株式会社から埋蔵文化財事前審査願が、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に申請された。課では申請地が博多遺跡群の西南部分に含まれ、また櫛田神社に近接した鎮西探題の推定地にあたることなどから、同年８月９日に試掘調査を行った。申請地は更地であったが、ビルの基礎など攪乱があり、南北方向の全長６ｍのトレンチを開けるにとどまった。このトレンチでは、地表下1.5ｍまでの攪乱層の下に、厚さ約１ｍの暗灰色土の包含層があり、この中の地表下2.1ｍの面で土坑、ピットなどの遺構を確認した。さらに厚さ25㎝の暗黄灰色層があり、深さ2.75ｍで地山の黄色砂に達した。遺物としては古代・中世の輸入陶磁器、土師器などがあった。

これらの結果から埋蔵文化財課は、開発の場合は発掘調査が必要との報告を申請者に回答した。この後課は申請者との間で協議を持ち、開発に先立ち発掘調査を行うこととし、条件の整った翌平成２年（1990）２月13日から本調査を開始した。

# 2　調査の組織

調査委託　南建設株式会社（代表取締役　南里義則）

調査主体　福岡市教育委員会文化財部（前文化部）埋蔵文化財課

| | |
|---|---|
| 課長 | 柳田純孝（前任）折尾学 |
| 第１係長 | 飛高憲雄 |
| 第２係長 | 柳沢一男（前任）塩屋勝利 |
| 庶務 | 松延好文（前任）吉田麻由美 |
| 試掘調査 | 常松幹雄　佐藤一郎 |
| 調査・整理 | 濱石哲也　菅波正人 |
| 調査・整理補助 | 林田憲三（西南学院大学講師）英豪之　黒田和生 |

発掘調査にあたっては南建設株式会社に多大のご協力をいただいた。また数多くの現場、室内整理作業員の方々の御助力を得た。記して感謝の意を表したい。

1.博多遺跡群
2.福岡城
3.堅粕遺跡群
4.吉塚本町遺跡群
5.吉塚遺跡群
6.比恵遺跡群
7.那珂遺跡群
8.那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9.板付遺跡
10.諸岡遺跡
11.五十川高木遺跡
12.井尻遺跡群
13.日佐遺跡群
14.須玖唐梨遺跡
15.須玖永田遺跡
16.須玖岡本遺跡
17.須玖四丁目遺跡
18.赤井手遺跡
19.三宅廃寺
20.野多目遺跡
21.野多目拈渡遺跡

第1図　博多遺跡群と周辺の遺跡（1/50,000）

# 3　遺跡の位置と歴史的環境

## 1）位置

博多遺跡群がある福岡平野は南北に延びる洪積台地と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から御笠川、那珂川が北流し、北端には砂丘が形成される。博多遺跡群はその砂丘上に立地し、東は江戸時代に開鑿された石堂川、南を旧比恵川、西は那珂川によって画される。遺跡の範囲としては博多駅から北側、大博通りを中心にして、東西約１km、南北約1.5kmが想定されている。現在、この地域は博多駅前の商業地域として市街化し、ビルが立ち並んでいる。標高は４～５ｍを測り、遺構は地表下約１～２ｍの深さで検出される。

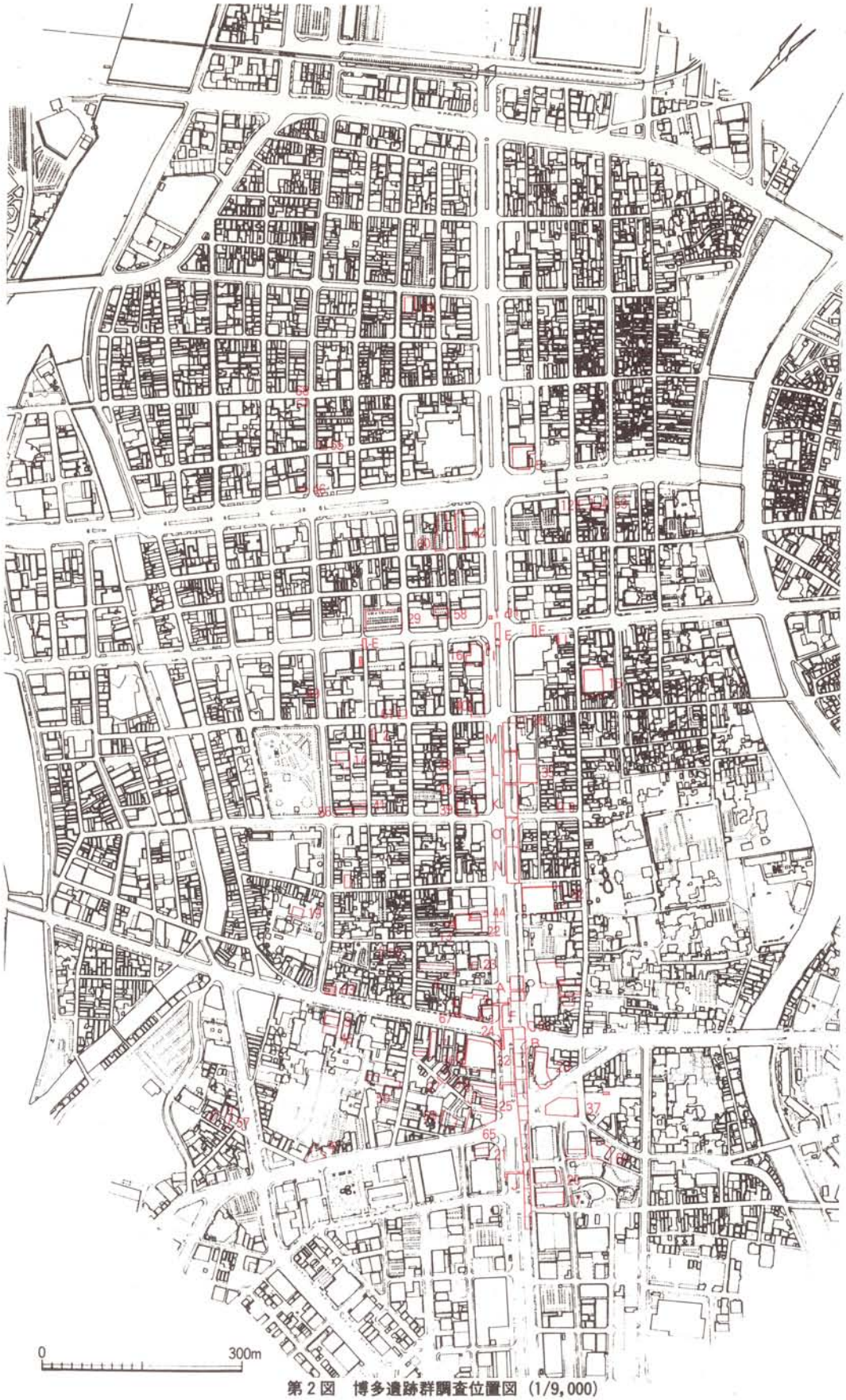
遺跡の立地する砂丘は大きく「息の濱」と「博多濱」と呼ばれる２つの砂丘に分かれ、その境はおよそ現在の地下鉄１号線にある。内陸側の「博多濱」は祇園町交差点を中心とする地域に最高位があり、それから北西側にはいったん谷が入る。砂丘の形成は博多濱から息の濱に拡大していき、それに並行した遺跡の拡大が考えられている。

## 2）周辺の遺跡

博多遺跡群がある福岡平野は「魏志倭人伝」に記されている「奴国」に比定され、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代以降、重要な遺跡が分布する。春日丘陵には須玖岡本遺跡をはじめとして、その周辺の須玖永田、須玖坂本、須玖唐梨、赤井手遺跡など墳墓、青銅器工房などが検出され、他の弥生集落を圧倒した様相を呈している。春日丘陵から北では弥永原、井尻、五十川、那珂、比恵遺跡などの遺跡が間断無く続いていく。また、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪等が出土した諸岡遺跡等がある。また、砂丘上においても御笠川の東にある堅粕遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居、方形周溝墓が検出され、遺物では五銖銭や銅鏃等が出土している。

古墳時代では那珂川流域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳に始まり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多１号墳、貝徳寺古墳、日拝塚古墳、剣塚古墳という系譜が想定されている。古墳時代後期では536（宣化元）年、筑紫の那の津に官家が設置される。「那津官家」の所在地については福岡市南区三宅に置かれたとする説もあるが、比恵遺跡で大型の倉庫群や建物、柵等が検出され、現在、そこを「那津官家」とする説が有力である。

律令時代になると、福岡平野の最深部に大宰府が置かれ、「遠の朝」として、九州の総監、対外交渉にあたることとなる。また、対外交渉の拠点である鴻臚館（筑紫館）は博多湾岸の那珂川西側の丘陵上で発見された。1987年12月の平和台球場スタンド下の調査にはじまる鴻臚館跡の調査は現在も進行中であり、数々の重要な成果が得られている。




第２図　博多遺跡群調査位置図（1/9,000）

## 3）これまでの調査

博多遺跡群の調査は1977年の高速鉄道（地下鉄１号線）建設に伴う調査に始まり、都市計画道路博多駅築港線関係の調査や民間・公共事業に伴う75次の調査が行われてきて、現在も調査進行中である。その結果、中世都市「博多」と呼ぶに相応しい多くの遺構、遺物が検出された。それに加え、弥生時代に始まり、古墳時代、古代の遺構、遺物も検出され、博多遺跡群は弥生時代から近世、現代に至る複合遺跡であることが判明した。

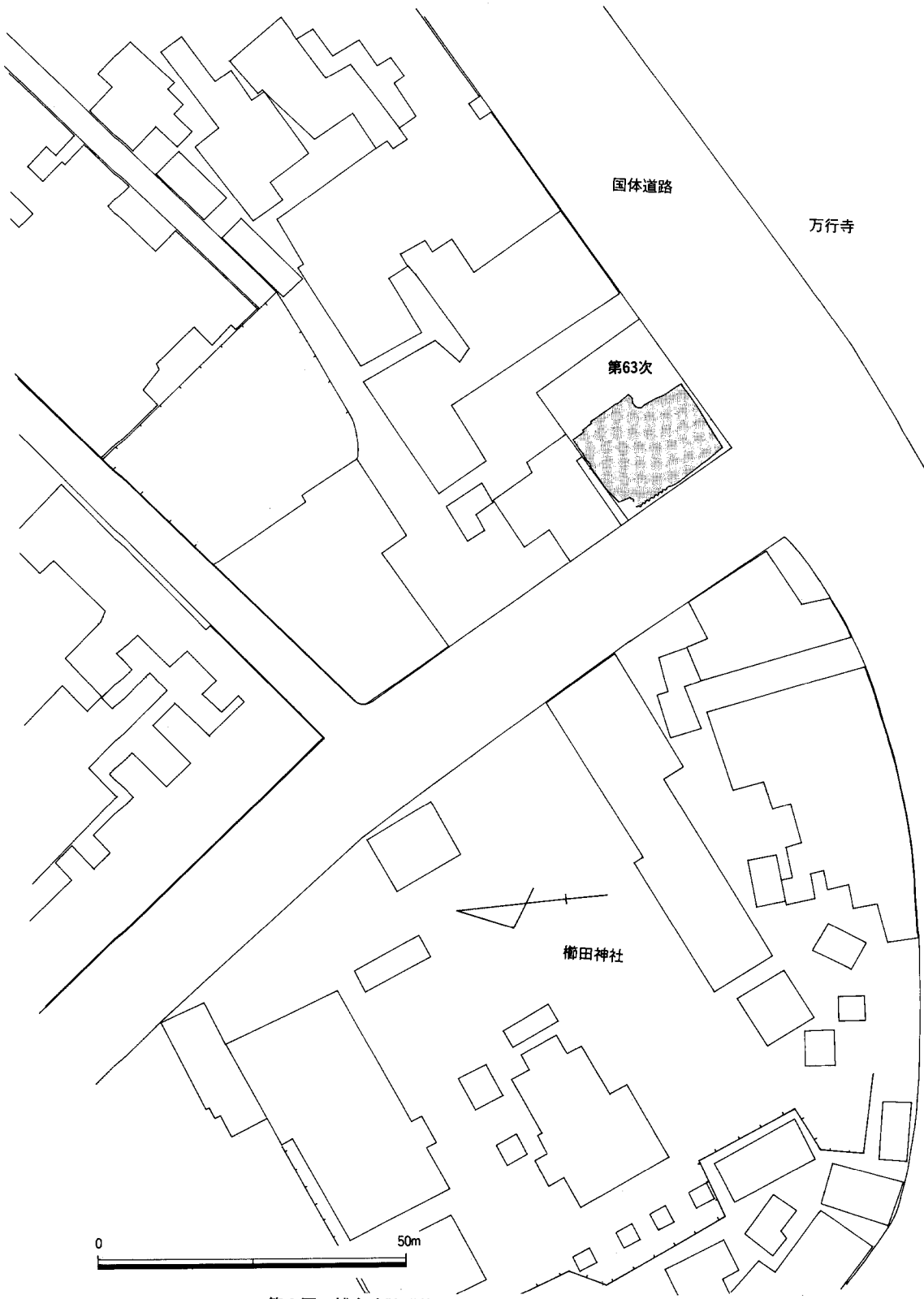
遺跡を時期毎に概観すると、遺跡の初現は弥生時代前期まで遡る。この時期の遺物としては板付Ⅱ式土器や金海式甕棺片等が出土している。中期前半には祇園交差点を中心とする砂丘の微高地に竪穴式住居や甕棺墓が営まれる。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、砂丘の拡大に伴って、北の上呉服町や店屋町まで遺跡は広がるが、中心はやはり祇園町を中心とする地域にある。この地域では竪穴式住居跡や方形周溝墓（第17、20、24、27、32次他）、玉造り工房（第17次）や製鉄関連遺構（第59次、65次）、遺物では山陰系、東海系の搬入土器が検出されている。また、第28、31次調査地点では全長56ｍ以上の前方後円墳（博多１号墳）が検出されている。この古墳は埴輪等から５世紀初頭に位置づけられ、那珂川流域に展開した首長墓の１つと考えられている。

律令時代では博多遺跡群には良好な遺構は少ないが、石帯、銅製帯金具、墨書土器、円面硯、皇朝十二銭、鴻臚館式瓦等が数多く出土しており、官衙の存在が推定できる。このほか、越州窯系青磁、邢州窯系白磁、長沙窯系青磁、イスラム陶器等の輸入陶磁器類や緑釉陶器、灰釉陶器等の国産陶器も出土しており、交易の一端を担っていたと考えられる。博多遺跡群の官衙を「鴻臚中島館」とする説もある。

律令体制の崩壊とともに、貿易の中心は鴻臚館から博多に移る。11世紀後半から12世紀半ばには、「宋人百堂」や「大唐街」といった文献の記述から分かるように、博多に中国商人の居住区が営まれ、彼らによる活発な交易活動が始まる。博多遺跡ではこの時期の輸入陶磁器、特に白磁は多量に出土する。第14次調査では波打ち際に捨てられた多量の白磁が山積みになって出土し、貿易船から陸上げの際の壊れた品物を廃棄したものと考えられている。また、近接する第56次調査地点でも多量の白磁を廃棄した土坑などが検出されている。

鎌倉時代になると、文永、弘安の２度の元寇で戦火に巻き込まれるが、その後、鎮西探題が設置され、博多は貿易都市という性格に加え、九州の政治の中心という性格を持つことになる。また、この時期、都市景観にも画期が見られ、息の濱の開発が進み、博多濱、息の濱一体となった都市が形成される。13～14世紀にかけては砂丘の長軸に沿って道路が造られるようになり、第35次調査地点では幅６ｍ程の道路が、第40次調査地点ではそれと交差すると考えられる道路が検出されている。これに見られる町割りは豊臣秀吉による「太閤町割り」が行われるまで続くことになる。




第３図　博多遺跡群第63次調査地点位置図（1/1,000）

## 第１表　博多遺跡群調査地点一覧表（1991年３月現在）

公共事業関係

| 符号 | 調査番号 | 調査原因 | 所　在　地 | 調査面積(㎡) | 調査期間 | 報告書 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 7725 | 地下鉄建設 | 御供所町 | 1,412 | 77.12～78.11 | 高速鉄道Ⅳ・Ⅴ | 店屋町工区・本体部A・B |
| B | 7833 | 〃 | 御供所町他 | 4,500 | 79.3～12 | 高速鉄道Ⅵ・Ⅶ | 祇園町工区・E～Q |
| C | 7835 | 〃 | 店屋町・上呉服町他 | 200 | 78.11～79.5 | 高速鉄道Ⅶ | 呉服町工区 |
| D | 7949 | 〃 | 博多駅前１丁目他 | 4,500 | 79.12～80.8 | 高速鉄道Ⅶ | 博多駅前工区 |
| E | 8037 | 〃 | 上呉服町 | 100 | 81.3 | 高速鉄道Ⅶ | 呉服町換気塔 |
| F | 8038 | 〃 | 冷泉町・祇園町 | 435 | 80.10～12 | 高速鉄道Ⅶ | 祇園駅２・３号出入口 |
| G | 8148 | 〃 | 御供所町 | 70 | 81.9 | 高速鉄道Ⅶ | 祇園駅４号出入口 |
| H | 8149 | 〃 | 祇園町 | 184 | 81.10～11 | 高速鉄道Ⅶ | 祇園駅５号出入口 |
| I | 8150 | 〃 | 上呉服町・中呉服町 綱場町・店屋町 | 380 | 81.4～5 | 高速鉄道Ⅶ | 呉服町出入口 |
| J | 8435 | 〃 | 博多駅前２丁目 | 215 | 84.4 | 高速鉄道Ⅶ | 祇園駅Ｐ２出入口 |
| K | 8224 | 道路拡張 | 上呉服町 | 630 | 82.11～83.3 | 築港線Ⅰ | 築港線第１次 |
| L | 8331 | 〃 | 〃 | 564 | 84.2～9 | 築港線Ⅱ | 築港線第２次 |
| M | 8404 | 〃 | 〃 | 417 | 85.1～12 | 築港線Ⅲ | 築港線第３次 |
| N | 8527 | 〃 | 御供所町 | 383 | 85.12～86.6 | 築港線Ⅳ | 築港線第４次 |
| O | 8653 | 〃 | 〃 | 380 | 86.10～87.2 | 築港線Ⅴ | 築港線第５次 |

民間事業関係

| 次数 | 調査番号 | 調査原因 | 所在地(博多区) | 調査面積(㎡) | 調査期間 | 報告書 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 7810 | 納骨堂建設 | 御供所町・東長寺境内 | 360 | 78.11～79.1 | | 本調査 |
| 2 | 7928 | ビル建設 | 店屋町 | 約100 | 79.4 | | 立会、土層図作成 |
| 3 | 7929 | 納骨堂建設 | 祇園町・萬行寺境内 | 240 | 79.11 | | 本調査 |
| 4 | 7930 | ビル建設 | 冷泉町7-1 | 1,100 | 79.12～80.3 | 博多Ⅰ・Ⅱ、図版編 | 本調査 |
| 5 | 7931 | 〃 | 下呉服町346 | | 79.12 | | 試掘調査 |
| 6 | 7932 | 〃 | 冷泉町155 | 640 | 80.3～4 | | 本調査 |
| 7 | 8023 | 〃 | 祇園町130 | 210 | 80.6～8 | | 本調査 |
| 8 | 8024 | 本堂建設 | 御供所町・東長寺境内 | 600 | 80.8～10 | | 本調査 |
| 9 | 8025 | ビル建設 | 上呉服町75 | | 80.9 | | 試掘調査・碇石出土 |
| 10 | 8026 | 〃 | 冷泉町474-9 | 54 | 80.12 | 博多Ⅰ | 本調査 |
| 11 | 8027 | 〃 | 御供所町3-30 | | 80.12 | | 試掘調査 |
| 12 | 8127 | 〃 | 中呉服町152・153 | | 81.6 | | 試掘調査 |
| 13 | 8128 | 〃 | 駅前１丁目121～127 | | 81.7 | | トレンチ調査 |
| 14 | 8129 | 〃 | 店屋町4-15 | 255 | 81.8 | | 本調査 |
| 15 | 8130 | 駐車場建設 | 上呉服町569 | 100 | 81.8 | | 試掘調査 |
| 16 | 8131 | ビル建設 | 店屋町246～248 | 150 | 81.9 | | 本調査 |
| 17 | 8132 | 〃 | 駅前１丁目98 | 910 | 81.11～82.2 | 博多Ⅲ | 本調査 |
| 18 | 8156 | 〃 | 駅前２丁目8-14 | | 82.1 | | 試掘調査駅前センタービル(地図範囲外) |
| 19 | 8323 | 社務所建設 | 上川端町櫛田神社境内 | 200 | 83.4 | | 本調査 |
| 20 | 8324 | ビル建設 | 駅前１丁目99 | 980 | 83.3～7 | 博多Ⅲ | 本調査 |
| 21 | 8325 | 〃 | 駅前２丁目181他 | 150 | 83.5～6 | 博多Ⅲ | 本調査 |
| 22 | 8327 | 〃 | 冷泉町189他 | 840 | 83.9～84.2 | 博多Ⅲ | 本調査 |
| 23 | 8334 | 本堂建設 | 冷泉町龍宮寺境内 | 約300 | 84.2 | | 本調査 |
| 24 | 8433 | ビル建設 | 冷泉町1-1 | 250 | 84.4～5 | 博多Ⅳ | 本調査 |
| 25 | 8434 | 〃 | 祇園町1-1 | 100 | 84.5～6 | 博多Ⅴ | 本調査 |
| 26 | 8506 | 〃 | 上呉服町34 | 134 | 85.5～6 | 博多Ⅵ | 本調査 |

| 次数 | 調査番号 | 調査原因 | 所在地(博多区) | 調査面積(㎡) | 調査期間 | 報告書 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 8507 | ビル建設 | 祇園町1-1 | 350 | 85.5～6 | 中部埋文報告Ⅱ | 本調査 |
| 28 | 8508 | 〃 | 御供所町70-2 | 1,745 | 85.5～8 | 博多Ⅶ | 本調査 |
| 29 | 8509 | 〃 | 綱場町22-67 | 330 | 85.7～9 | 博多Ⅷ | 本調査 |
| 30 | 8605 | 〃 | 御供所町36･37･38･39 | 495 | 86.5～7 | 博多Ⅸ | 本調査 |
| 31 | 8606 | 〃 | 御供所町65・66 | 160 | 86.5～7 | 博多Ⅹ | 本調査 |
| 32 | 8608 | 〃 | 祇園町21-1 | 約1,000 | 86.5～7 | | 本調査 |
| 33 | 8618 | 〃 | 祇園町8他 | 898 | 86.7～11 | 博多11 | 本調査 |
| 34 | 8645 | 〃 | 冷泉町238-2他 | 40 | 86.10～11 | | 本調査 |
| 35 | 8648 | 〃 | 上呉服町56 | 655 | 86.11～87.5 | 博多12 | 本調査 |
| 36 | 8725 | 〃 | 祇園町42他 | 332 | 87.8～10 | 博多13、同16(補足) | 本調査 |
| 37 | 8740 | 〃 | 博多駅前1丁目129他 | 1,427 | 87.12～88.3 | 博多16 | 本調査 |
| 38 | 8805 | 〃 | 店屋町1-30 | 366 | 88.4～8 | | 本調査 |
| 39 | 8806 | 〃 | 店屋町2・3・4他 | 612 | 88.5～8 | 博多14 | 本調査 |
| 40 | 8833 | 〃 | 呉服町251他 | 565 | 88.9～12 | 博多15 | 本調査 |
| 41 | 8834 | 〃 | 店屋町4-10 | 60 | 88.9 (2日間) | | 本調査 |
| 42 | 8843 | 〃 | 綱場町8-25 | 710 | 88.12～89.6 | 博多17 | 本調査 |
| 43 | 8852 | 〃 | 店屋町8-9 | 240 | 89.1～4 | 博多18 | 本調査 |
| 44 | 8857 | 〃 | 冷泉町201-3 | 178 | 89.2～3 | 博多19 | 本調査 |
| 45 | 8862 | 納骨堂建設 | 祇園町4-50 | 248 | 89.3～6 | 博多20 | 本調査 |
| 46 | 8903 | 共住建設 | 古門戸町1 | 150 | 89.4～5 | | 本調査 |
| 47 | 8911 | ビル建設 | 祇園町390-2、393 | (438) | 89.4 | | 立会 |
| 48 | 8915 | 共住建設 | 御供所町40他 | 263 | 89.5～8 | | 本調査 |
| 49 | 8916 | 駐車場建設 | 上川端町272、273 | 90 | 89.5 | | 本調査 |
| 50 | 8918 | 共住建設 | 祇園町317他 | 730 | 89.6～10 | 博多21 | 本調査 |
| 51 | 8925 | 〃 | 祇園町154-1・2 | 200 | 89.6～7 | | 本調査 |
| 52 | 8929 | 防水水槽 | 博多駅前1丁目155-1 | 29 | 89.6～7 | | 本調査 |
| 53 | 8930 | 給油所建設 | 中呉服町154他 | 190 | 89.6～7 | | 本調査 |
| 54 | 8941 | 店舗建設 | 冷泉町2丁目128-2 | (99) | 89.7 | | 立会 |
| 55 | 8942 | 事業所建設 | 奈良屋町61-1 | 128 | 89.8～9 | | 本調査 |
| 56 | 8943 | 庁舎建設 | 店屋町4-1他 | 476 | 89.9～90.2 | | 本調査 |
| 57 | 8947 | ビル建設 | 祇園町557 | 184 | 89.10 | 博多22 | 本調査 |
| 58 | 8948 | 〃 | 綱場町20、21-1、21-2 | 70 | 89.10 | 博多23 | 本調査 |
| 59 | 8957 | 駐車場建設 | 祇園町187-226 | 226 | 89.11～90.2 | | 本調査 |
| 60 | 8959 | ビル建設 | 綱場町115他 | 730 | 89.11～90.5 | | 本調査 |
| 61 | 8962 | 共住建設 | 店屋町182-1-5 | 95 | 89.12～90.1 | 博多24 | 本調査 |
| 62 | 8963 | ホテル建設 | 御供所町195他 | | 89.12～91.2 | | 本調査 |
| 63 | 8974 | 共住建設 | 冷泉町90-3他 | 275 | 90.2～4 | 本報告 | 本調査 |
| 64 | 8976 | ビル建設 | 博多駅前1丁101 | 620 | 90.2～7 | | 本調査 |
| 65 | 9017 | 〃 | 祇園町161-1 | | 90.7～12 | | 本調査 |
| 66 | 9022 | 〃 | 御供所町129-1他 | 170 | 90.7～9 | | 本調査 |
| 67 | 9028 | 共住建設 | 冷泉町1-6 | | 90.8 | | 本調査 |
| 68 | 9042 | 老人ホーム | 古門戸町98-1他 | | 90.11～91.1 | | 本調査 |
| 69 | 9055 | 事業所建設 | 奈良屋町267 | 260 | 90.12～91.1 | | 本調査 |
| 70 | 9062 | ビル建設 | 冷泉町338他 | 571 | 91.2～91.5 | | 本調査 |

# 4　調査の概要

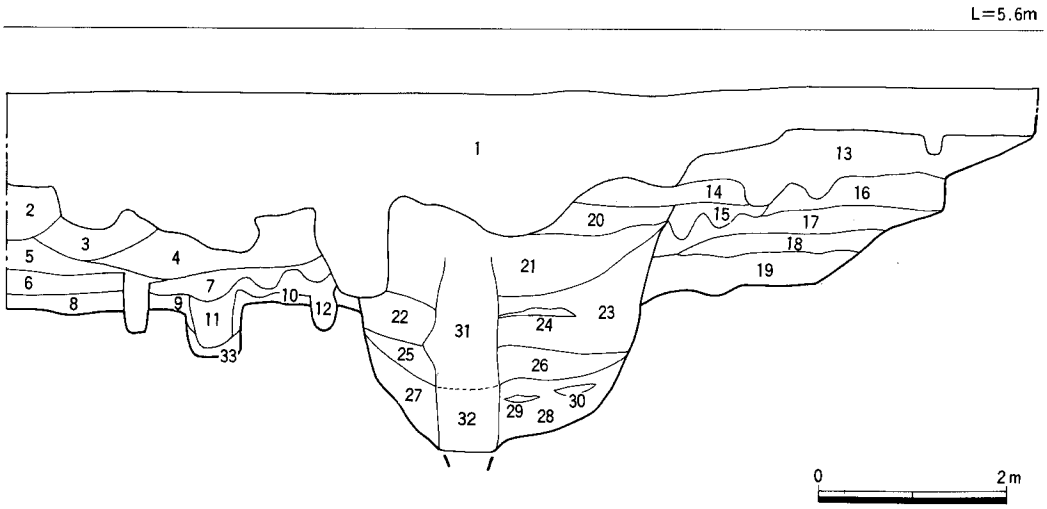
## 1）調査経過

発掘調査は、工事の基礎杭打ち、周囲のフェンス取付などが終了した平成２年（1990）２月13日より開始した。まず重機（バックホー）を用いて、試掘で確認された地表下1.5m前後までの攪乱部を除去した。この標高約3.5mを第Ⅰ面としてまず調査を行い、以後順次掘り下げ第Ⅱ面、第Ⅲ面の調査へと進んだ。調査区内に基礎杭や、西北側の貯水槽構築のための方形に組まれた鋼矢板などがあり、きわめて困難な調査環境であったが、特に事故もなく、４月20日に第Ⅲ面の実測を終え、調査を完了した。

調査にあたっては便宜的にＡＢＣＤの４区に分け、遺構・遺物の位置をたとえば第Ⅰ面Ａ区、第Ⅲ面Ｃ区などと表記した。調査対象面積は513.33㎡であったが、対象地内に調査事務所を建てざるを得なかったことと、安全のため法面を大きくとったため調査面積は第Ⅰ面で275㎡にとどまった。第Ⅲ面までの総調査面積は825.0㎡であった。

## 2）層序

今回の調査では一部周囲に土留めの鋼矢板を打ち込み、またこれまでの建物の基礎などによ




1. 近・現代の攪乱
2. 暗褐色砂質土（炭化物混る）
3. 淡黒褐色砂質土（炭化物混る）
4. 淡灰黒色砂質土（淡褐色粘質土塊、炭化物混る）
5. 暗褐色砂質土（焼土層）
6. 暗褐色砂
7. 淡灰黒色砂質土（炭化物混る）
8. 褐色砂
9. 褐色砂（８と同じ）
10. 褐色砂（８と同じ）
11. 暗褐色砂
12. 淡黒褐色砂質土（炭化物混る）
13. 淡黒褐色土（炭化物混る）
14. 暗褐色砂質土（炭化物混る）
15. 黄褐色砂質土
16. 暗褐色砂質土（炭化物混る）
17. 淡黒褐色砂質土（炭化物混る）
18. 暗褐色砂質土（焼土層）
19. 暗褐色砂質土
20. 暗褐色砂質土（黄褐色粘質土混る）
21. 暗褐色砂質土（炭化物混る）
22. 淡黒褐色砂質土、褐色砂の互層
23. 淡黒褐色砂質土、褐色砂の互層（22と同じ）
24. 褐色砂
25. 暗褐色砂
26. 暗褐色砂（25と同じ）
27. 褐色砂
28. 褐色砂（27と同じ）
29. 淡黒褐色砂
30. 淡黒褐色砂（29と同じ）
31. 淡黒褐色砂質土（炭化物混る）
32. 淡黒褐色砂質土
33. 茶褐色砂

**第４図　調査区東壁土層図（1/80）**

る攪乱が著しく、明瞭な層序をとらえる箇所がほとんどなかった。第４図に示したのは攪乱が少なく、層序が比較的明瞭な東壁の北側部分である。上部から地山近くまで近現代の攪乱が及んでいる。中央にはSE0050があり、その両側の層は若干の切込みがあるものの、比較的水平な堆積状況を示している。現地表から地山（黄色砂）までの深さは南側で2.10ｍ、北側で2.30ｍ。SE0050により南北に分割されてるが、４層と17層、５層と18層またその下の19層と６～12・33層は後者がやや細かく分層されているものの同一層である。SE0050の時期は出土遺物などから12～13世紀代と考えられる。とすればこの井戸が切り込む南側の15～19層およびそれと同一層の４～12・33層はそれ以前の層とする。このうち最下層の６～12・33層では中世の遺物は全くなく、奈良～平安前期、あるいは古墳時代の遺構・遺物を確認した。これからすると標高4.00ｍ前後を12～13世紀、4.00～3.20ｍを11～12世紀、3.20～2.80ｍを９世紀以前の生活面としてとらえられよう。しかし調査区内では後世の遺構、とくに井戸が深く掘り込まれ、このような層序関係を面的に追うことはきわめて困難であった。また調査は標高3.50ｍの４・17層部分からであり、攪乱が激しかったこともあるが、13世紀以後の生活面そのものは結果的に調査できなかったことになる。

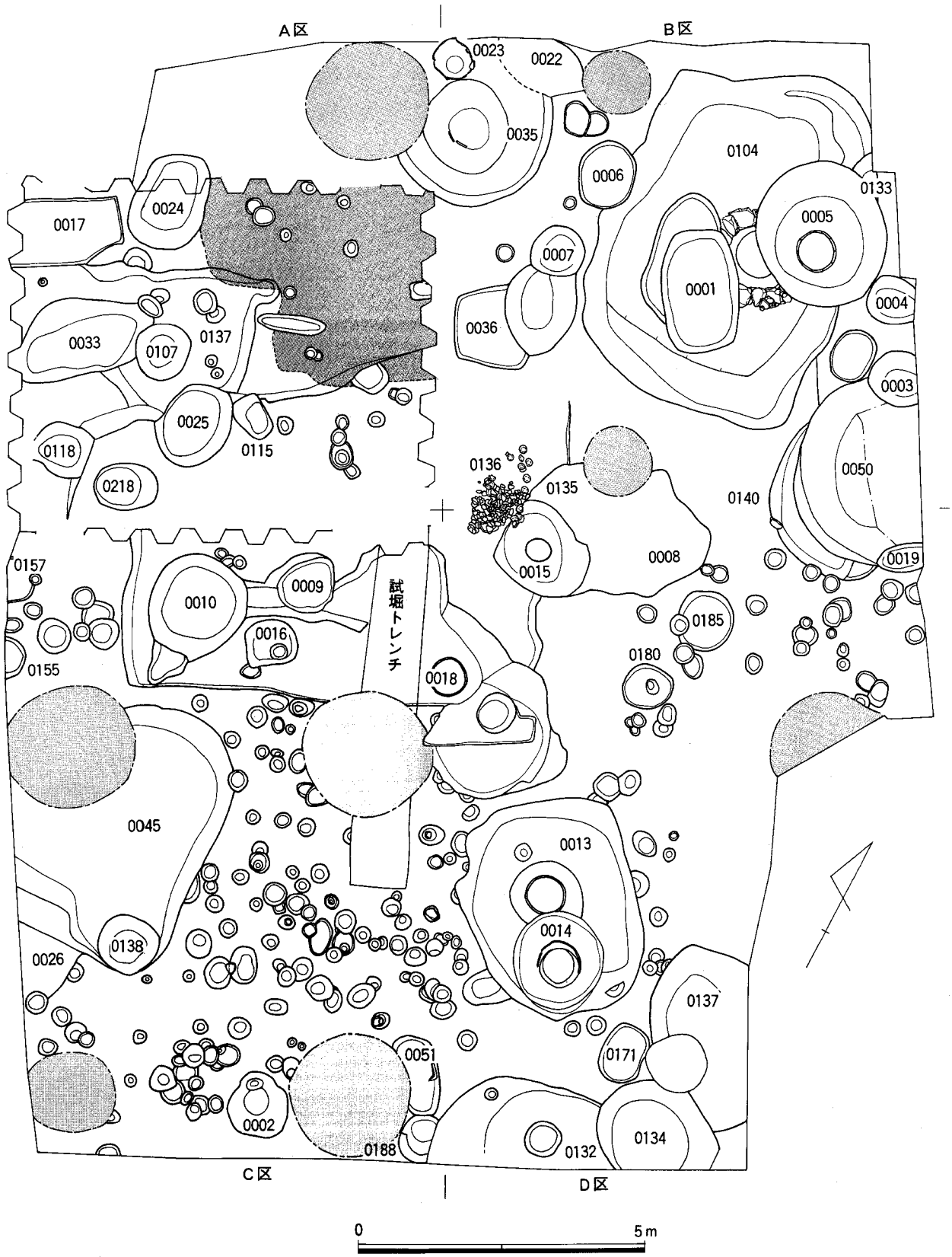
### ３）第Ⅰ～Ⅲ面の概要

第Ⅰ～Ⅲの３つの面は層位的に厳格なものではなく、また大まかには遺構の時代的な推移が面ごとにたどれるものの、場所によっては時代の異なる複数の遺構が同じ面に現れるなど、不安定な要素が多い。したがって今回の報告では、この項で各面の概要をまず記し、次の項以降では面にこだわらず遺構の種別などにより遺構および出土遺物の説明を行う。

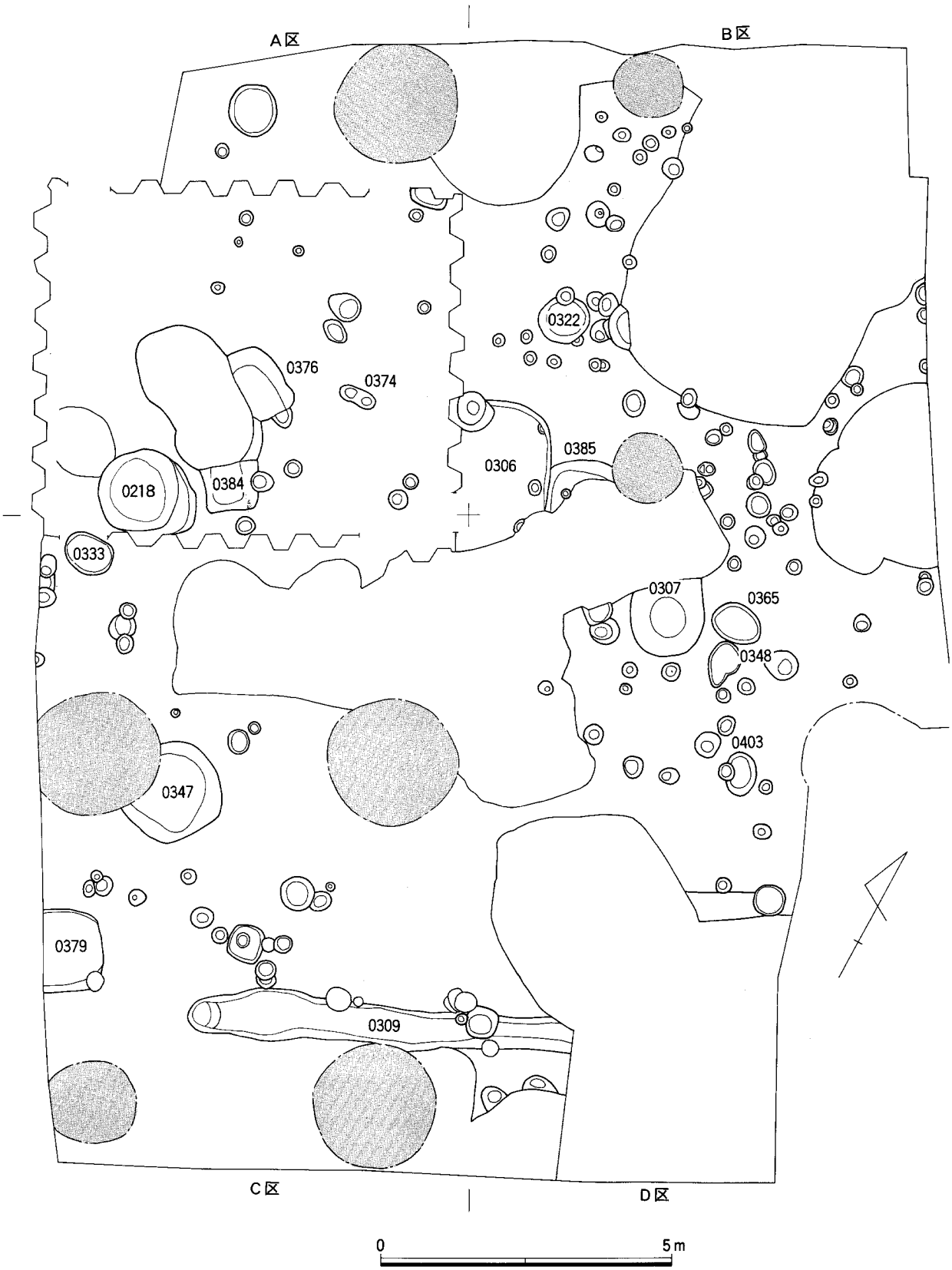
第Ⅰ面（第５図）標高3.5ｍ前後。全体に近・現代の攪乱がまだ残っている。また江戸時代を前後する井戸が、東側部分を中心に広がる。これらの攪乱や遺構のおよばない部分には、12～13世紀の遺構がある。特にＡ区、Ｃ区ではこの時期の土坑やピットがみられた。しかし重複が著しい。井戸・土坑・ピット・墓などを検出したが、時期的には近世以降の遺構が多い。

第Ⅱ面（第６図）第Ⅰ面から約20㎝掘り下げた所を第Ⅱ面とした。上層から掘り込まれた遺構を除けば、遺構そのものは多くない。東側部分でもピットを多く確認した。他には井戸、土坑がある。時期も比較的単純になり、11～12世紀を中心とする。

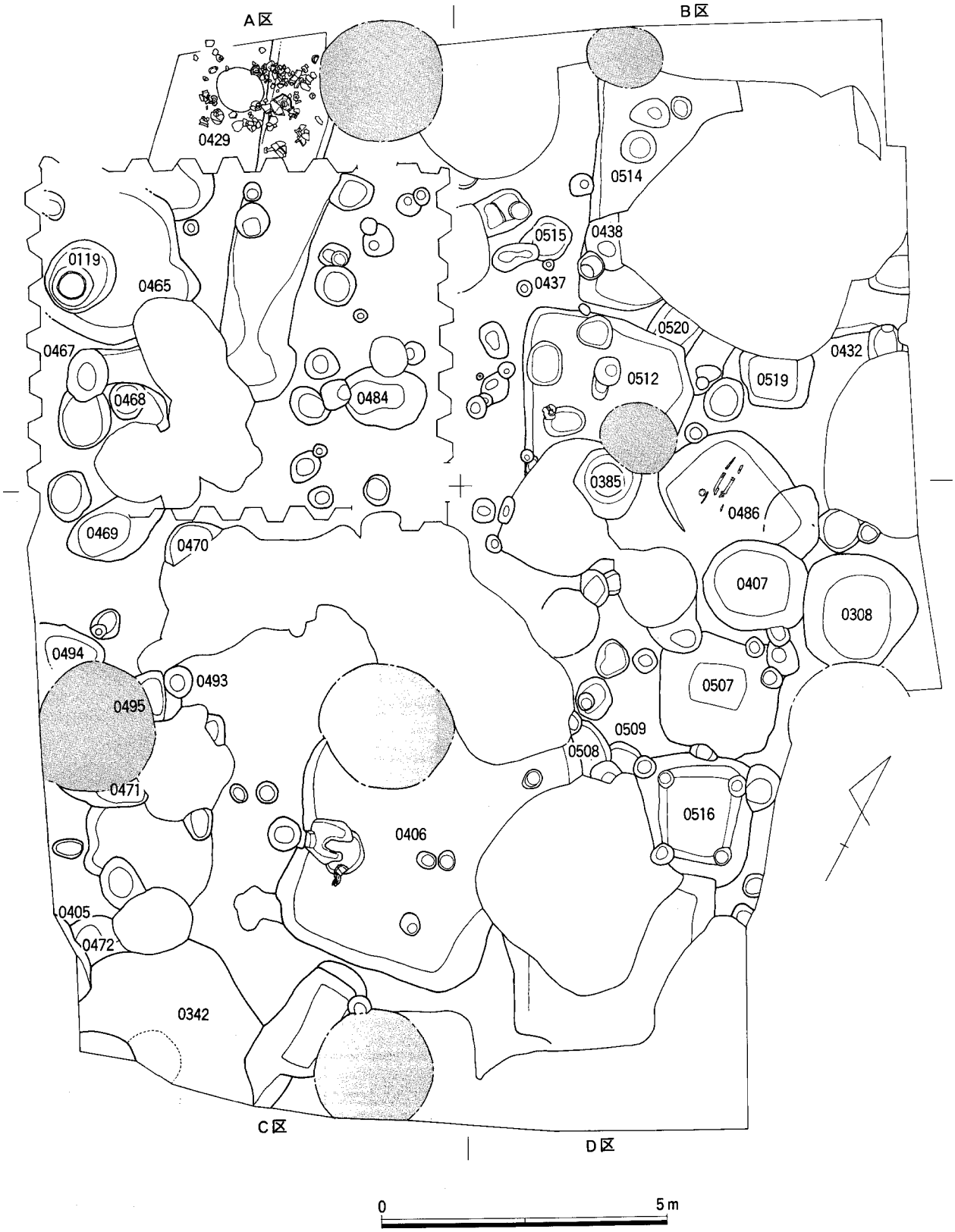
第Ⅲ面（第７図）第Ⅱ面からさらに20㎝掘り下げた黄白色砂の地山上で検出した面である。一部の遺構は第Ⅱ面精査時に確認できた。遺構としては竪穴住居、井戸、土坑、土壙墓などがある。時期は古墳時代前期と、奈良時代の２時期に分かれている。遺構覆土は古墳時代のものが淡い土色を呈する。弥生時代については遺物・遺構の検出はなかった。




第５図　第Ｉ面全体図（1/100）




第6図　第Ⅱ面全体図（1/100）




第７図　第Ⅲ面全体図（1/100）

# 5　検出遺構

## 1）竪穴住居

竪穴住居としては古墳時代前期および奈良時代の4基を確認した。奈良時代のSC0406は比較的形態をとどめていたが、他は後世の遺構などによりほとんど原形を損なっている。掘立柱建物は、各面に明確な柱穴が多数あり、また第Ⅰ面では土間状の粘土の広がり（SB0106、12世紀代）も確認したが、建物としてまとめることができなかった。ただ完形の土師器をもったピットがあり、これは掘立柱建物建築の際の祭祀と考えられる。ここでは竪穴住居についてのみ触れる。

**SC0406**（第8図）　第Ⅲ面D区で検出。北壁はすでに破壊され、東西壁も破損の度合が著しいが、南北に長軸をとる長方形竪穴住居であることがうかがえる。東西幅3.70m、南北長は残存するが東北コーナーからすれば5.00m前後になるものと考えられる。深さは0.50m。竈は西壁の中央やや南よりに設けられる。平面U字形で、壁体には粘土を用いている。竈前面には浅いくぼみがあり、その南部分で須恵器が出土している。床面東側部分で4個のピットを確認したが、この住居の柱穴であるかどうかは問題が残る。奈良時代。

**SC0429**　第Ⅲ面A区西北隅。土師器がほぼ3.00m四方に平担に広がる。壁、柱穴、炉などは検出できなかったが、竪穴住居としてとらえてよいであろう。SK0219、SD0428に切られる。古墳時代前期。

**SC0512**（第8図）　第Ⅲ面B区で検出。南壁をすでに破壊されていたほか、東壁も後世の遺構などにより削平を受けている。東西幅3.00m前後の方形を呈するものであろうか。深さ0.52m。竈などの施設は見あたらず、柱穴も断定できない。奈良時代。

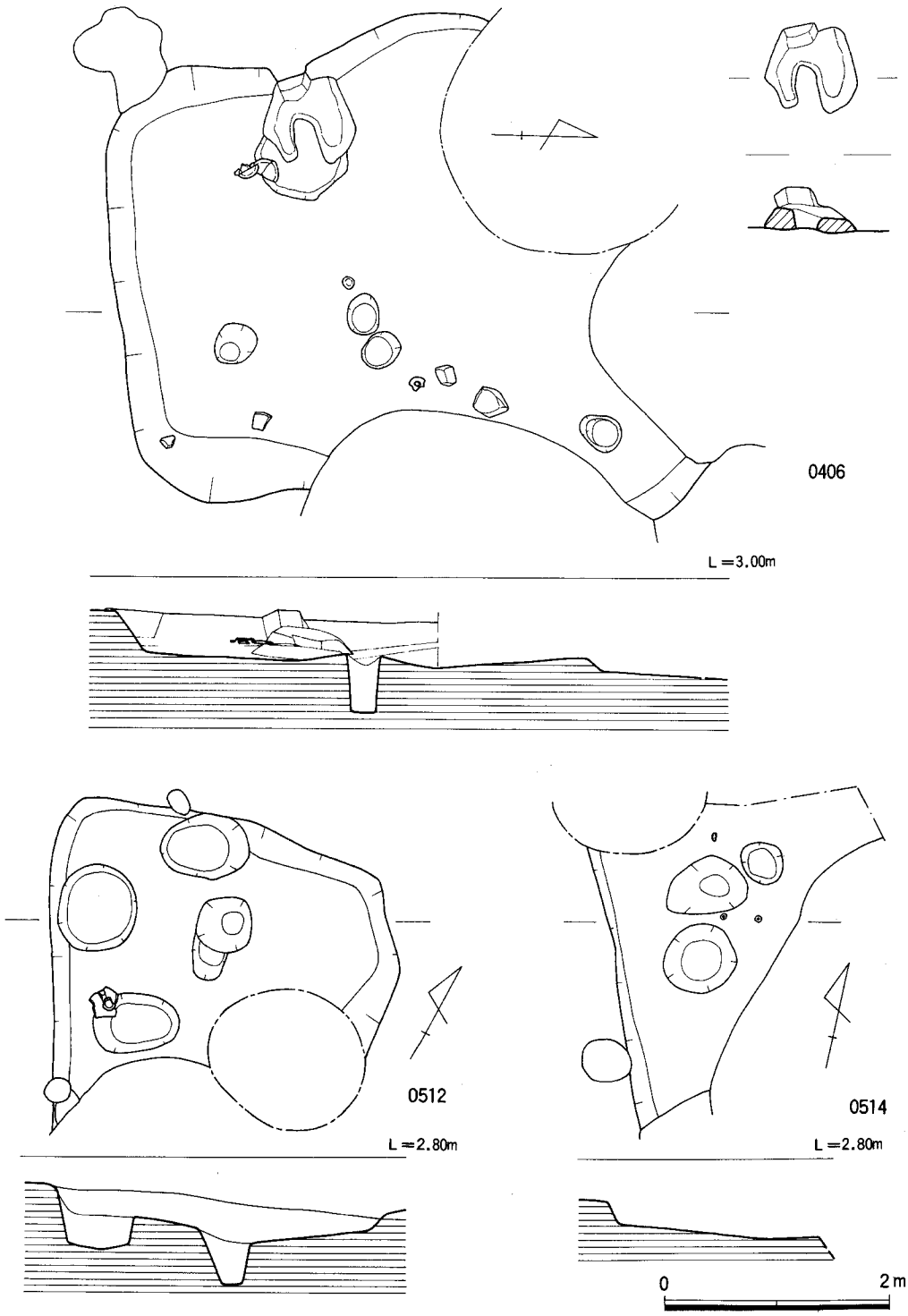
**SC0514**（第8図）　第Ⅲ面B区、SC0512のすぐ北側で検出。SE0104に大きく破壊され、西壁の一部と床面がわずかに残存するだけである。深さ0.30m前後。方形もしくは長方形の住居だったと考えられる。SK0438に切られる。古墳時代前期。

## 2）井戸

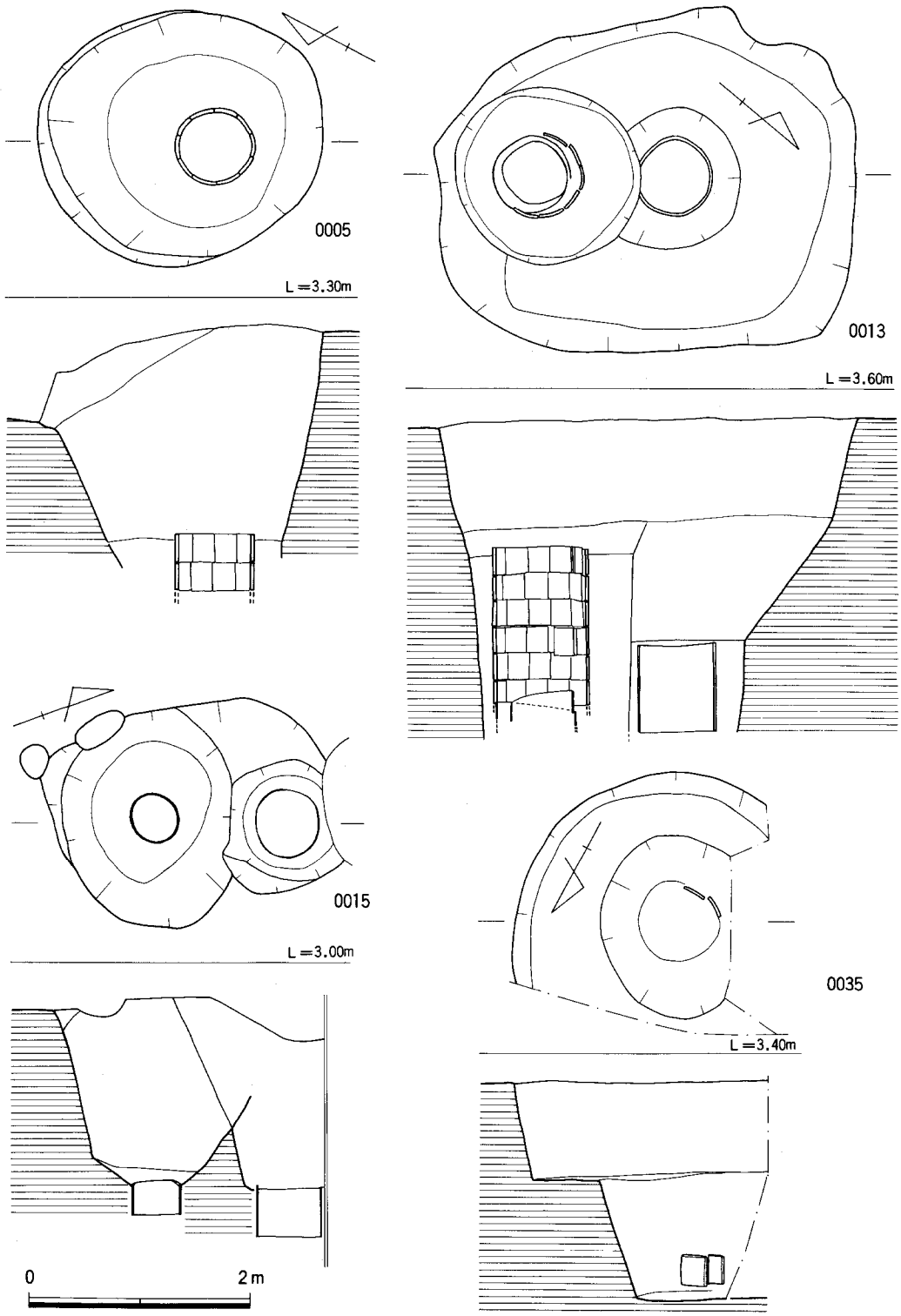
奈良時代から江戸時代にいたる18基の井戸を検出した。他にコンクリート造りの現代井戸を第Ⅰ面D区で確認したが、番号はふらなかった。

**SE0005**（第9図）　第Ⅰ面B区で検出した瓦組井戸。上面径2.25～2.60mの円形掘り方のやや西寄りに、瓦10枚組の井戸側を設ける。井戸側の内径は0.72mで、下部の二段分を確認。SE0104を切る。中世～近世の遺物が出土。江戸時代以降。

**SE0013**（第9図）　第Ⅰ面D区。長さ3.75m、幅3.00mの上面長方形状掘り方をもつ。その底面やや北寄りに内径0.67m、厚さ0.03m、高さ0.80mの瓦質の筒を据え、井戸側とする。土




第8図　SC0406・0512・0514竪穴住居実測図（1/60）




第９図　SE0005・0013・0015・0035・0385井戸実測図（1/60）

管組井戸と称される類であろうか。SE0014に切られる。唐津焼を含め近世陶磁器類などが出土。江戸時代以降。

**SE0014**（第９図） SE0013の南側掘り方内に造られた瓦組井戸。上面径1.60～1.70ｍの円形の掘り方をもち、その中央に井戸側を設ける。井戸側は瓦10枚組からなり、内径は0.70m。井戸側内の下部には水溜と考えられる曲物が２段みられる。奈良時代以降の多量の遺物が出土している。近代か。

**SE0015**（第９図） 第Ⅰ面Ｂ・Ｄ区境で検出。掘り方は上面径約2.00ｍの円形を呈し、その中央最下部に径0.40ｍ、厚さ0.02ｍ程度の桶を置き、井戸側としている。桶そのものは腐食が著しい。SE0385を切る。井戸側内から近世の七輪片が出土しているが、周囲の攪乱が著しかったことを考え合わせれば、他の遺物が示す12～13世紀の所産とすることもできる。

**SE0018** 第Ⅰ面Ｃ・Ｄ区境で検出した瓦組井戸。近代以降の攪乱により周辺が荒され、掘り方の形態は不明。瓦は９枚組で、上面より二段分を確認。以下は未掘である。中世の遺物が多いが、井戸そのものは江戸時代以降。

**SE0022** 第Ⅰ面Ｂ区北壁境で検出。土留めの鋼矢板と基礎杭によりほとんど旧状をとどめない。瓦組井戸であった可能性が高い。SE0035を切っており、江戸時代以降のものと考えられる。

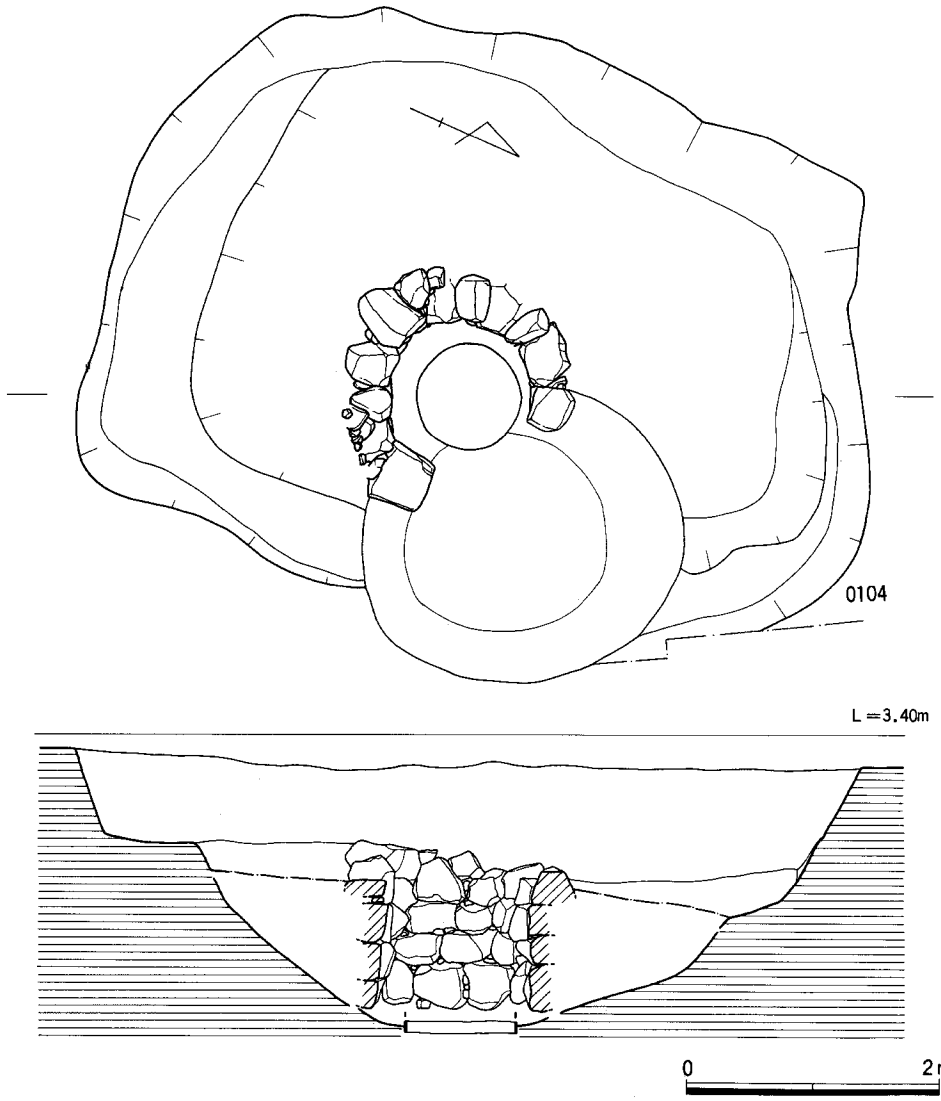
**SE0035**（第９図） 第Ⅰ面Ａ・Ｂ区北境で検出した瓦組井戸である。上面径3.00ｍ弱の円形掘り方のほぼ中央に、瓦組の井戸側を設ける。瓦は最下部に２枚しか残存しないが、９～10枚組に復元できる。掘り方は深さ0.90ｍ付近でいったん平坦面をつくり、以下はほぼ井戸側の外径ほどにすぼまる。SK0022、SX0023に切られる。江戸時代のもの。

**SE0050** 第Ⅰ面Ｂ区東壁境で検出。第４図の東壁断面にその土層をうかがうことができる。壁面で法をつけたため、底面は未検出。井戸側は曲物か桶と考えられる。SK0140を切り、SK0003、SK0019に切られる。12～13世紀か。

**SE0104**（第10図） 第Ⅰ面Ｂ区。石組円筒形井戸。南北方向に主軸をとる長さ6.40ｍ、幅4.50ｍの長方形掘り方の中央西寄りに、石組の井戸側を設ける。石組には50㎝角以下の花崗岩の割石を用いており、下部から四段目までが残存する。内径は1.20ｍ程度。東北側はSE0005により破壊されている。石組最下部の内側には径0.85ｍの曲物による水溜をつくる。この水溜内で石臼を検出している。16世紀の築造か。

**SE0107** 第Ⅰ面Ａ区。第Ⅰ面検出時には井戸側内の覆土上部を掘っており、第Ⅱ面に至って井戸と判明した。第Ⅰ面のSK0139が掘り方と考えられるが、切り合いが激しく形態は不明。井戸側は径1.00ｍ前後、深さ1.65ｍ。井戸側材は残存しないが、桶もしくは曲物であろう。SK0137を掘り方と考えても、12～13世紀におさまる時期である。

**SE0119**（第11図） 第Ⅰ面Ａ区。SE0107の西側で当初円形土坑として確認したが、第Ⅲ面に




第10図　SE0104井戸実測図（1/60）

至って井戸と判明した（全体図では第Ⅲ面に図示）。上面径1.20mの円形掘り方の南寄りに曲物の井戸側を置く。曲物は内径0.45m。腐食が著しくほとんど原形をとどめない。掘り方は検出面から深さ0.30mで平坦面をつくり、それ以下はほぼ井戸側の外径ほどにすぼまる。SK0017、SK0033に切られる。遺物は少ないが、11～12世紀の井戸。

**SE0132**（第11図）　第Ⅰ面D区南壁で検出。東側をSE0134に切られる。この付近は土留めの矢板が打ち込まれてなかったため、深掘りができず、最下部までは未掘である。掘り方は楕円

形状で、その中央に桶あるいは曲物の井戸側の痕跡がうかがわれる。12世紀後半。

**SE0134**（第11図） 第Ⅰ面Ｄ区。上面径2.30ｍの円形掘り方のほぼ中央に井戸側を置く。土層からみれば、井戸側は径0.60ｍ前後の桶か曲物。深さ1.65ｍ。13世紀。

**SE0137** 第Ⅰ面Ｄ区。調査区東壁部分に当たり未完掘。中央部分に井戸側らしき痕跡があり、井戸と考える。掘り方は楕円形状。南側を現代のコンクリート井戸に破壊されている。出土遺物からすれば、12～13世紀。

**SE0218**（第11図） 第Ⅰ面Ａ区。上面径1.10ｍのほぼ円形の掘り方をもち、その中央やや西側寄りに井戸側を置く。井戸側は径0.55ｍ前後の桶もしくは曲物と考えられるが、木質は残存しない。掘り方壁面はほぼ垂直に立つ。第Ⅰ面では井戸側内部のみを発掘しており、第Ⅱ面に至って井戸と確認した。出土遺物は少ないが、12世紀代と考えられる。

**SE0307**（第11図） 第Ⅰ図Ａ区。上面径1.30ｍの円形の掘り方をもつ。深さ1.80ｍ。土層をみると深さ1.10ｍ付近から底に向かって幅0.55ｍほどの井戸側の痕跡がある。材は残存しないが、桶もしくは曲物であろう。12世紀前半。

**SE0342**（第11図） 第Ⅲ面Ｃ区西南隅。第Ⅱ面検出時に掘り方を確認した。基礎杭が中央を破壊し、また調査区南壁に南半部かかり全形はうかがえない。上面径4.50ｍの円形掘り方の中央に井戸側を置いたものと考えられる。底部近くには円形の木質の痕跡があり、井戸側は曲物と想定できる。奈良時代。

**SE0385**（第９図） 第Ⅲ面Ａ・Ｂ区境。SE0015に切られ、また上部の攪乱により、掘り方などは不明瞭。井戸側には内径0.55ｍの曲物を用いているが、腐食が著しい。井戸側内の底部には炭、灰が詰まっており、その上部は暗褐色粘質土となっている。11世紀後半から12世紀前半。

## 3）土坑

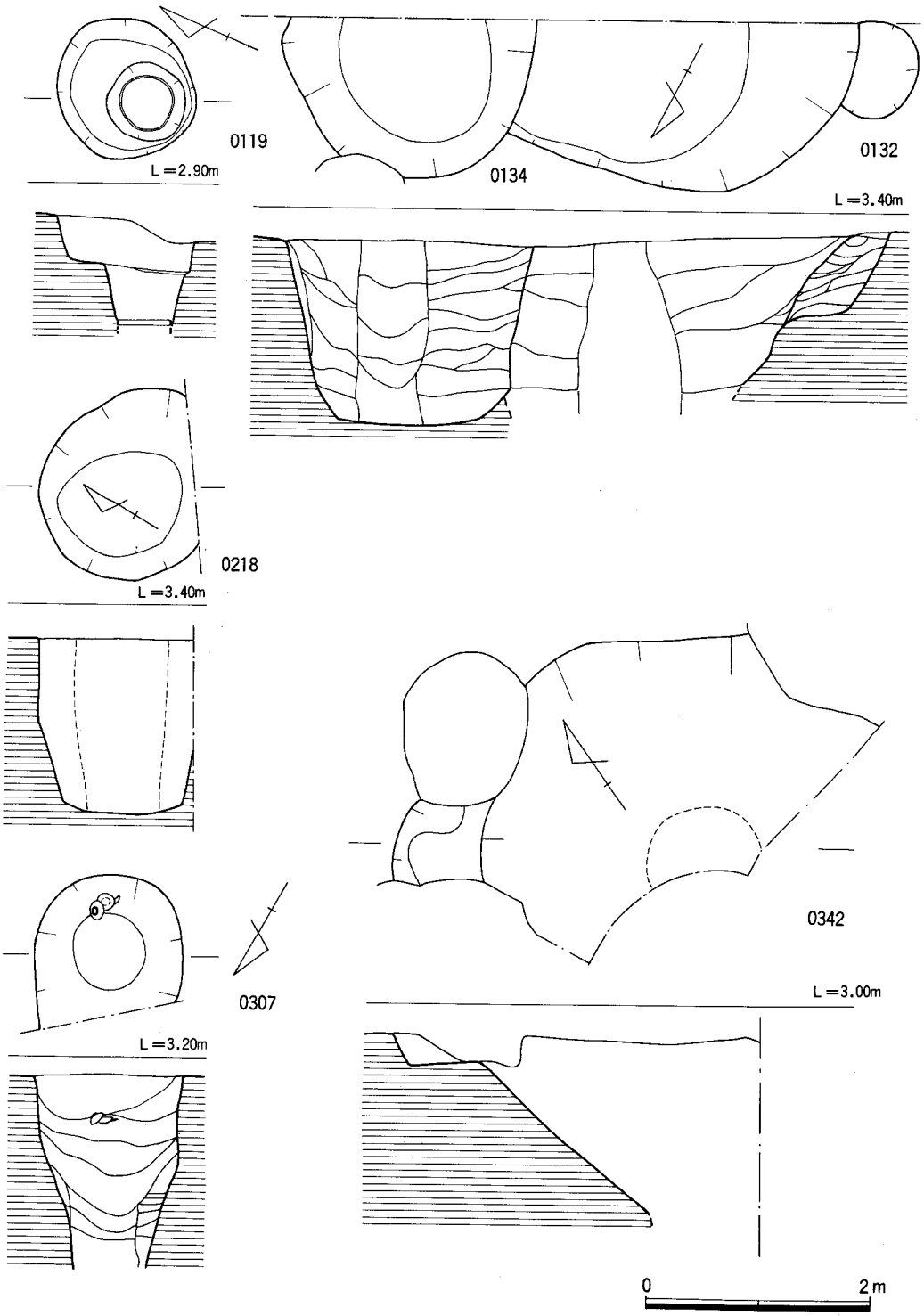
今回の調査でピットについで多かったのが土坑で、近世も含め71基を検出している。形態は多様であるが、円形あるいは楕円形のものが多い。後世の遺構に破壊され原形をとどめないものが多く、ここでは比較的残りがよく、かつ近世以前のものの実測図を挿図としてあげた。

**SK0001** 第Ⅰ面ＡＢ区。SE0104が廃棄された後につくられた長さ2.14ｍ、幅1.40ｍ、深さ0.45ｍの長方形土坑。北から西壁の外側部分には浅い段がつく。近世以降。

**SK0002** 第Ⅰ面Ｃ区。径1.10ｍ、深さ0.25ｍの円形土坑。「徳而」と墨書した同安窯系青磁も出土しているが、近世以降の塵穴。

**SK0003** 第Ⅰ面Ｂ区。径1.00ｍ、深さ0.52ｍ円形土坑。SE0050を切り、東側は調査区東壁にかかる。近世以降の塵穴。

**SK0004** 第Ⅰ面Ｂ区。径1.00ｍ、深さ0.32ｍの円形土坑。中世の遺物も多いが、遺構自体




第11図　SE0119・0132・0134・0218・0307・0342井戸実測図（1/60）

は近世の塵穴。

**SK0006**　第Ⅰ面B区。長さ1.14m、幅1.00mの楕円形土坑。深さは0.20m。出土遺物はないが、SE0104の掘り方南側部分に重複しており、この井戸の廃棄後につくられたものである。

**SK0007**　第Ⅰ面B区。SK0006のすぐ南で検出。径0.90m、深さ0.40mの円形土坑。近代の塵穴。

**SK0008**　第Ⅰ面B区。現代攪乱坑。SE0015、SE0307、SE0385などを破壊しており、これらの遺構の遺物が覆土中にみられる。

**SK0009**　第Ⅰ面C区。径1.00m前後、深さ0.78mの不整円形土坑。周辺は遺構の切り合いが著しく、原形を損なっている。近世の塵穴。

**SK0010**　第Ⅰ面C区。径1.70m、深さ1.15mの円形土坑。近世。

**SK0016**　第Ⅰ面C区。SK0010のすぐ東側で検出。径0.80～0.90mの不整円形土坑。底面までの深さ0.22m。南側に径0.27mのピットがあり、その底は底面より0.33m深くなる。中世の陶磁器類などが少量出土しているだけであるが、遺構自体は近世以降と考えられる。

**SK0017**（第12図）　第Ⅰ面A区。付近は遺構の切り合いが激しく、また西側が調査区外に延び、ほぼ東西に長軸をとる長方形状の土坑としかうかがえない。残存幅1.20m、深さ0.58m。上部に若干の近世遺物を含むが、下層は中世までの遺物にとどまる。鉄釘も出土しており、木棺墓の可能性もある。

**SK0019**　第Ⅰ面B・D区境。調査区東壁にかかり全形はうかがえない。楕円形状の土坑で、幅0.90m、深さ0.13mをはかる。SE0050を切る。近世。

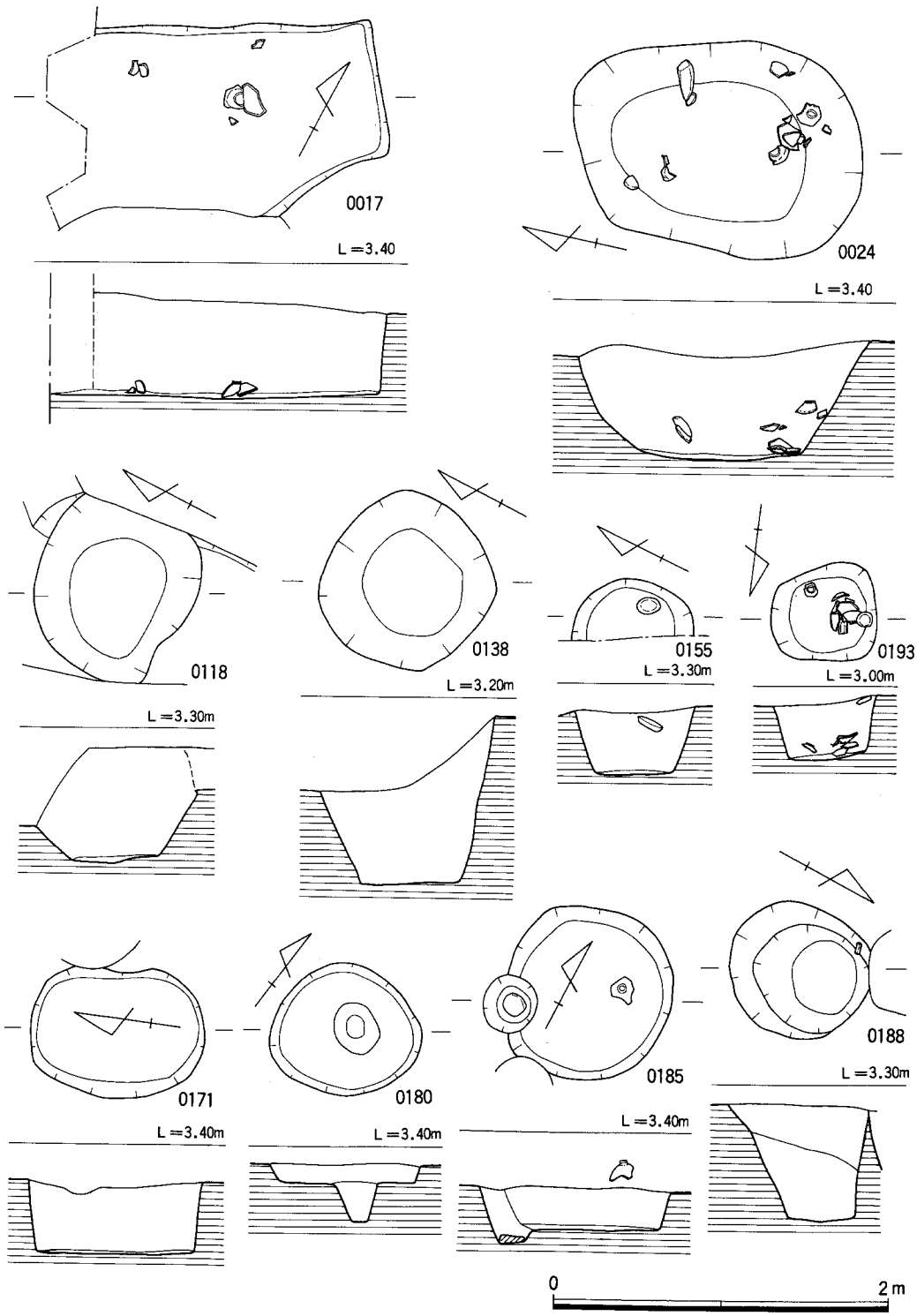
**SK0024**（第12図）　第Ⅰ面A区。主軸をほぼ南北にとる長さ1.69m、幅1.38m、深さ0.62mの楕円形土坑。底面近くから中世陶磁器類が比較的まとまって出土。中世。

**SK0025**　第Ⅰ面A区。長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑で、長さ1.50m、幅1.20m、深さ1.14mをはかる。SE0107掘り方（SK0139）を切る。古代から中世の土器、陶磁器類が出土している。

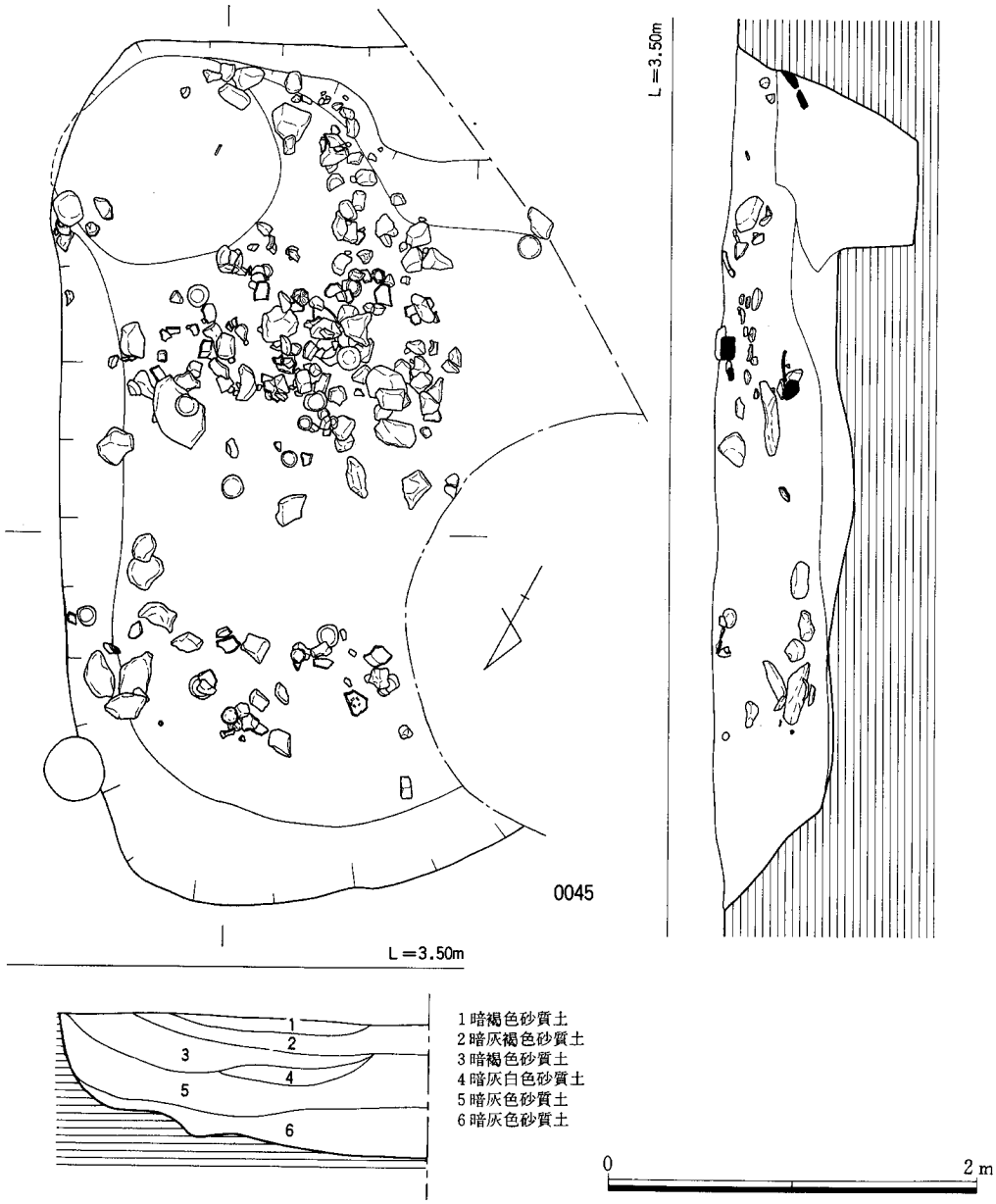
**SK0033**　第Ⅰ面A区。長さ2.50m、幅1.35m、深さ0.34mの不整楕円形土坑。西側がわずか調査区外にかかる。SE0107に切られ、SE0119を切る。古代の土師器片が2片出土しているだけだが、切り合い関係からすれば、中世の遺構である。

**SK0036**　第Ⅰ図B区。長さ1.40m、幅1.30m、深さ0.20mをはかる不整方形土坑である。近世。

**SK0045**（第13図）　第Ⅰ面C区。西側が調査区境に延びるが、長さ4.67m、幅3.00m前後、深さ0.75mの楕円形の大型土坑である。覆土はレンズ状に堆積する。坑内では礫、土師器、輸入陶磁器などが底面から浮いた状態で出土している。底面は平坦。鋳型、フイゴの羽口片などが出土しており、周辺に青銅器鋳造の工房のあった可能性が強い。SK0138に切られ、SK0026




第12図　SK0017・0024・0118・0138・0155・0171・0180・0185・0188・0193土坑実測図（1/40）

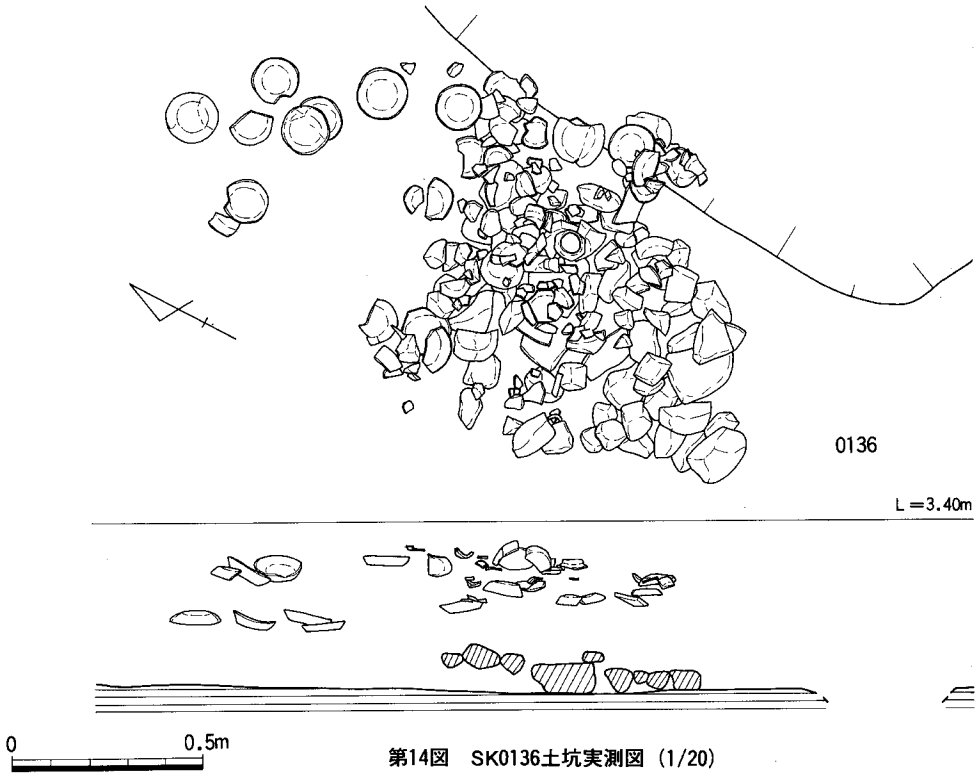



第13図　SK0045土坑実測図（1/40）

を切る。13世紀後半～14世紀前半。

**SK0051**　第Ⅰ面C区。西側を基礎坑に破壊される。楕円形土坑で、長さ1.40m、深さ0.42m。幅は0.70m前後であろう。近世。

**SK0115**　第Ⅰ面A区、SK0025の東に隣接する。不整長方形の土坑で、長さ0.85m、幅0.58m、深さ0.41mをはかる。遺物からすれば中世。




第14図　SK0136土坑実測図（1/20）

**SK0118**（第12図）　第Ⅰ面A区。径1.00m前後、深さ0.66mの不整円形土坑。上面は近代の攪乱で削られている。第Ⅲ面にいたって全形を確認できた。13世紀。

**SK0133**　第Ⅰ面B区。大半が調査区東壁にかかり、またSE0005に切られ、全形がうかがえない。残存部からすると円形状の土坑か。深さ0.50m。SE0104の掘り方を切る。12世紀。

**SK0135**　第Ⅰ面B区、SE0008北側の基礎杭に破壊され、ほとんど原形をとどめない。円形状の土坑と考えられる。近世。

**SK0136**（第14図）　第Ⅰ面B区。第Ⅰ面検出時に、完形の土師器皿がまとまって出土した。周囲を精査したが、遺構の掘り込みは見当たらなかった。土師器皿は南北1.40m、東西1.00mほどの広がりをもち、南側はSE0015によって切り込まれている。土師器を残して掘り下げると、南側の深さ0.20m部分で南北幅0.90mの集石に当たった。10～20cm角の礫を用い、部分的に重なり合うものの、ほとんどは一層に敷つめている。遺構の性格は不明。中世。

**SK0138**（第12図）　第Ⅰ面C区、SK0045の南側部分を切った状態で検出。径1.00m前後、深さ1.00mの略円形土坑で、底面は径0.70mとすぼまる。中世。

**SK0139**　第Ⅰ面A区。SE0107の掘り方になるものであろう。他遺構との切り合いにより明

確さを欠くが、幅2.50m程度の円形になるものと考えられる。

**SK0140**　第Ⅰ面B区。SE0050に切られ全容はうかがえない。西壁は円形状を呈し、東に向かい段を設けて傾斜するようである。径3.00mの不整円形の土坑になるものか。現状で深さ0.42m。中世。

**SK0148**　第Ⅰ面D区。SE0013掘り方に東側を切られる。楕円形土坑で、現状では幅0.64m、深さ0.58m。土師器片のみが出土。中世。

**SK0155**（第12図）　第Ⅰ面C区。調査区西壁に遺構の大半がかかる。円形土坑で、残存幅0.73m、深さ0.42m。坑内東寄りに、底面から0.25m浮いた状態で完形の土師器坏が出土。12世紀後半から13世紀前半。

**SK0157**　第Ⅰ面C区、SK0155のすぐ北で検出。この遺構も大半が調査区西壁にかかる。おそらく方形状の土坑であろう。残存幅0.76m、深さ0.36mをはかる。中世か。

**SK0171**（第12図）　第Ⅰ面D区。長軸をほぼ南北にとる楕円形土坑で、長さ1.02m、幅0.76m、深さ0.32mをはかる。壁面は垂直に立つ。12世紀代か。

**SK0180**（第12図）　第Ⅰ面D区。長さ0.90m、幅0.80mの平面卵状をした円形土坑で、深さは0.10mと浅い。底面中央に径0.25～0.30m、深さ0.24mのピットがある。12～13世紀代。

**SK0185**（第12図）　第Ⅰ面D区。径1.00～1.05m、深さ0.25mの円形土坑。底面から0.30m浮いた状態で、青磁椀が出土している。12～13世紀代。

**SK0188**（第12図）　第Ⅰ面C区。径0.85m、深さ0.70mの円形土坑。北側をSK0051に、また東側をSE0132に切られる。出土遺物はないが、SE0132との関係からすれば12世紀後半以前。

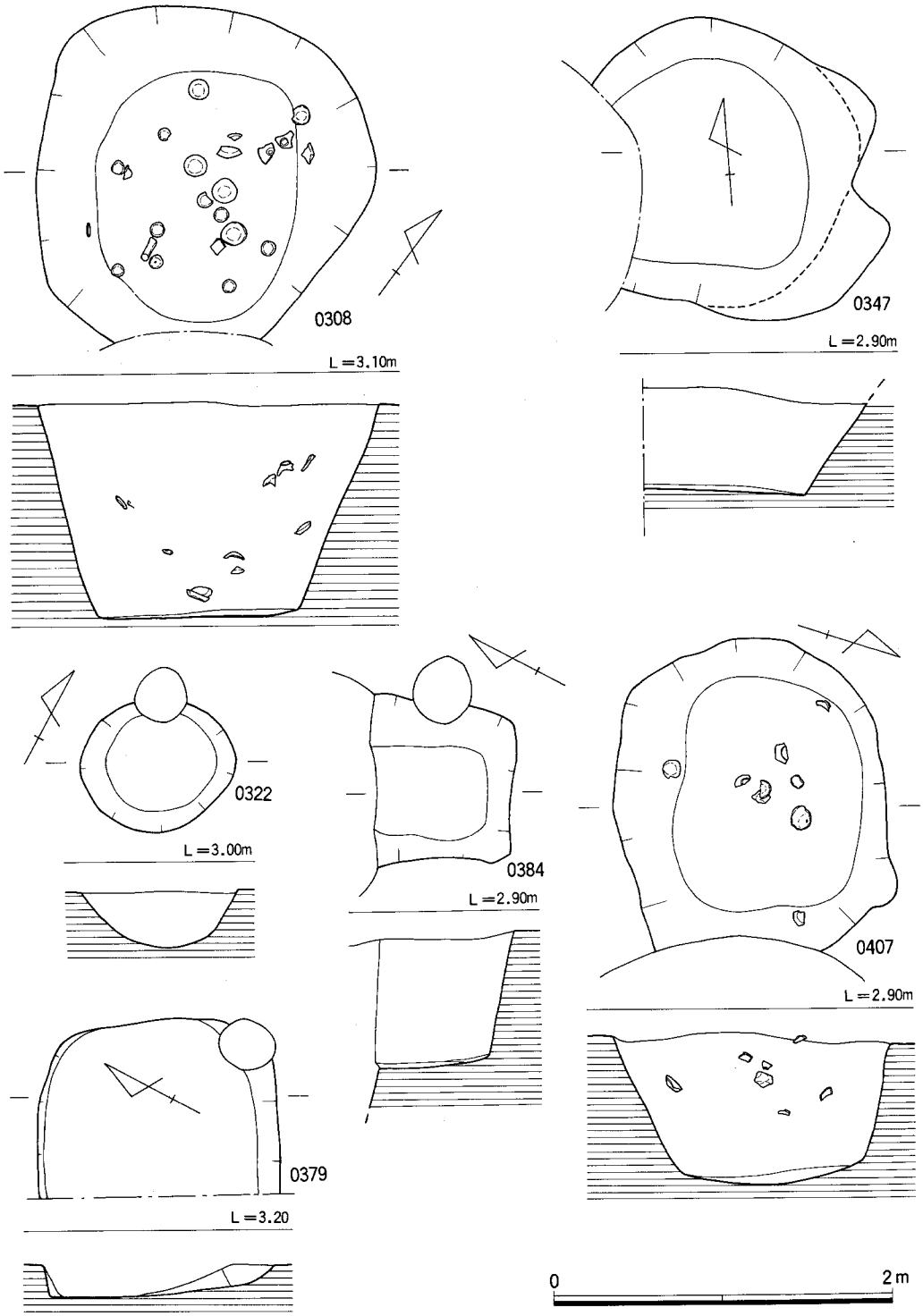
**SK0193**（第12図）　第Ⅰ面A区。幅0.60～0.63mの不整方形土坑。深さ0.34m。覆土は暗灰色粘質土。遺構上面に土師器皿の完形品が、また底面近くから輸入陶磁器類が出土。13世紀。

**SK0219**　第Ⅱ面A区。径0.85m、深さ1.59mの円形土坑である。覆土は水平堆積で、上面から深さ0.55mまでが焼土や炭化物の混じった黄灰色土、さらに厚さ0.35mの黒色粘質土があり、それ以下が粗砂となっている。井戸の可能性も考えられる。13世紀。

**SK0306**　第Ⅱ面B区。周囲を破壊され、北辺部分だけが楕円形状に残る深さ0.19mの土坑である。SX0136の下部構造の可能性もある。12世紀代か。

**SK0308**（第15図）　第Ⅲ面D区で検出。南側上縁を基礎杭で破壊されるが、径2.00mの平面円形状の土坑である。底部に向かいすぼまり、深さ1.25mで長さ1.47m、幅1.17mの平面長方形状の底面に達する。坑内には焼土、炭化物がレンズ状に堆積し、その中から土師器皿、輸入陶磁器などが出土した。西側でSK0407を切る。11世紀後半から12世紀前半。

**SK0322**（第15図）　第Ⅱ面B区。径0.80～0.90mの円形土坑。底面は鍋底状で、深さ0.34m。坑内は黄灰色砂一層である。南北をピットに切られる。奈良～平安時代の遺構か。




第15図　SK0308・0322・0347・0379・0384・0407土坑実測図（1/40）

**SK0333**　第Ⅱ面Ｃ区。北辺を鋼矢板で破壊される。径0.85ｍ、幅0.65ｍ、深さ0.10ｍの浅い楕円形土坑である。12世紀前後。

**SK0347**（第15図）　第Ⅱ面Ｃ区。第Ⅰ面SK0045の北側下面から検出。東壁が崩落し、また西側を基礎杭で破壊され原形を失っている。本来は径1.70ｍ前後の円形土坑と考えられる。深さは0.60ｍ。12世紀代か。

**SK0348**　第Ⅱ面Ｄ区。上面長0.85ｍ、幅0.55ｍの瓢形土坑。深さは0.25ｍ。覆土は暗灰色砂質土であるが、壁面が赤く焼けている。12世紀代か。

**SK0365**　第Ⅱ面Ｃ区。SK0348のすぐ北側で検出。第Ⅲ面のSK0407が埋没した後つくられた長さ0.90ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.46ｍの楕円形土坑。11～12世紀。

**SK0379**（第15図）　第Ⅱ面Ｄ区。西側が調査区外に延び、全形をとどめない。残存幅1.41ｍ、深さ0.20ｍ。おそらく長方形状の土坑になるものであろう。奈良～平安時代の所産である。

**SK0384**（第15図）　第Ⅱ面Ａ区。SK0025に北側を破壊されている。残存幅1.03ｍ、深さ0.81ｍ。長方形状を呈するもので、掘り方が比較的端正なところからすれば土壙墓の可能性も求められる。奈良～平安時代。

**SK0403**　第Ⅱ面Ｄ区。長さ0.74ｍ、幅0.55ｍ、深さ0.44ｍの楕円形土坑。遺物は少ない。奈良～平安時代。

**SK0405**　第Ⅲ面Ｃ区。調査区西南隅外に大半がかくれ、全形がつかめない。検出した北辺からすると楕円形か。深さ0.66ｍ。SK0472、SE0342を切る。奈良～平安時代。

**SK0407**（第15図）　第Ⅲ面Ｃ区。上面は第Ⅱ面で確認したが、発掘したのは第Ⅲ面においてである。東側をSK0308に切られているが、長さ1.90ｍ前後、幅1.63ｍの平面楕円形に復元できる。深さは0.90ｍ。底面もやはり楕円形である。12世紀中頃。

**SK0430**　第Ⅲ面Ｂ区。一帯は遺構の切り合いが激しく、当初この土坑はSX0486同一と考えていたが、掘る過程でそれを切った楕円形土坑であることが分かった。SK0407に南側を切られ、全長は不明。幅1.00ｍ前後、深さ0.45ｍ。奈良～平安時代。

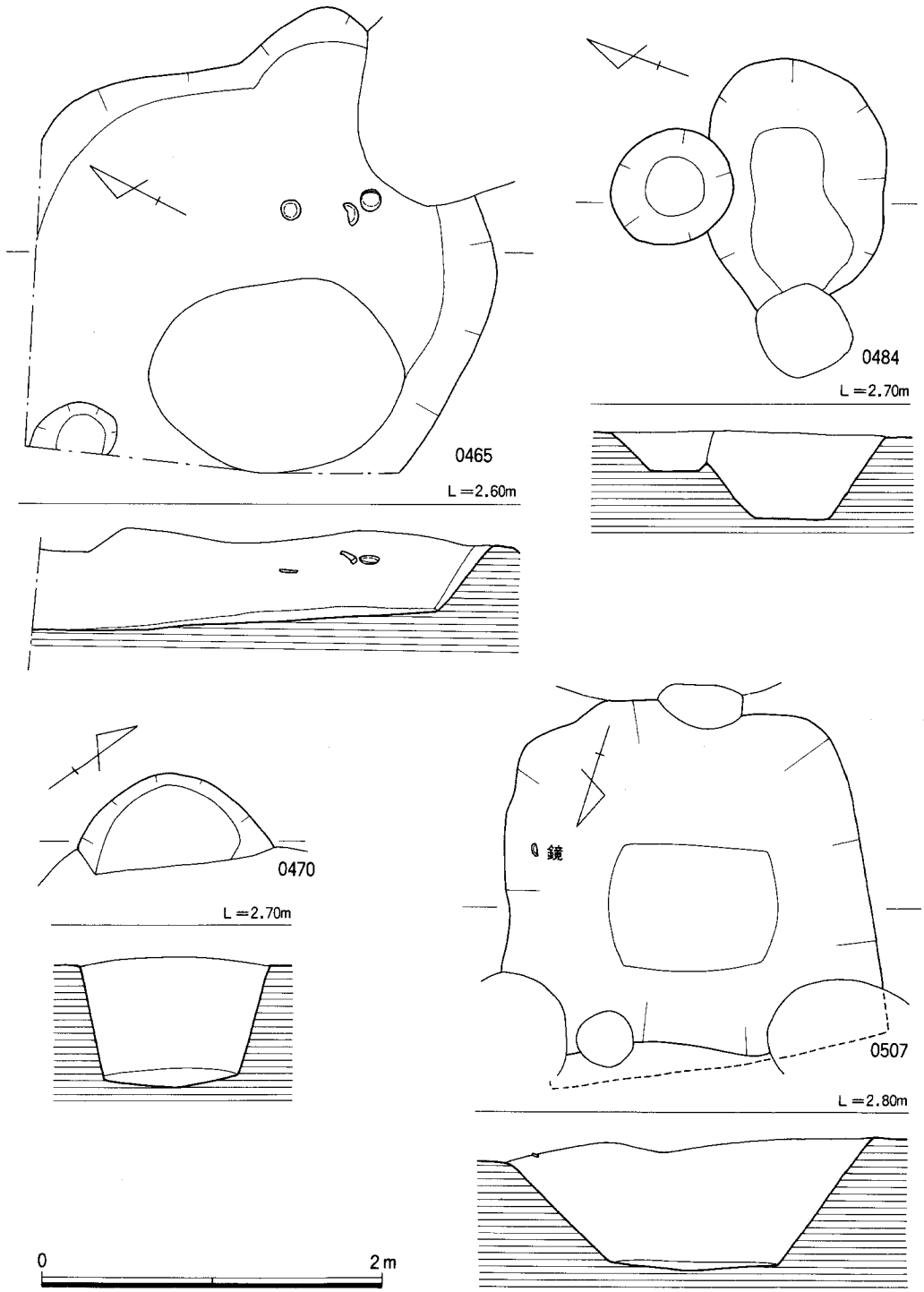
**SK0437**　第Ⅲ面Ｂ区。長さ1.00ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.44ｍの楕円形土坑。底面は瓢形となる。SK0515を切る。奈良～平安時代。

**SK0438**　第Ⅲ面Ｂ区。東側をSE0104に切られるが、径0.94ｍ、深さ0.44ｍの円形土坑として復元できる。SC0154を切る。奈良～平安時代。

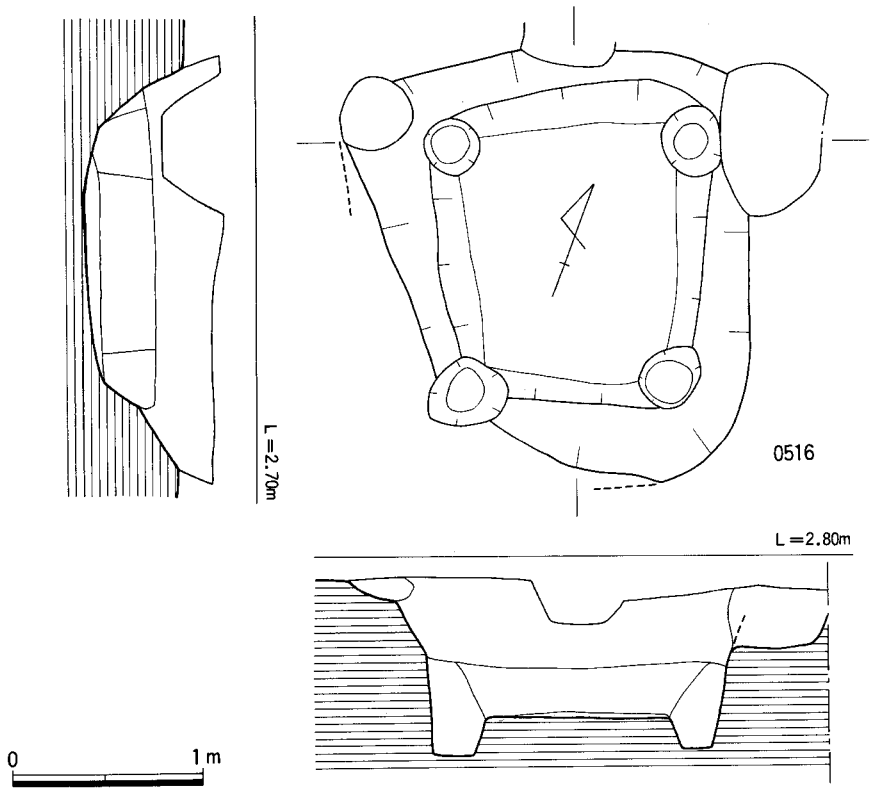
**SK0465（第16図）**　第Ⅲ面Ａ区。SE0119に切られ、また西側が調査区外に延びる。平面長方形もしくは楕円形で、残存幅2.80ｍ。深さ0.61ｍ。底面は平坦である。奈良時代。

**SK0469**　第Ⅲ面Ｃ区。北側をSE0218に、また上面西側をSK0333に切られる。長さ1.50ｍ、幅1.10ｍ、深さ0.90ｍの不整楕円形土坑。奈良～平安時代。

**SK0470**（第16図）　第Ⅲ面Ｃ区。SK0469のすぐ東側にある。SK0010に大半を切られているが、




第16図　SK0465・0470・0484・0507土坑実測図（1/40）




第17図　SK0516土坑実測図（1/40）

径1.16m、深さ0.76mの円形土坑として復元できる。奈良～平安時代。

**SK0471**　第Ⅲ面C区。SK0347と基礎杭に破壊され、南辺部分を残すにすぎない。長方形土坑か。深さ0.45m。奈良時代。

**SK0472**　第Ⅲ面C区。SK0138、SK0405、SE0342に切られ北辺部分を残すだけである。深さ0.28m。円形土坑か。奈良時代。

**SK0473**　第Ⅲ面C区。東南側をSK0138に切られる。復元長1.10m、幅0.70m、深さ0.35mの楕円形土坑。奈良時代。

**SK0484**（第16図）　第Ⅲ面A区。北側と西側をピットに切られる。長さ1.50m前後、幅1.03m、深さ0.50mの楕円形土坑。奈良～平安時代。

**SK0494**　第Ⅲ面C区。南側を基礎杭で破壊され、西側は調査区外に延び、全形を知りえない。底面が西壁手前で立ち上がることからみれば、長方形の土坑となるものか。深さ0.64m。鉄製品が1点出土しただけである。奈良～平安時代か。

**SK0495**　第Ⅲ面C区。基礎杭に西側の大半を破壊されている。長さ0.90mの長方形土坑と考えられ、深さは0.72mをはかる。奈良時代。

**SK0507**（第16図） 第Ⅲ面C区。後世の遺構に切られ、原形を著しく損なっているが、長さ2.10m、幅2.00mの長方形土坑としてとらえることができる。壁面は緩やかに傾斜し、深さ0.78mで長さ1.00m、幅0.75mの長方形の底面に達する。南側でSK0516に切られる。上面から小形仿製鏡片が出土しているが、遺構そのものの時期は奈良時代である。

**SK0508** 第Ⅲ面D区。SC0406などに切られ、ほとんど原形をとどめない。わずかに北辺部分を残すだけである。深さ0.27m。坑内には焼土がみられた。SK0509を切る。奈良時代。

**SK0515** 第Ⅲ面B区。一辺0.70m、深さ0.40mの不整方形土坑。SK0437に切られる。奈良時代～平安時代。

**SK0516**（第17図） 第Ⅲ面C区。後世の遺構にはなはだしく破壊されている。上面は現状で長さ2.25m、幅1.90mの不整長方形である。壁面は深さ0.50m付近でいったん段をなし、さらに下がって長さ1.37m、幅1.10mの長方形の底面となる。上面からの深さ0.73m。この底面の四隅にピットを設けている。4柱を立て、覆屋的なものを築いたのであろうか。これまでの博多の調査でもこの種の遺構が検出されている。SK0507を切る。奈良時代。

**SK0519** 第Ⅲ面B区。北側をSE0104掘り方に切られる。方形もしくは長方形の土坑で、幅1.30m、深さ0.34mをはかる。奈良時代。

**SK0520** 第Ⅲ面B区。北側をSE0104掘り方に、南側をSC0512に切られる。長方形の土坑と考えられ、幅0.85m、深さ0.29mをはかる。奈良時代。

## 4）墓

**SX0023**（第18図） 第Ⅰ面B区。SE0035を切って造られた甕棺墓。上面はすでに削平されている。中から六道銭の寛永通寶が出土。江戸時代。

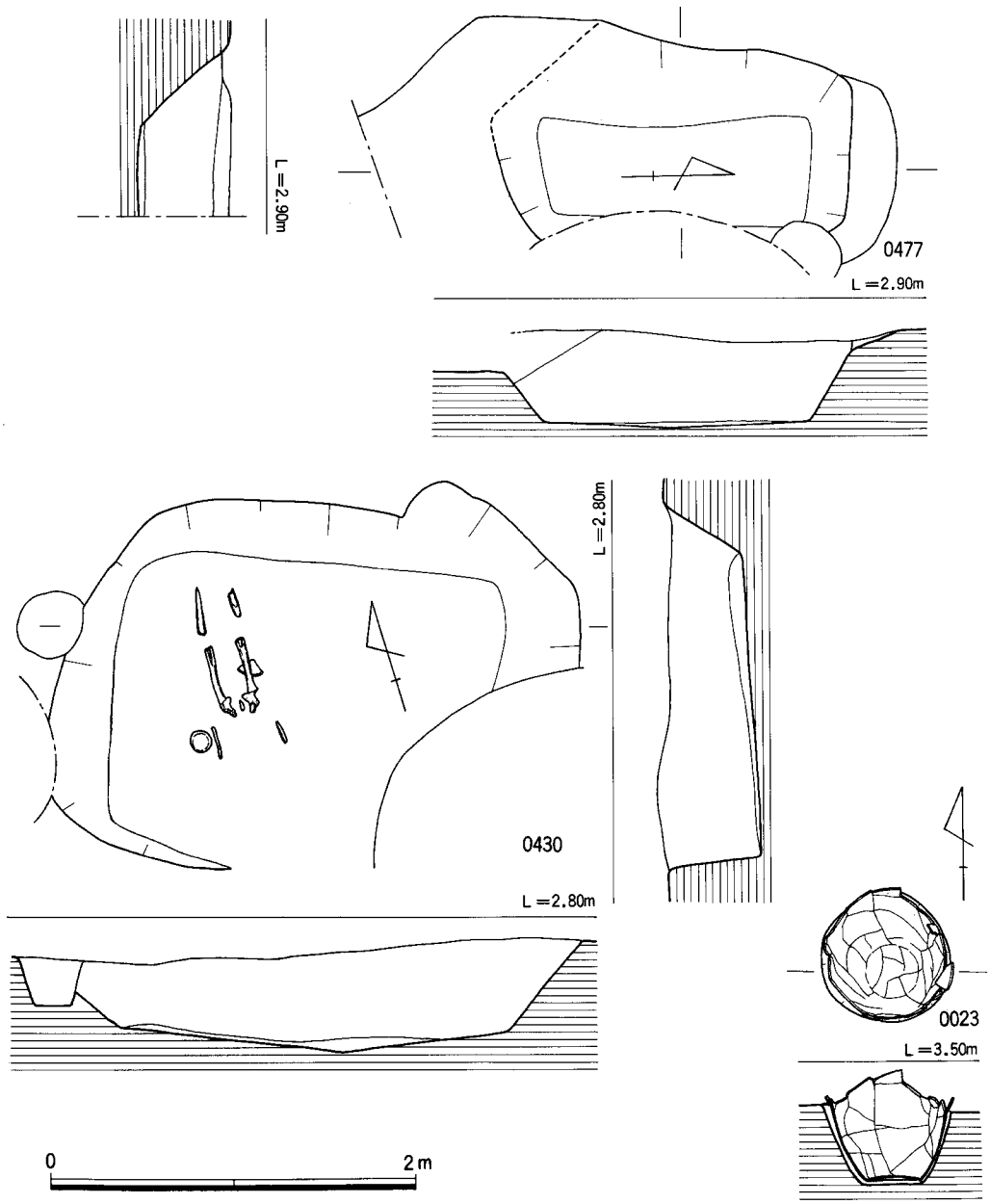
**SX0477**（第18図） 第Ⅲ面D区。長軸をN－3°－Eにとる長方形土壙墓。基礎杭などにより東側を破壊されているが、長さ2.20m、幅1.20m前後として復元できよう。深さは0.53m。奈良時代。

**SX0486**（第18図） 第Ⅲ面B区。後世の遺構による破壊が著しいが、長さ2.00mの長方形墓壙に木棺を置いたものと考えられる。両手および下肢骨が残存していた。頭位はほぼ南で、左手横に土師器坏を副葬している。奈良時代。

## 5）溝

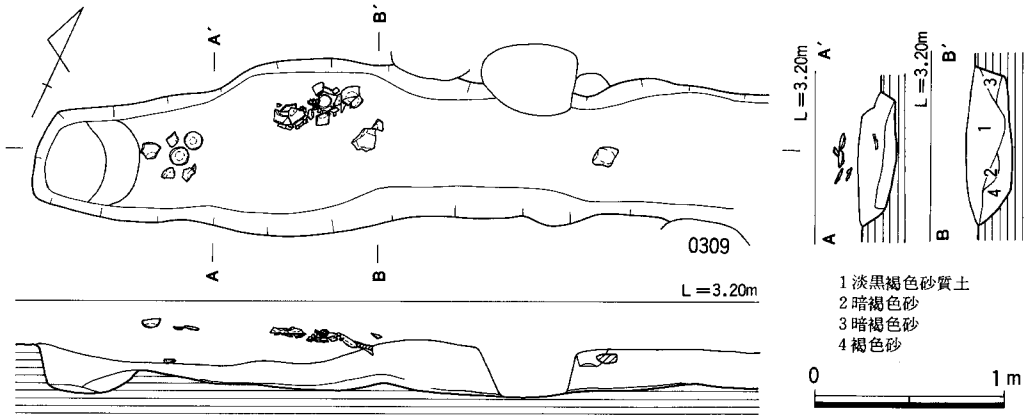
3条確認した。

**SD0186** 第Ⅰ面C区。幅0.60m、深さ0.40m。SK0009、SK0010に切られ、また東側が試掘トレンチにかかるため、東西方向にわずかしか残らない。SK0010の南側の落込みをこの溝の続きと考えれば、鈎状の形態をとることになる。中世。




第18図　SX0023・0430・0477墓実測図（1/40）

**SD0309**（第19図）　第Ⅱ面C区。調査区西南隅付近から始まり、N－64°－E方向に約7.00m延び、調査区外へと続く。幅0.75m前後、深さは0.24mで、断面はU字形状となる。西端部分の上面から土師器などの遺物がまとまって出土した。11世紀後半。




第19図　SD0309溝実測図（1/40）

**SD0428**　第Ⅲ面A区。周囲の遺構に切られ、かろうじて底部の形態をとどめる溝である。調査区西北隅付近からS－18°－E方向に約5.00m延びる。SE0107に切られその先は不明瞭であるが、SK0465の南側を西方向に延びる段落ちがあり、それをこの溝と考えるなら、鈎形あるいは方形の溝としてとらえることもできる。幅1.20m。深さは最も深いところで0.30m、全体的には0.10m未満である。奈良時代。

# 6．出土遺物

## 1）掘立柱建物・竪穴住居・ピット出土遺物

**SB0106出土遺物**（1～6）

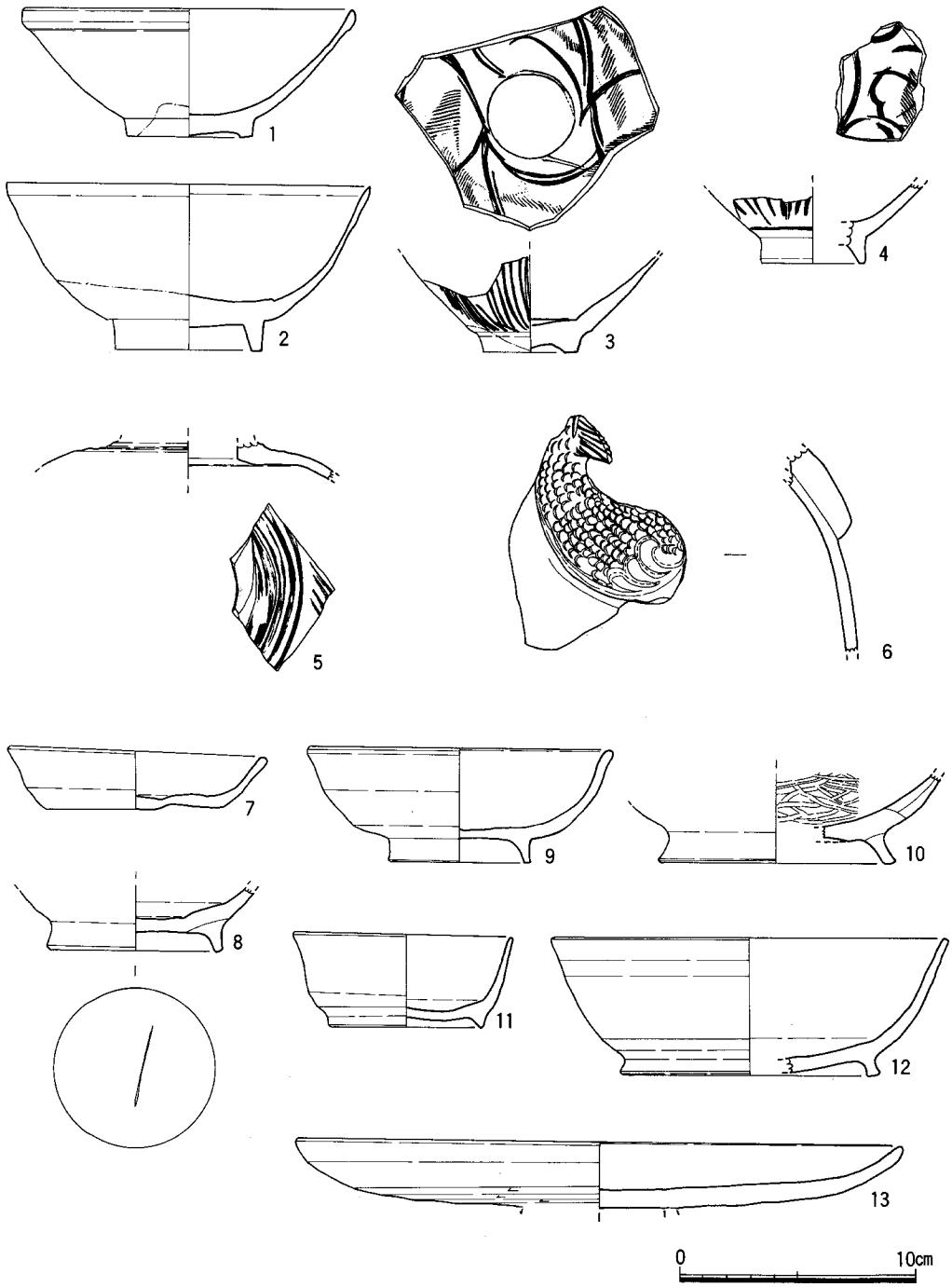
1、2は白磁椀である。釉色は1は黄味を帯びた灰白色を、2は灰白色を呈する。3、4は同安窯系青磁椀である。体部外面には片切彫りの縦線を施す。いずれも釉色はオリーブ色を呈する。5は白磁壺の肩部である。胎土は少し粗く、灰白色を呈する。釉色は淡いオリーブ色を呈する。6は肩部に魚形の飾りを施した白磁壺である。胎土は少し粗く、灰色白を呈する。釉色は少し濁った乳白色を呈し、細かい氷裂がある。

**SC0406出土遺物**（7～13）

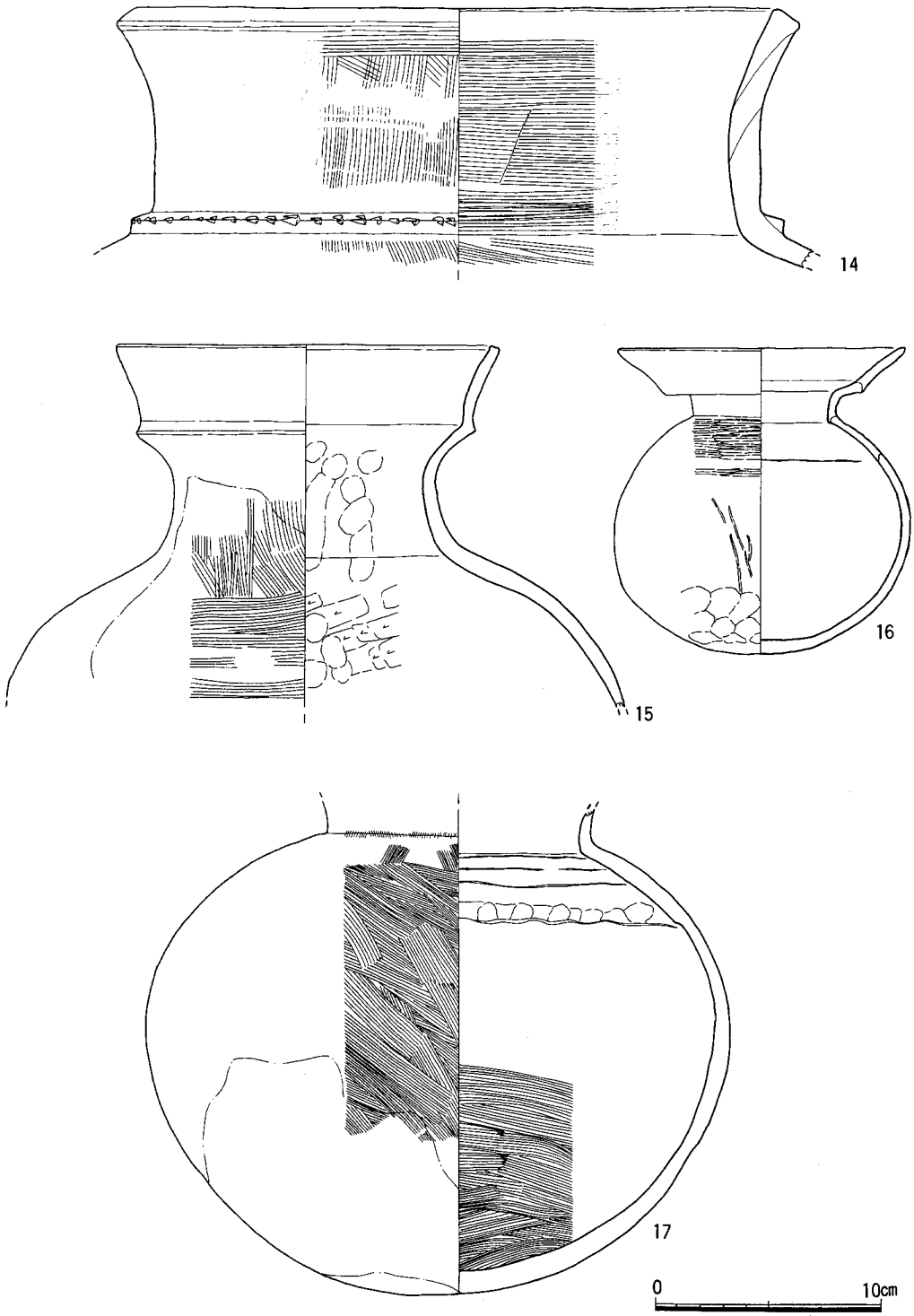
7～9、13は土師器である。7は坏で、底部の切離しはヘラ切りである。色調は褐色を呈する。8、9は椀で、体部の調整はヨコナデを施す。色調は淡褐色を呈する。8には底部にヘラ記号がある。13は高坏の坏部で、底部は回転ヘラケズリを施す。10は黒色土器A類の椀で、体部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。外面は褐色を呈する。11、12は須恵器の坏である。底部の外寄りに低い高台が付く。

**SC0429出土遺物**（14～39）

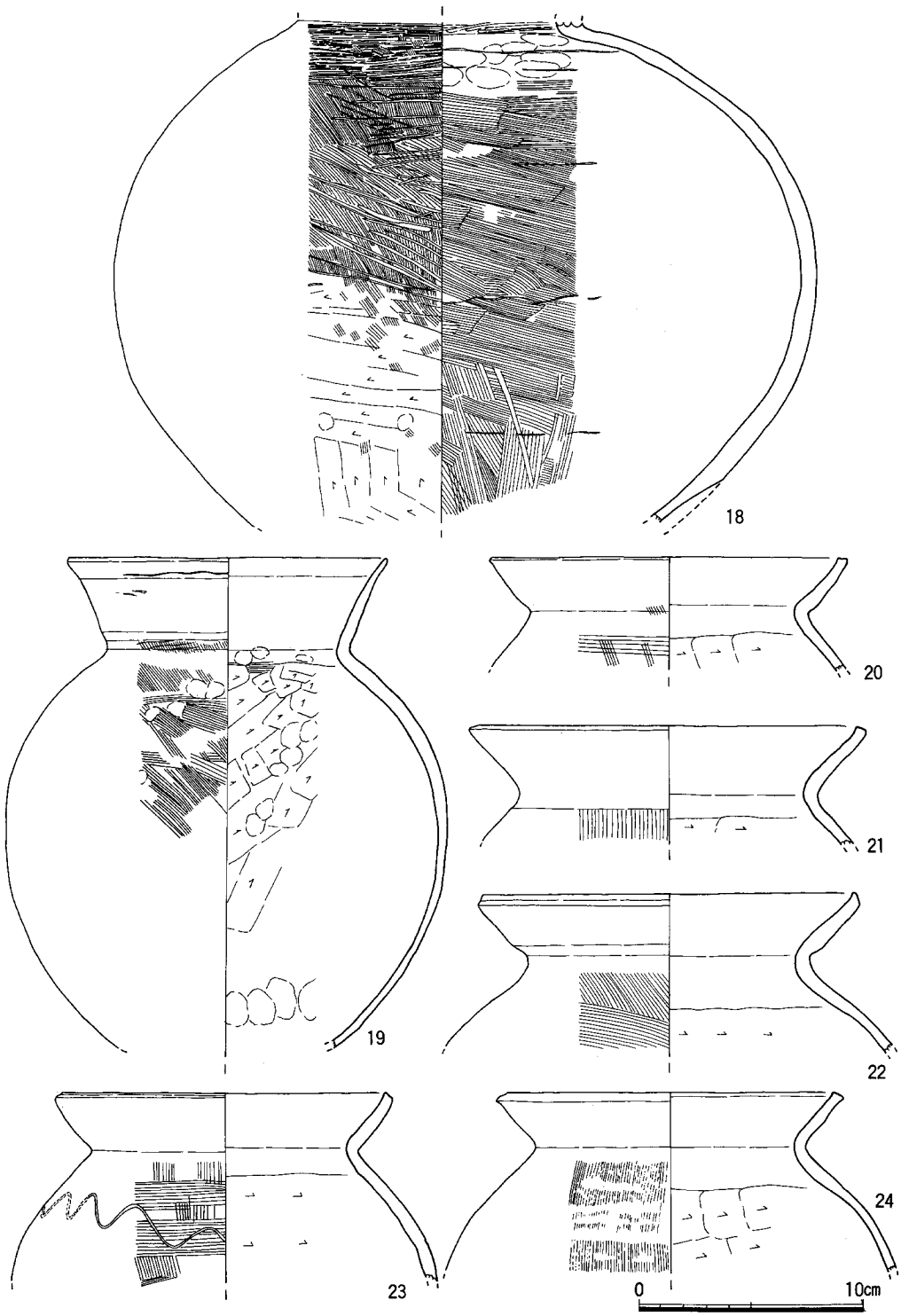
14～38は土師器である。14は大型の直口壺である。口縁は緩やかに外反し、肩部には刻目突帯を施す。調整は外面は縦方向のハケメを、内面は横、斜め方向のハケメを施す。15～18は二重口縁壺である。16は小型の二重口縁壺の完形品である。外面には細かなミガキが施される。外底部には指頭痕が見られる。底部は微かに平らな部分がある。17、18は大型の二重口縁壺の体部で、球形を呈する。18は外底面にヘラケズリが見られる。19は直口壺である。20～26は布留式の甕である。口縁端部は上方につまみ上げるものやなでて面取りするものがある。調整は、外面は縦方向の細かいハケメを施すが、肩部にはその後に横方向のハケメを施す。23は肩部にヘラ描きの波状文を施す。27は山陰系の複合口縁甕である。口縁は直立し、端部は水平に仕上げる。肩部には横方向のハケメを施す。そこからやや下った所にヘラ描きの文様を施すが、欠損しているため、全容は不明である。28、29は小型丸底壺である。体部外面にハケメの後、横方向のヘラミガキを施す。30は台付鉢である。体部は欠損する。外面は斜方向のハケメを、内面はヘラミガキを施す。31～34は高坏である。31は坏部の外面は横方向のヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラミガキの後、暗文風に縦方向のヘラミガキを施す。脚部はラッパ形に開き、端部のみ接地する。32～34は脚部で、ラッパ形に開き、裾端部のみ接地する。屈曲部のやや上には円形の透かしを施す。35、36は小型器台である。37は器壁は厚く、外面には縦方向のハケメを施す。内面はナデで、指頭痕が見られる。色調は暗褐色を呈する。器台形の土器と考えるが、全形は不明である。38は断面台形の突帯が付く。胴部は緩やかに外反する。調整は、外面



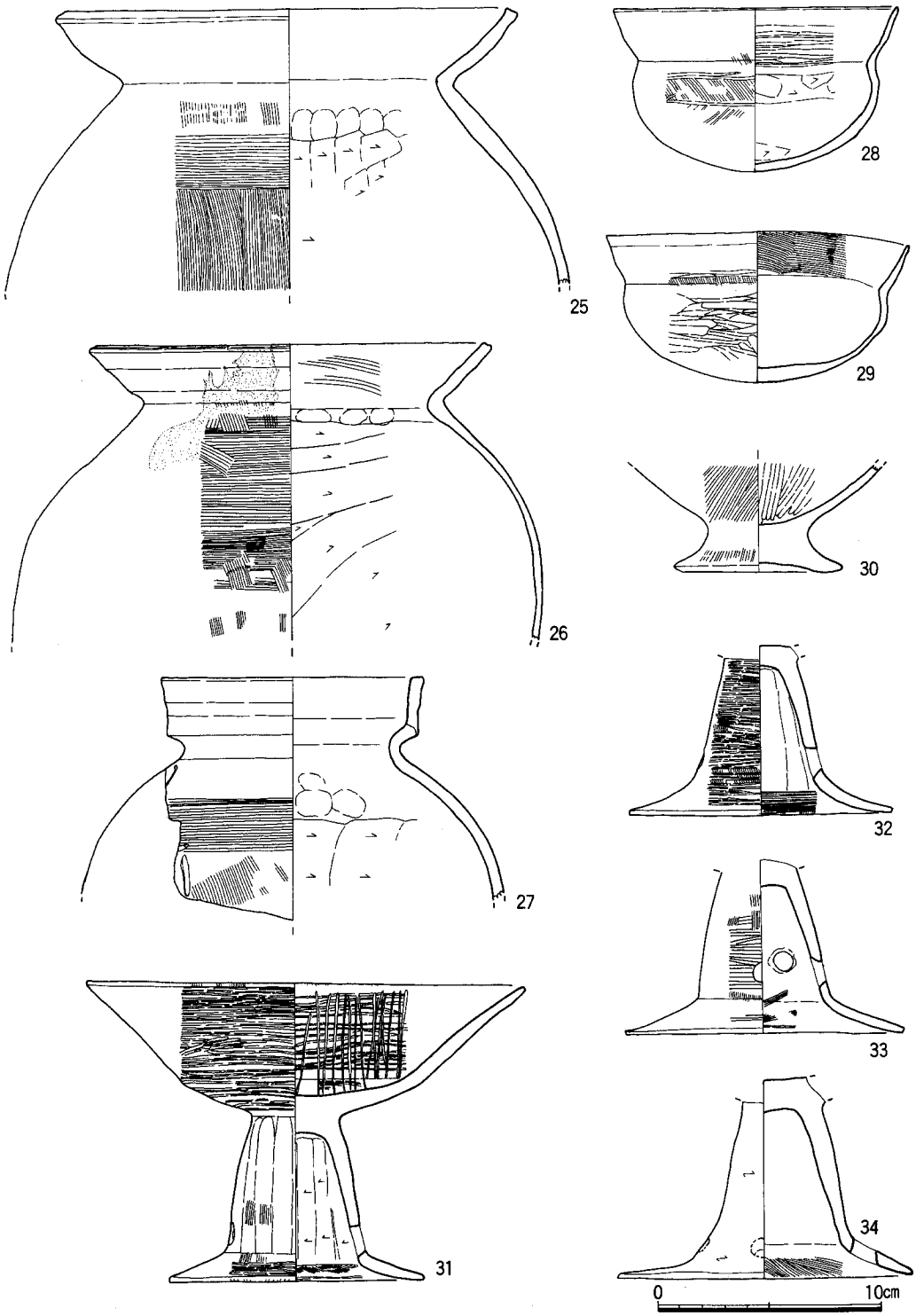

第20図　SB0106、SC0406出土遺物実測図（1/3）



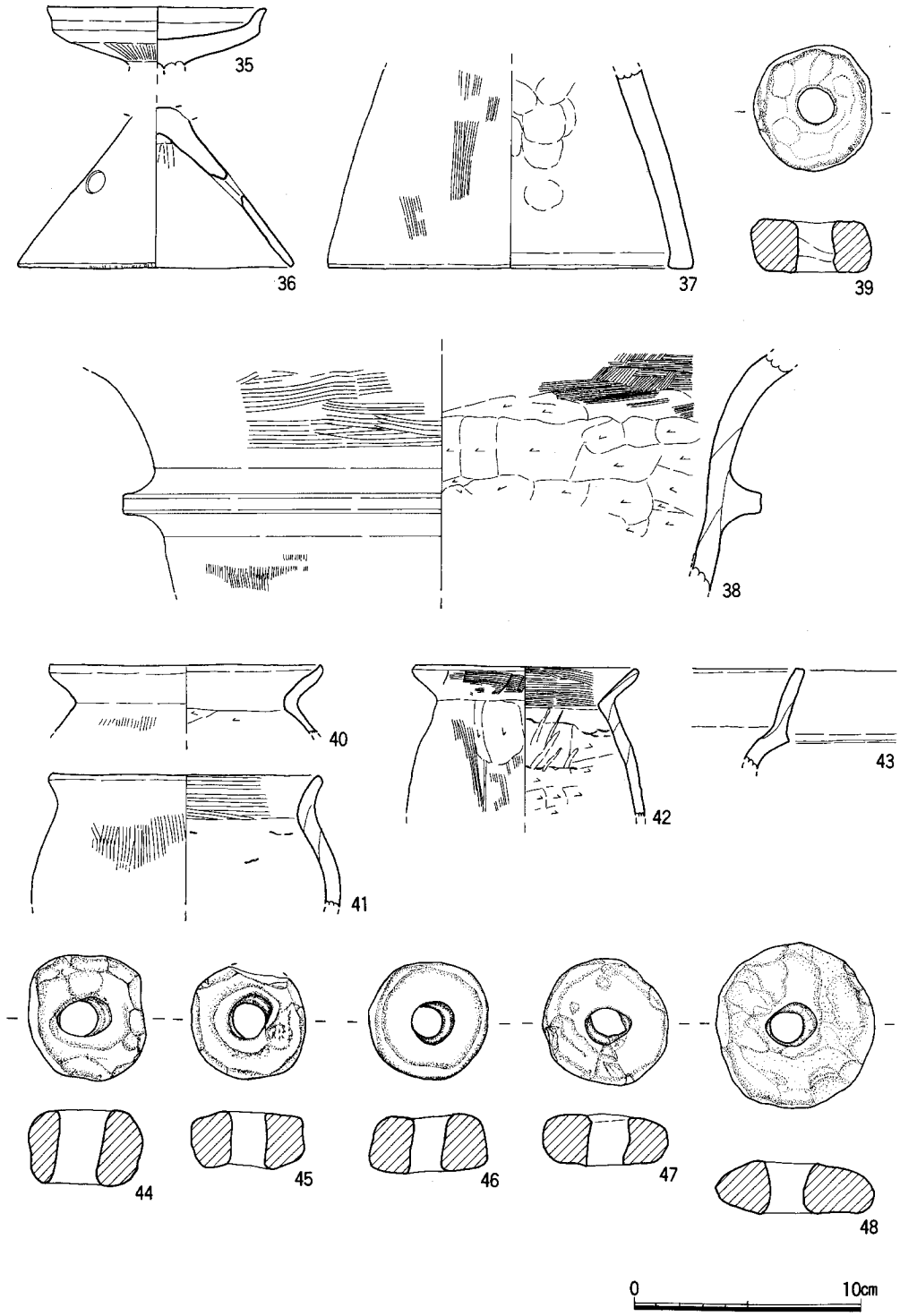

第21図　SC0429出土遺物実測図(1)（1/3）



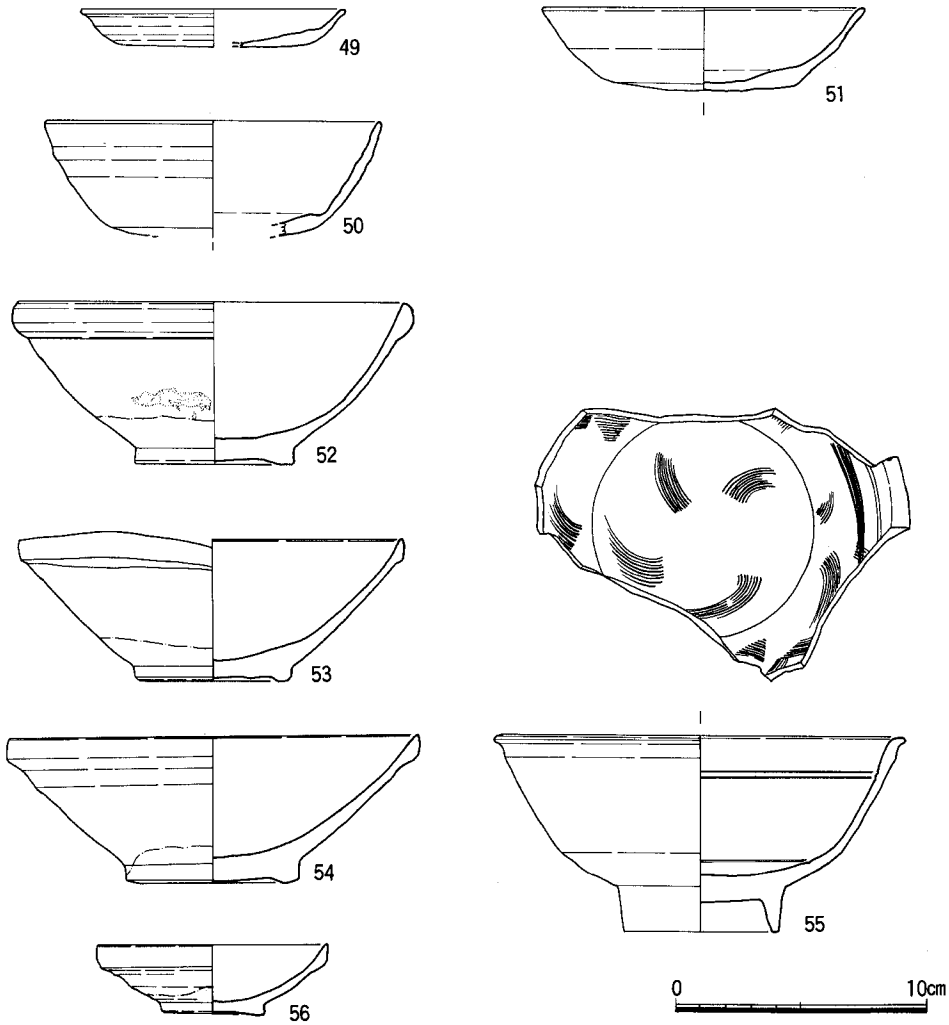

第22図　SC0429出土遺物実測図(2) (1/3)




第23図　SC0429出土遺物実測図(3)（1/3）




第24図　SC0429(4)・0514出土遺物実測図（1/3）




第25図　ピット出土遺物実測図（1/3）

は横、縦方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。色調は褐色を呈し、焼成は硬質である。器種は不明である。39はドーナツ形の土製品で、表面には指頭痕が見られる。色調は淡黄褐色を呈する。径5.6cm、厚さ1.4cmを計る。

**SC0514出土遺物**（40～48）

40～43は土師器甕である。43は山陰系の複合口縁甕である。44～48はSC0429と同様のドーナツ形の土製品である。表面には指頭痕が見られる。色調は淡黄褐色を呈する。法量は44は径5.0～5.3cm、厚さ3.3cm、45は径5.1cm、厚さ2.5cm、46は径5.1cm、厚さ2.5cm、47は径5.5cm、厚さ2.3cm、48は径7.2cm、厚さ2.3cmを計る。

**柱穴出土遺物**（49～56）

49、51は土師器の小皿、坏である。底部の切離しはヘラ切りである。50は須恵器の坏である。49はSP0296、50はSP0226、51はSP0356出土である。52～54は白磁で玉縁の口縁を呈する。55は口縁は水平に折れて、嘴状を呈する。高台は高く、内面には櫛描文を施す。56は白磁高台付皿である。玉縁の口縁で、低い高台が付く。52はSP0039、53はSP0163、54はSP0427、55はSP0095、56はSP0175出土である。

## 2）井戸出土遺物

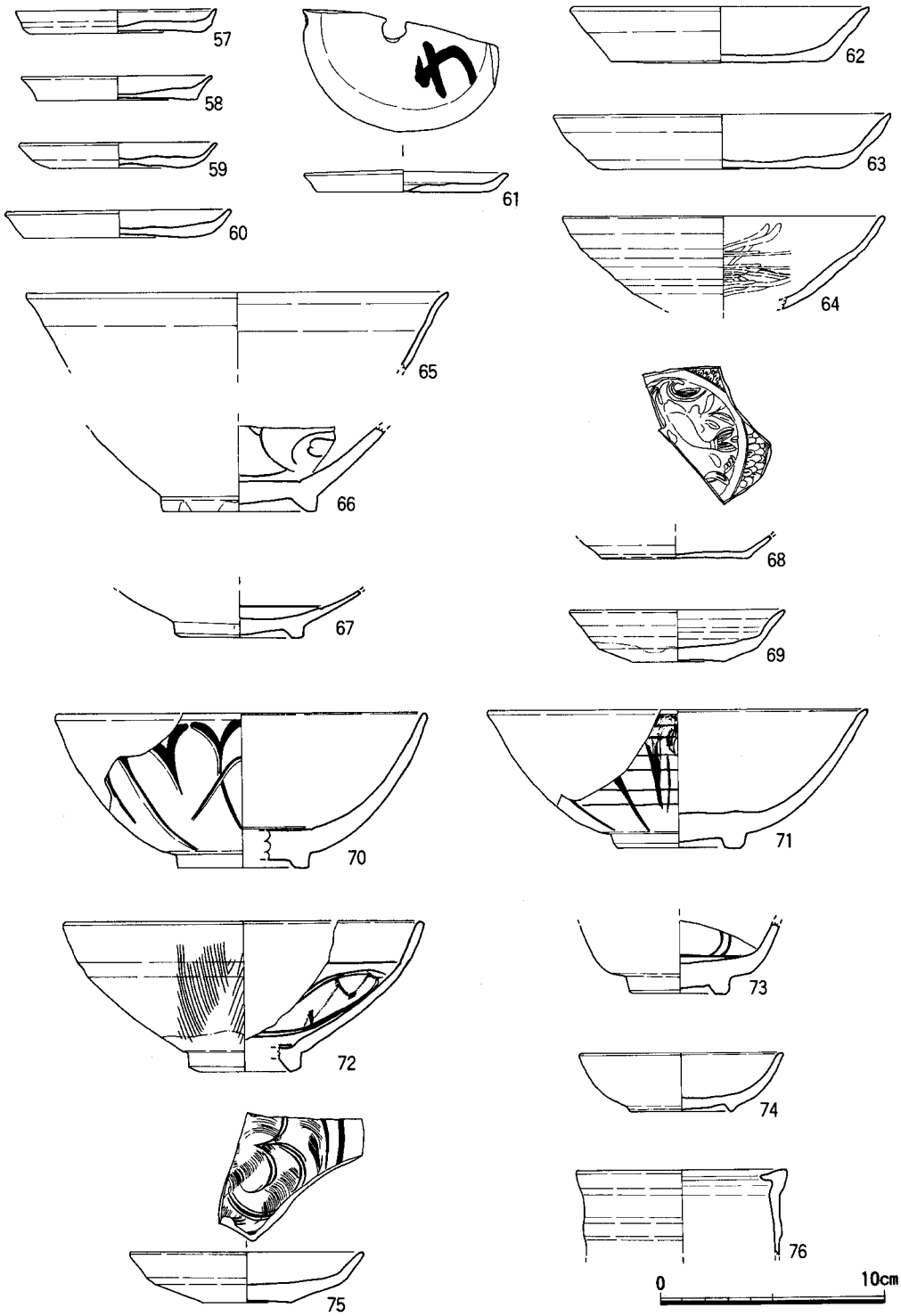
**SE0050出土遺物**（57～82）

57～63は土師器小皿、坏である。底部の切離しは回転糸切りである。57～61の小皿は高さ1.0～1.2cm、口径8.4～9.8cmを計る。62、63の坏の高さ2.4cm、2.5cm、口径13.1cm、15.0cmを計る。61は内底面に墨書がある。「わ」か。64は黒色土器A類である。体部はロクロ成形の後、内面は横方向のヘラミガキを施す。外面はロクロ目を残す。外面の色調は赤褐色を呈する。混入したものと考える。65～67は白磁椀、68、69は白磁皿である。65は口禿の椀である。66は見込みに片切り彫りの文様を施す。68は見込みに双魚文を施す。胎土は少し粗く、灰白色を呈する。釉色は灰白色を呈する。69は平底皿で、釉色は灰緑色を呈する。70、71、73は龍泉窯系青磁椀である。70、71は外面に鎬蓮弁を施す。72は同安窯系青磁椀である。74は無文の小椀である。釉は全面にかかり、畳付のみ露胎となる。釉色は青灰色を呈する。75は龍泉窯系青磁の平皿である。見込みには連花文が施される。76は青磁の香炉である。釉色はオリーブ色を呈し、細かな氷裂が見られる。77～81は施釉陶器である。77は小皿で、灰オリーブ色を呈する釉がかかる。78は小皿で、暗茶褐色を呈する釉がかかる。79は鉢で、緑がかった灰褐色を呈する釉がかかる。80、81は蓋で、80は黒褐色を呈する釉がかかる。81は釉色は淡茶色を呈し、受け部には目跡が見られる。82は瓦質の鍋である。口縁はくの字に折れ、端部は肥厚する。調整はナデで、胴部に指頭痕が見られる。口縁外面には煤が付着する。焼成は良く、硬質である。色調は暗灰色を呈する。

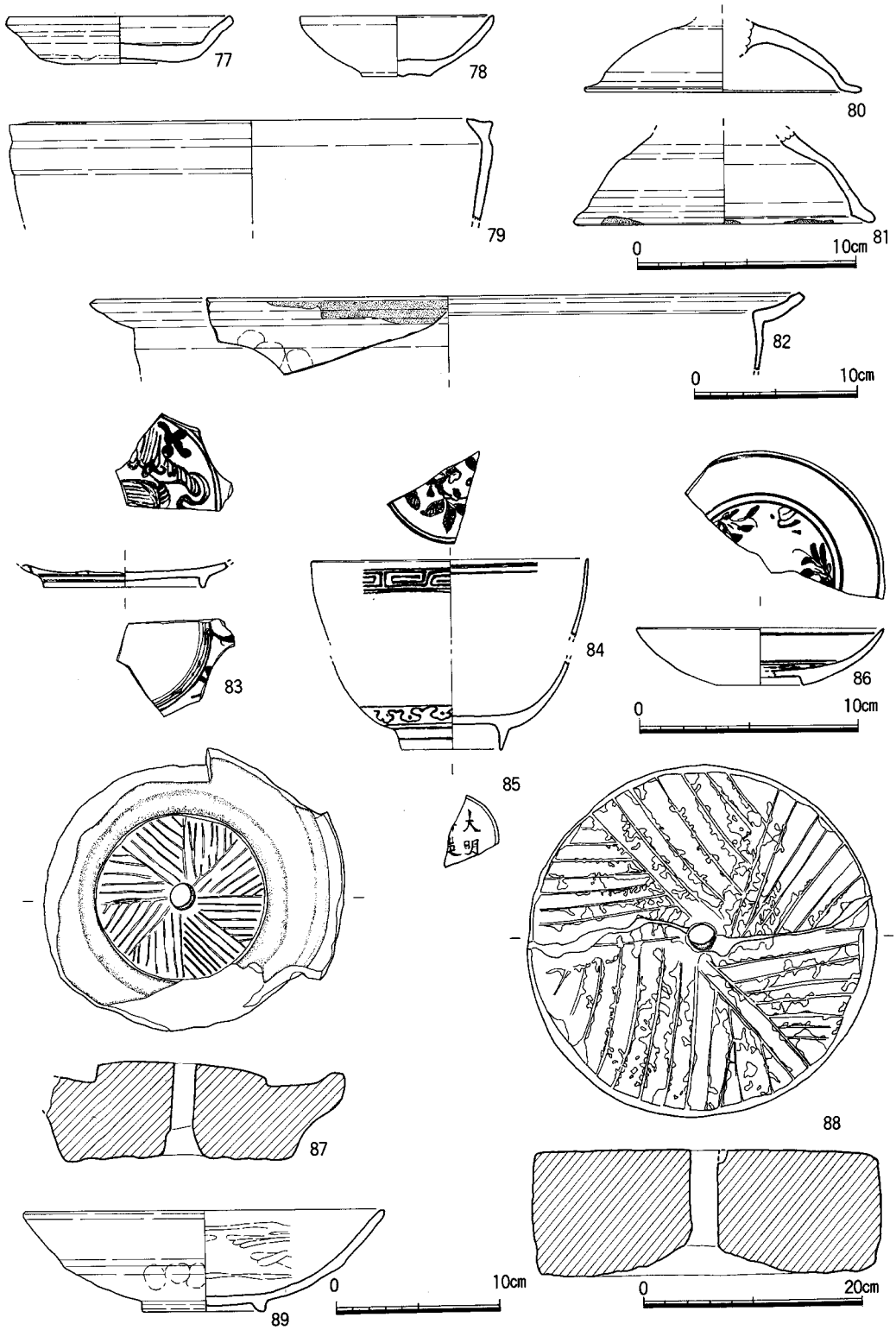
**SE0104出土遺物**（83～88）

SE0104からは白磁、越州窯系青磁、須恵器、土師器等が出土したが、いずれも混入したものと考えられるため、ここでは遺構の時期を示す明代の染付のみ図示した。

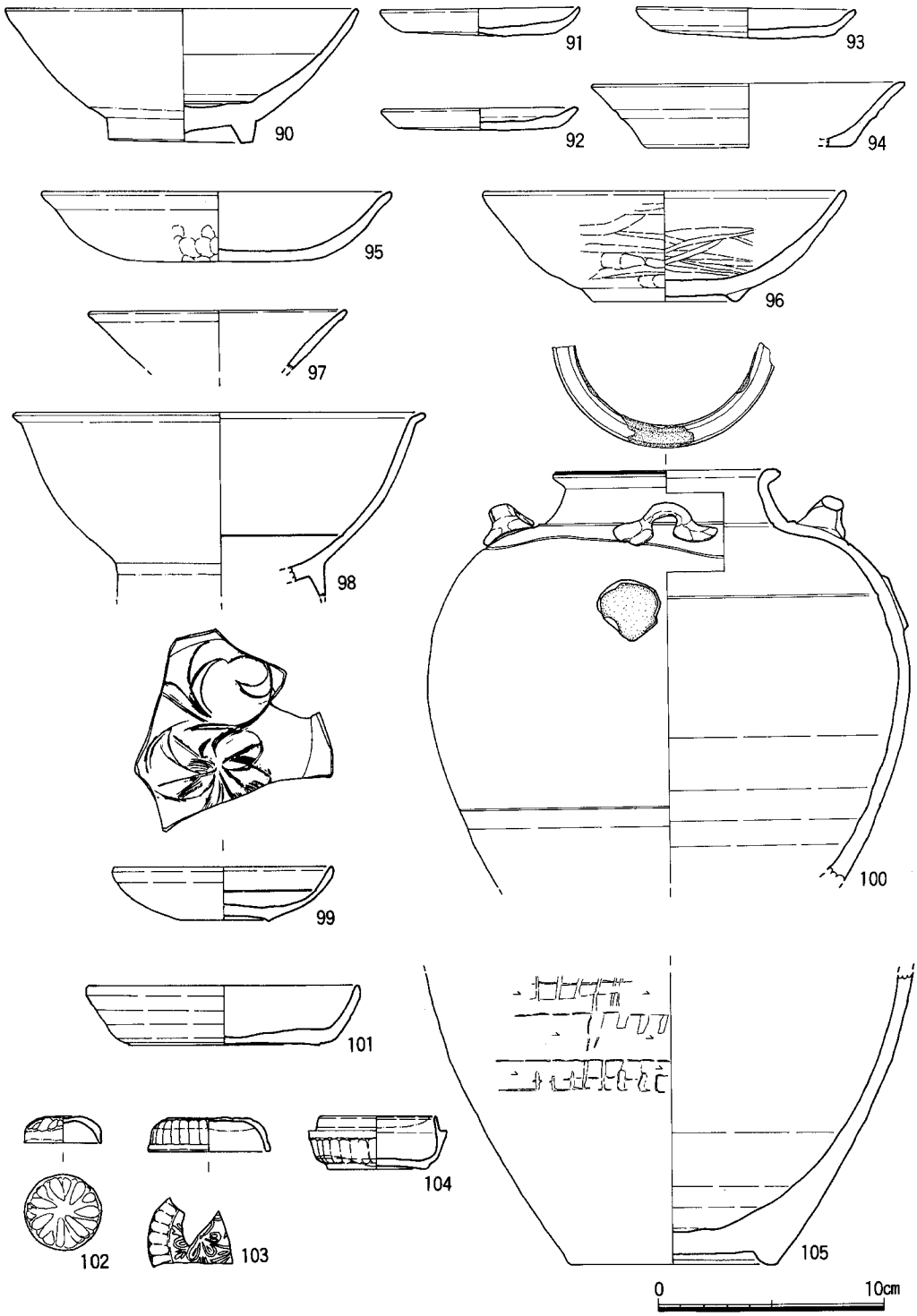
83～86は明代の染付である。83は皿である。84、85は椀で、同一個体と考えられる。口縁は直線的立ち上がり、口縁外面には雷文が施される。高台内には「大明年造」と銘が施される。86は碁笥底の皿である。87、88は石臼である。87は砂岩質石臼で、下の部分にあたる。受け部の一部は欠損しているが、平面形は円形を呈する。擦り面には８分割に主溝を彫り、その間に６～８本の副溝を施す。擦り面の径は15.5cmを計る。底面は火を受けている。88は擦り面には




第26図　SE0050出土遺物実測図(1)（1/3）




第27図　SE0050(2)・0104出土遺物実測図（1/3、1/4、1/6）




第28図　SE0119・0132・0134出土遺物実測図（1/3）

5分割に主溝を彫り、その間に6～12本の副溝を施す。擦り面の径は31.5cmを計る。石材は花崗岩である。

**SE0107出土遺物**（89）

226は瓦器である。体部は内湾気味に広く立ち上がり、深さは余りない。高台は断面三角形を呈する。調整は内面は大まかにヘラミガキが施される。外面はナデで指頭痕が残る。色調は灰黒色を呈する。器高5.6cm、口径16.4cmを計る。

**SE0119出土遺物**（90）

89は白磁椀である。見込みの釉を輪状に削り取る。外面下半は露胎となる。

**SE0132出土遺物**（91～100）

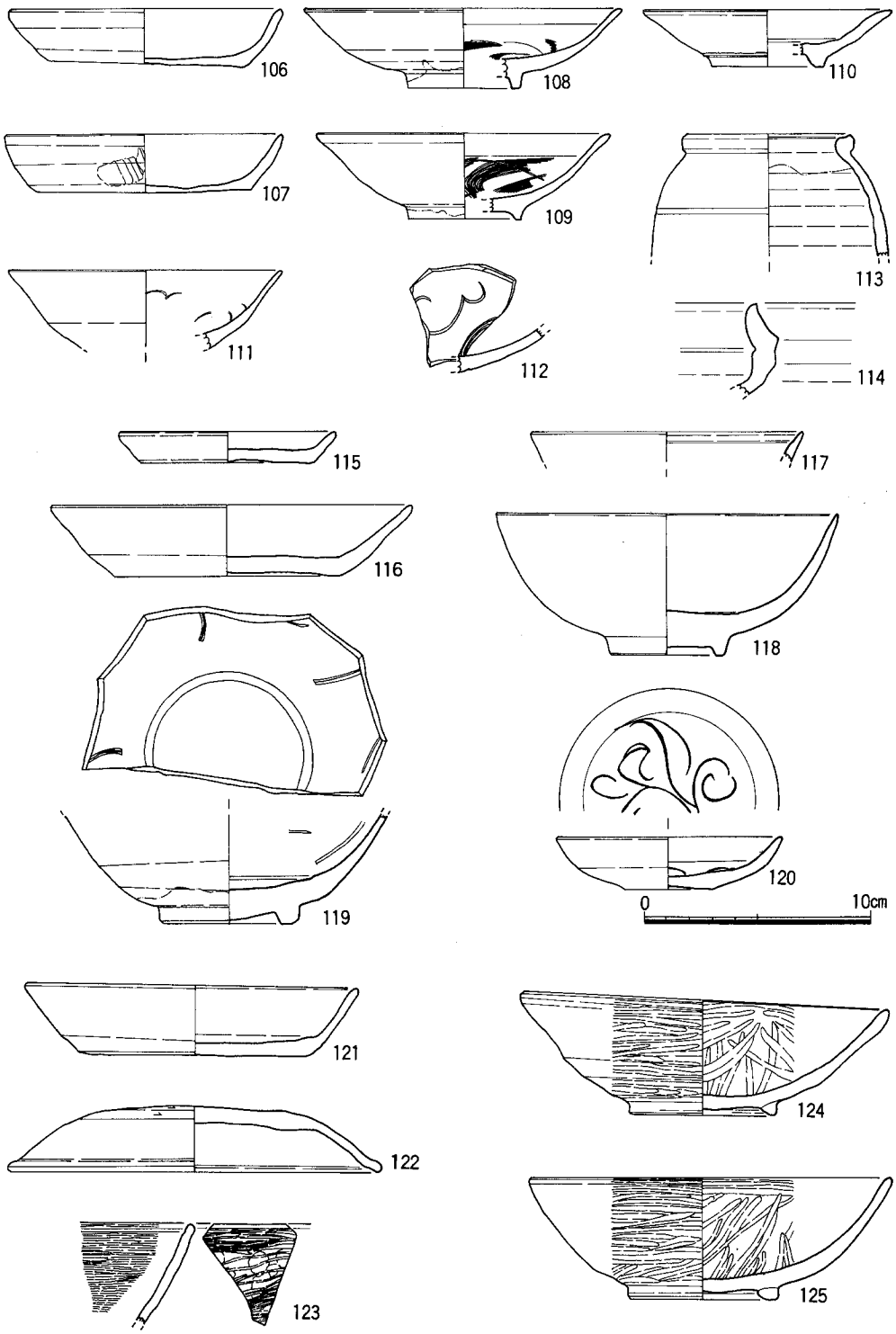
91～95は土師器で、91～93は小皿、94は坏、95は丸底坏である。95のみ掘方から出土した。底部の切離しは91～94は回転糸切り、95はヘラ切りである。94は外面は指頭痕が残る。内面は大まかなヘラミガキが施される。96は瓦器である。押し出し技法による成形で、外底面に指頭痕が残る。底部にかすかな糸切りの痕跡が観察できる。内面は大まなかヘラミガキが施される。97は茶褐釉椀である。胎土はやや粗く、灰色を呈する。釉は内外面に厚くかかり、釉色は茶褐色を呈する。口縁内外面は灰白色の透明釉がかかる。98は白磁椀である。口縁は折れて外反し、断面三角形の高い高台が付く。釉色は灰白色を呈し、細かな氷裂が見られる。高台畳付と内側は露胎となる。99は白磁の平皿で見込みに片切り彫りと櫛目による連花文を施す。釉色は淡いオリーブ色を呈し、外底面のみ露胎となる。釉には細かな氷裂が見られる。99は施釉陶器の四耳壺である。釉色は緑褐色を呈し、口唇部には目跡がある。肩部には波状の沈線が施される。

**SE0134出土遺物**（101～105）

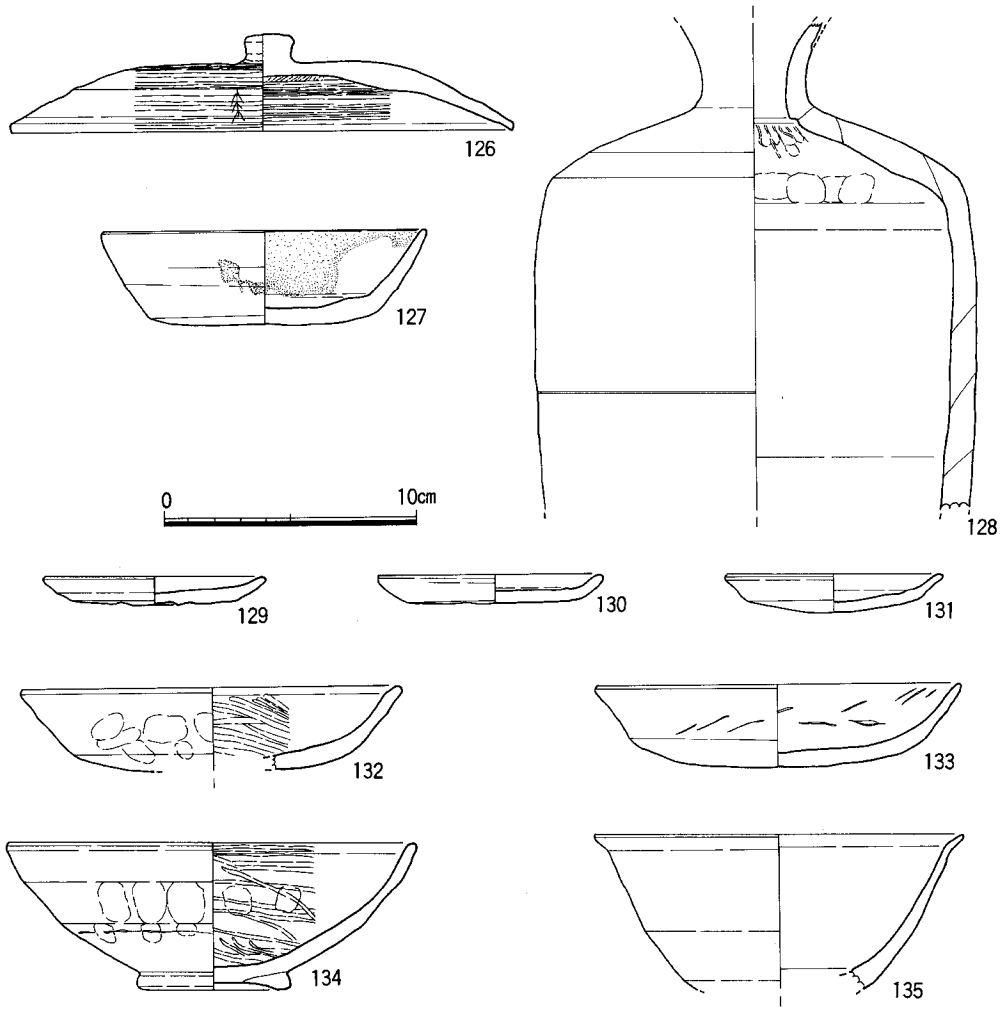
101は土師器坏である。底部の切離しは回転糸切りである。102～104は青白磁の合子である。102、103は蓋で、103は草花文の型押しがある。104は身で、受け部と底面が露胎となる。釉色は青白色を呈する。105は施釉陶器の壺もしくは水注の底部で、碁笥底である。外面は削りが施されるが、胴部中位に断続的な回転ケズリが見られる。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。釉色は暗緑褐色を呈する。内面には釉垂れが見られる。

**SE0137出土遺物**（106～114）

106、107は土師器坏である。底部の切離しは回転糸切りで、底面に板状圧痕が残る。108～110は白磁の高台付皿である。108、109は体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。見込みには櫛描文が施される。110は口縁は僅かに外反し、見込みは輪状に釉を削り取る。111は越州窯系青磁の椀である。内面には片切彫りの文様を施す。胎土は砂粒を含み、暗灰褐色を呈する。釉色は緑がかった乳白色を呈する。112は青磁椀の小片である。内面には片切彫りの文様を施す。釉はガラス質で、色は緑がかった飴色を呈する。連江窯系青磁と考える。113は緑釉陶器の短頸壺である。肩部には沈線を施す。114は施釉陶器の鉢である。口縁は内湾気味




第29図　SE0137・0218・0307出土遺物実測図（1/3）




第30図　SE0342・0385出土遺物実測図（1/3）

に立ち上がり、内外面に段を持つ。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。釉は内外面にかかり、色はオリーブを呈する。

**SE0218出土遺物**（115～120）

115、116は土師器の小皿と坏である。いずれも底部の切離しは回転糸切りである。117は暗褐釉のかかる椀の口縁片である。口縁端部のみ灰緑色を呈する透明釉がかかる。SE0132で同様の椀が出土している。118は龍泉窯系青磁の椀で、無文である。オリーブ色を呈する釉が厚くかかり、畳付と高台内側は釉を掻き取る。119は白磁椀である。内面には白堆線が入る。釉色は淡い褐色を呈し、表面には氷裂が見られる。120は白磁の平皿で、見込みは片切彫りの花

文を施す。釉色はやや暗い灰白色を呈する。表面には細かな氷裂が見られる。

**SE0307出土遺物**（121～125）

121は土師器坏である。底部の切離しはヘラ切りで、底面には板状圧痕が残る。器高3.1cm、口径15.5cmを計る。122は土師器蓋である。天井部の約1/3に回転ヘラケズリが施される。123～125は瓦器椀である。123は楠葉型の瓦器と考えられ、内外面に細かなヘラミガキが施される。色調は灰黒色を呈する。口縁直下には1条の沈線が巡る。124、125は在地の瓦器である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。色調は灰黒色を呈する。

**SE0342出土遺物**（126～128）

126、127は土師器である。126は天井部に撮みが付く蓋で、内外面ともヘラミガキが施される。外面には綾杉のヘラ記号がある。127は坏で、底部の切離しはヘラ切りである。内外面に煤が付着する。128は須恵器の長頸壺である。調整は口頸部はヨコナデ、胴部は回転ヘラケズリを施す。胎土は砂粒を少し含み、色調は灰色を呈する。

**SE0385出土遺物**（129～135）

129～134は土師器である。129～131は小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。器高1.2～1.6cm、口径8.3～8.8cmを計る。132、133は丸底坏である。底部の切離しはヘラ切りである。132は内面は横方向の丁寧なヘラミガキを施す。外面は指頭痕が残る。122は内面にコテアテ痕が残る。器高3.3cm、口径14.3cm～14.8cmを計る。134は椀である。内面は横方向のヘラミガキを施すが、かすかに指頭痕が残る。外面は指頭痕が残る。135は高麗青磁の椀である。口縁端部は折れて、外反し、見込みには沈線が巡る。胎土は黒色や白色の砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。釉色はオリーブ色を呈し、全面に氷裂が見られる。

## 3）土坑出土遺物

**SK0024出土遺物**（136～146）

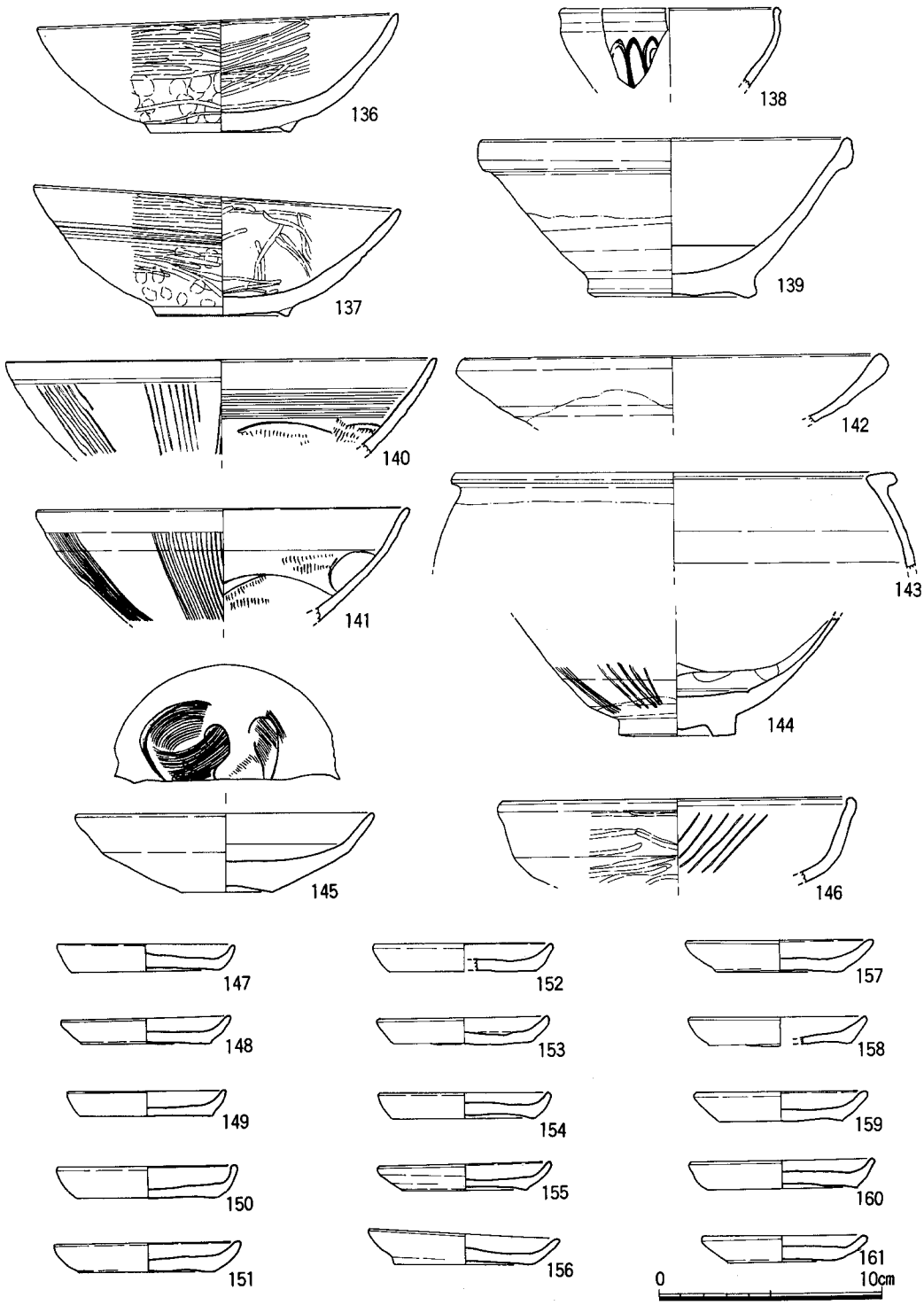
136、137は瓦器椀である。断面三角形の高台が付く。内外面ともヘラミガキが施されるが、外底面には指頭痕が残る。色調は灰白色を呈するが、口縁内外面は灰黒色を呈する。131、132は白磁椀である。138は小椀で、口縁は垂直に立ち上がった後、端部付近で外反する。体部外面には片切彫りで、蓮弁状の文様を施す。胎土は砂粒をわずかに含む灰白色を呈する。釉色は少し青味がかった灰白色を呈し、全面に氷裂が見られる。140、141、144は同安窯系青磁の椀である。外面は櫛描きの縦線が施される。142、143は施釉陶器である。142は鉢で、暗褐色の釉がかかる。体部外面の下半は露胎である。143は壺である。黄白色の釉がかかる。

**SK0025出土遺物**（145～146）

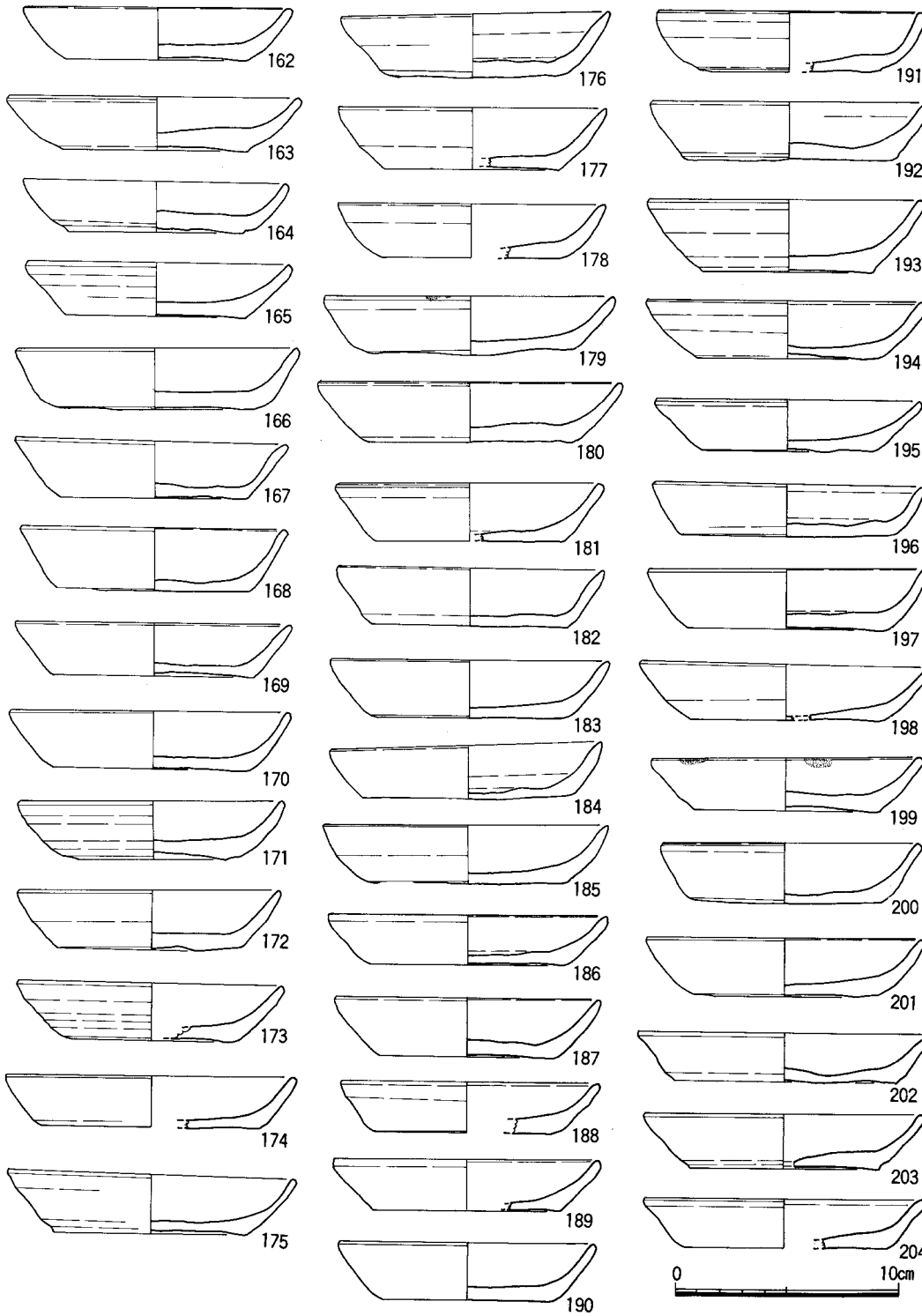
145は土師器坏である。口縁端部内面に段を持つ。調整は外面は横方向のヘラミガキ、内面は暗文風に斜め方向のヘラミガキを施す。色調は赤橙色を呈する。146は龍泉窯系青磁の平底皿である。見込みには片切彫りと櫛描きによる花文を施す。

**SK0045出土遺物**（147～232）

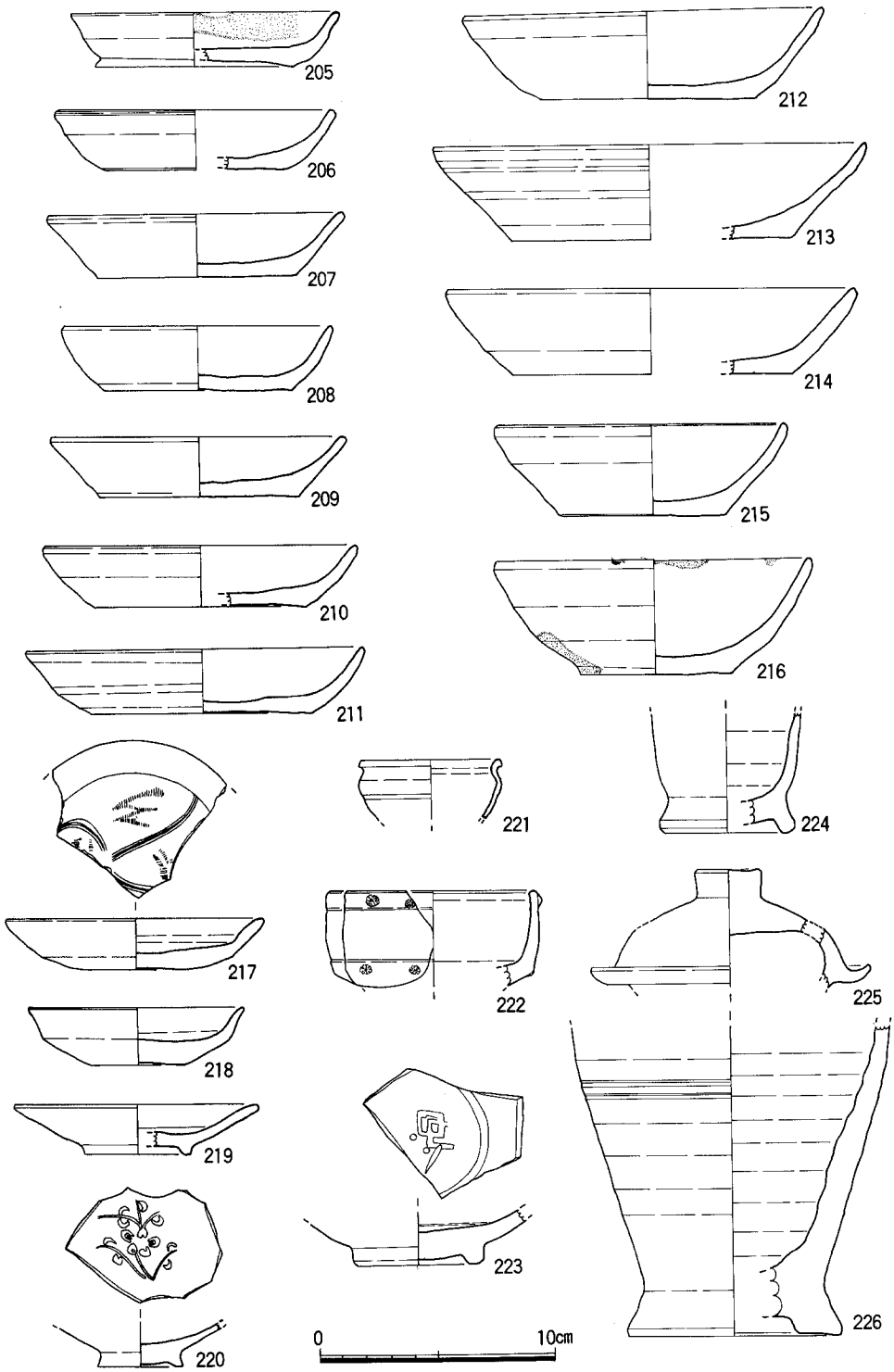
147～222は土師器で、147～161は小皿、162～216は坏である。いずれも底部の切離しは回転糸切りである。147～161は器高1.1～1.4cm、口径6.9～8.5cmを計る。坏には法量と器形で大きく３タイプに分けられる。162～211は器高2.3～2.8cm、口径11.6～14.3cmを計る。212～214は大型の坏で、器高3.7～4.0cm、口径15.3～18.5cmを計る。215、216は体部は内湾気味に高く立ち上がり、他の坏とは異なるプロポーションを持つ。器高3.9cm、4.9cm、口径13.3cm、13.5cmを計る。搬入品の可能性がある。219は白磁高台付皿である。217、218は青磁の平底皿である。217は同安窯系で、見込みに櫛描文を施す。218は無文である。222は青磁の香炉で、口縁外面と体部下位に菊花文の浮文が付く。釉色は淡いオリーブ色を呈する。223は青磁椀で、見込みにスタンプ文が施される。224は青磁壺である。外底部のみ露胎となる。釉色は淡い青緑色を呈する。220は青白磁の椀で、見込みに花文を施す。畳付と高台内側は露胎である。221は施釉陶器の小鉢である。口縁は内湾して立ち上がり、端部で急に外反する。体部中央に沈線が巡る。釉は内外面にかけられ、黒褐色を呈する。225は施釉陶器の蓋である。天井部には撮みが付き、口縁内面にはかえりが付く。釉は外面のみで、内面は露胎である。釉色は暗褐色～黄緑色を呈する。226は施釉陶器の壺である。内外面ともに釉がかかるが、外底面のみ露胎である。胴部の中央には２条の沈線を施す。釉色は外面は緑褐色を呈する。内面はそれよりやや暗い。227は須恵質土器の捏ね鉢である。調整は外面はヨコナデで、底部付近に指頭痕が残る。内面は指頭痕が残る。色調は淡い黒褐色を呈する。228は高麗青磁の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、断面台形の高台が付く。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉色は灰緑色を呈する。畳付と高台内側は釉を掻き取る。見込みには砂粒混じりの目跡が残る。高台内側にはヘラ



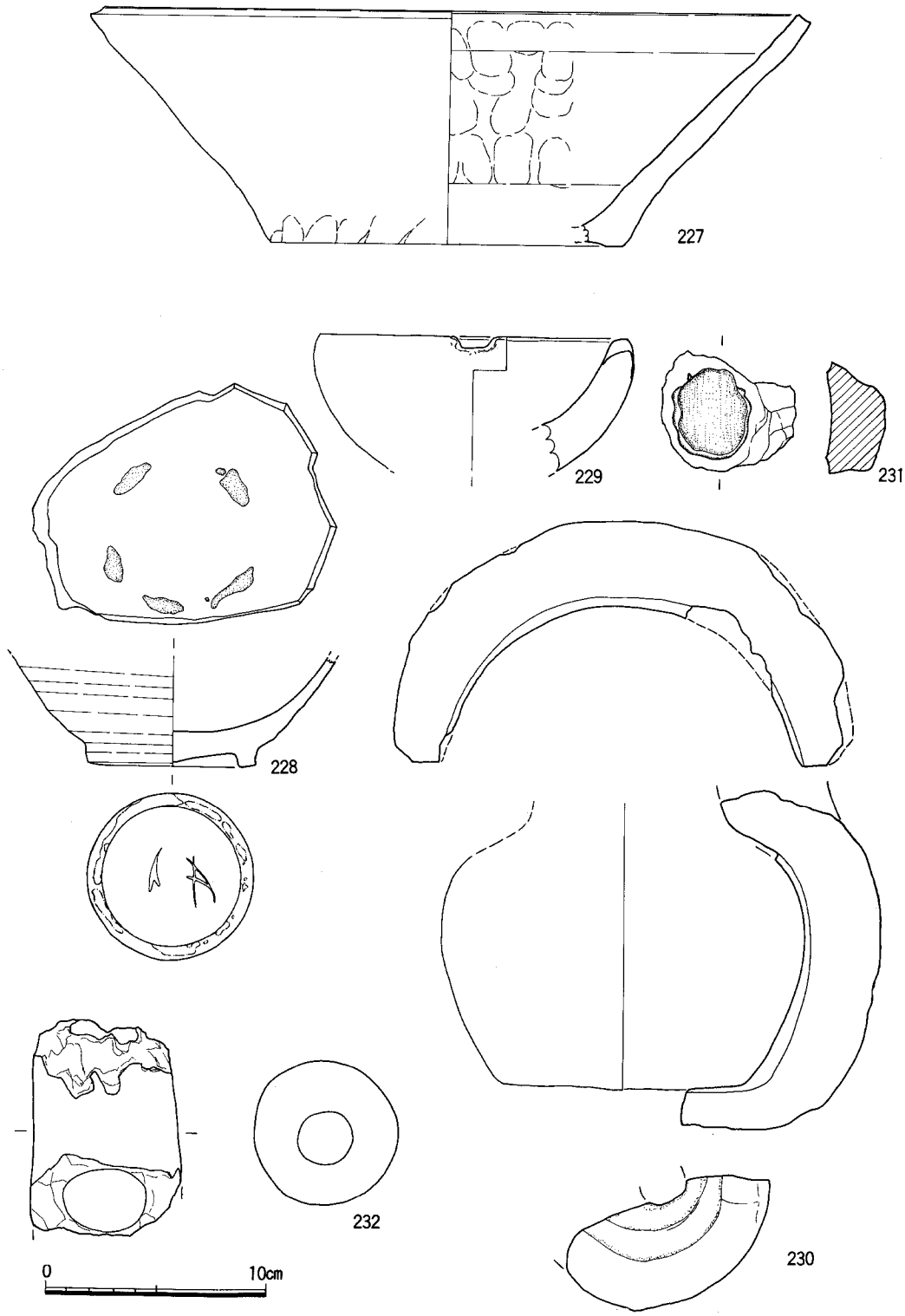

第31図　SK0024・0025・0045(1)　出土遺物実測図（1/3）



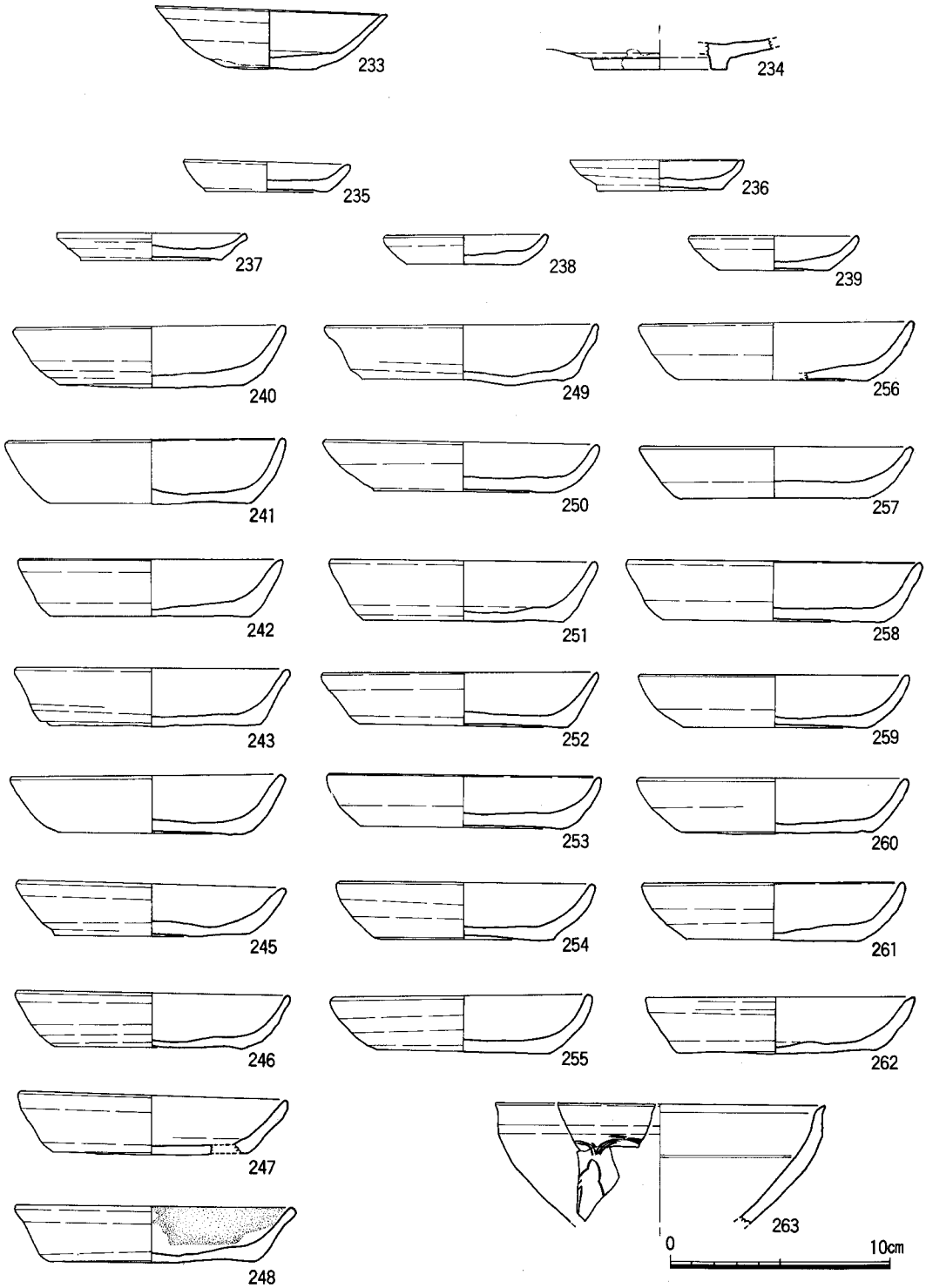

第32図　SK0045出土遺物実測図(2)（1/3）



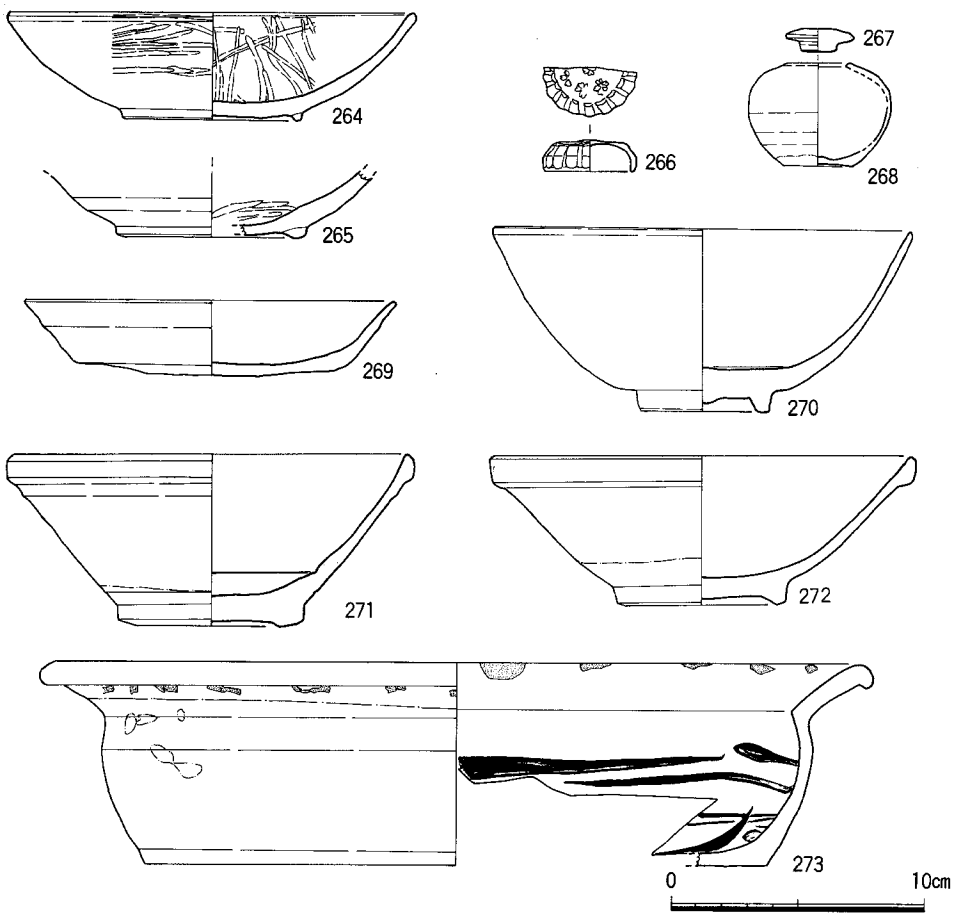

第33図　SK0045出土遺物実測図(3)（1/3）




第34図　SK0045出土遺物実測図(4)（1/3）




第35図　SK0133・0135・0136出土遺物実測図（1/3）

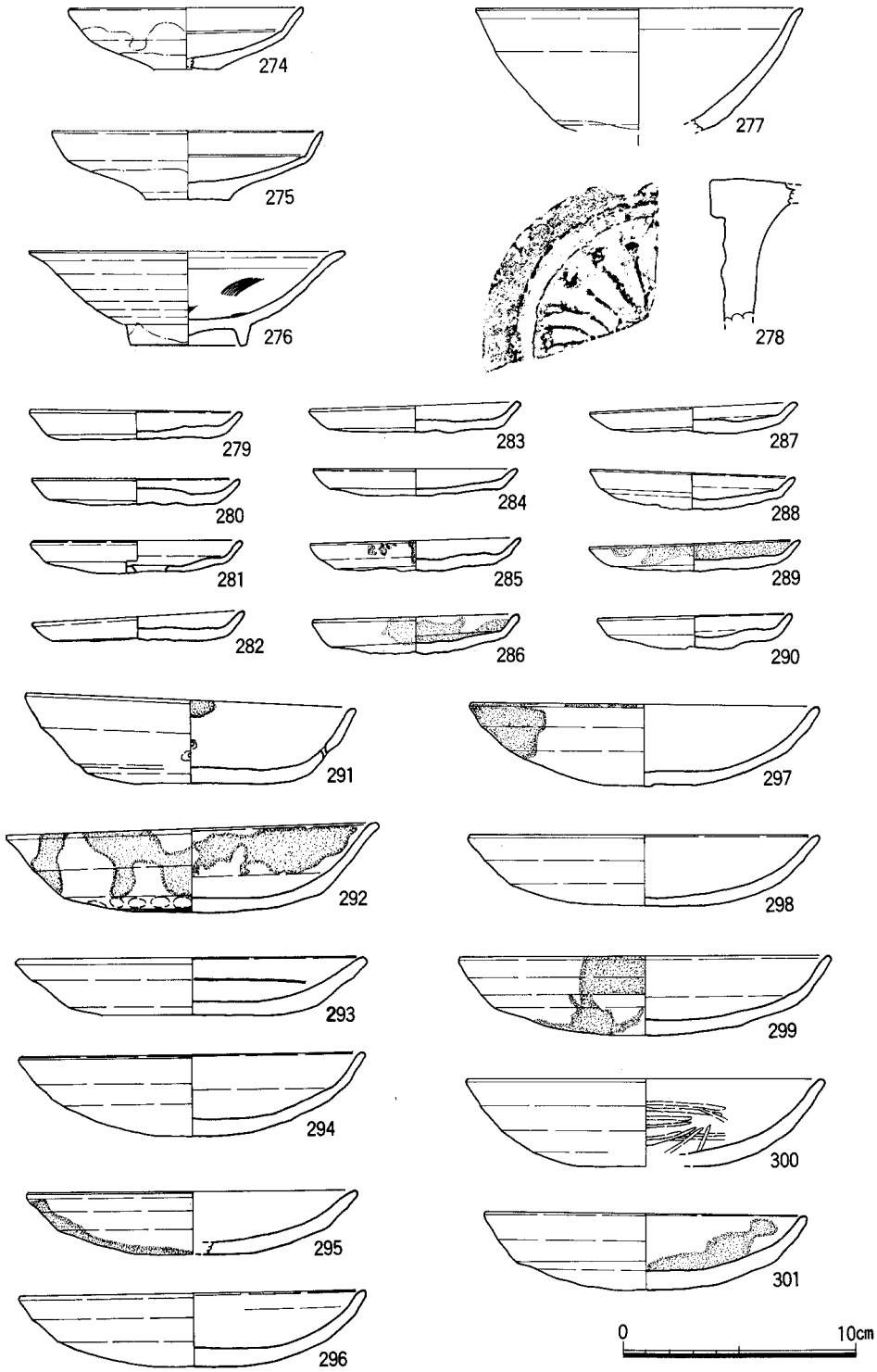



第36図　SK0140・0155・0185・0193出土遺物実測図（1/3）

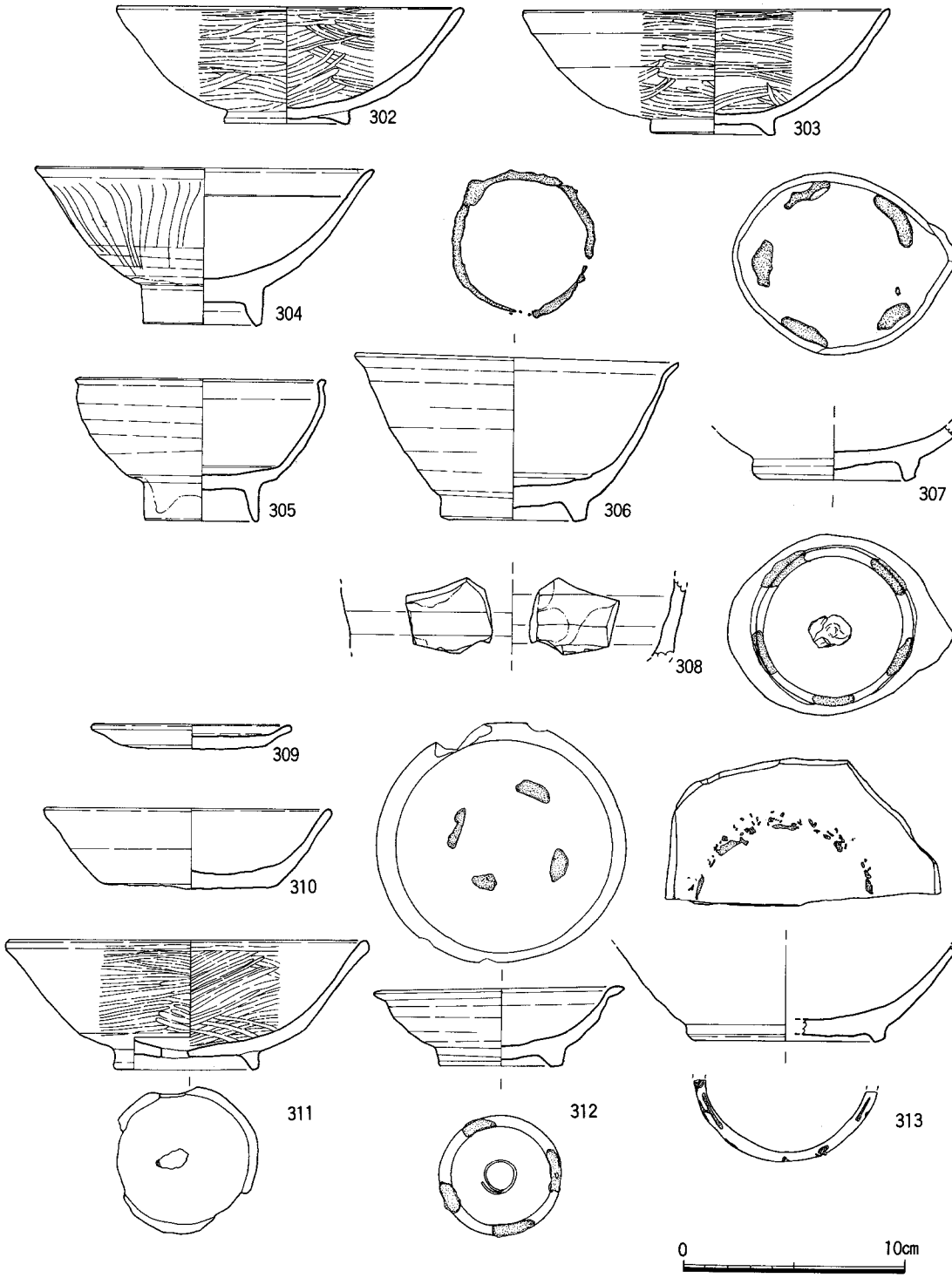
記号が見られる。229は坩堝である。注ぎ口が１カ所ある。緑色を呈する溶解物が付着する。銅の溶解に使用されたものと考える。口径14.0cmを計る。230、231は鋳型である。鋳型は３～５mmの砂粒や籾殻を含む粗真土と細かな砂粒の仕上げ真土から成る。鋳面はいずれも黒く変色している。230は華瓶の鋳型と考えられる。側面に面取りされた面があり、２つの鋳型を合わせて、外型としている。鋳型の上部外面は粘土が剝がれた痕跡があり、本来の器形は長頸の瓶であったと推測される。底には注ぎ口もしくはガス抜きの孔がある。231は230と同一個体と考えられる。232はふいごの羽口である。胎土には３mm程度の砂粒を少し含む。先端には緑色を呈する溶解物が付着する。径6.5cmを計る。

**SK0133出土遺物**（233）

233は白磁平皿である。無文が、外底面のみ露胎となる。




第37図　SK0306・0308(1)出土遺物実測図（1/3）




第38図　SK0308(2)・0407出土遺物実測図（1/3）

**SK0135出土遺物**（234）

234は施釉陶器の椀である。断面台形の高台が付き、体部は広く直線的に立ち上がる。胎土は砂粒を少し含み、淡い黄褐色を呈する。釉は内面は黒色で、茶色の油滴が見られる。外面は緑茶色の釉がかかる。底面は露胎である。

**SK0136出土遺物**（235～263）

235～262は土師器で、234～239は小皿、240～262は坏である。いずれも底部の切離しは回転糸切りである。235～239は器高1.3～1.6㎝、口径7.2～8.4㎝を計る。240～262は器高2.4～2.9㎝、口径11.4～12.5㎝を計る。263は白磁椀である。口縁は直線的に立ち上がり、端部でわずかに外反する。外面にはヘラ描きによる花文を施す。胎土は精良で、白色を呈する。釉色は青味がかった白色を呈する。表面には細かな氷裂が見られる。

**SK0140出土遺物**（264～272）

264は瓦器である。断面台形の小さな高台が付く。調整は内外面ともヘラミガキが施される。体部外面の下位にはヨコナデが施される。色調は体部外面は灰色を呈し、口縁から内面にかけては灰黒色を呈する。器高4.3㎝、口径15.7㎝を計る。265は黒色土器Ａ類の椀である。内面はヘラミガキが、外底部にはヘラケズリが施される。外面の色調は茶褐色を呈する。266は青白磁の合子の蓋である。天井部には花文が施される。内面は露胎である。267、268は蓋付の白磁小壺である。蓋の内面と壺の内面及び外底面は露胎である。釉色は淡緑色～緑褐色を呈する。

**SK0155出土遺物**（269）

269は土師器坏である。底部の切離しは回転糸切りで、外底面には板状圧痕が残る。色調は淡褐色を呈する。器高3.0㎝、口径14.6㎝を計る。

**SK0185出土遺物**（270）

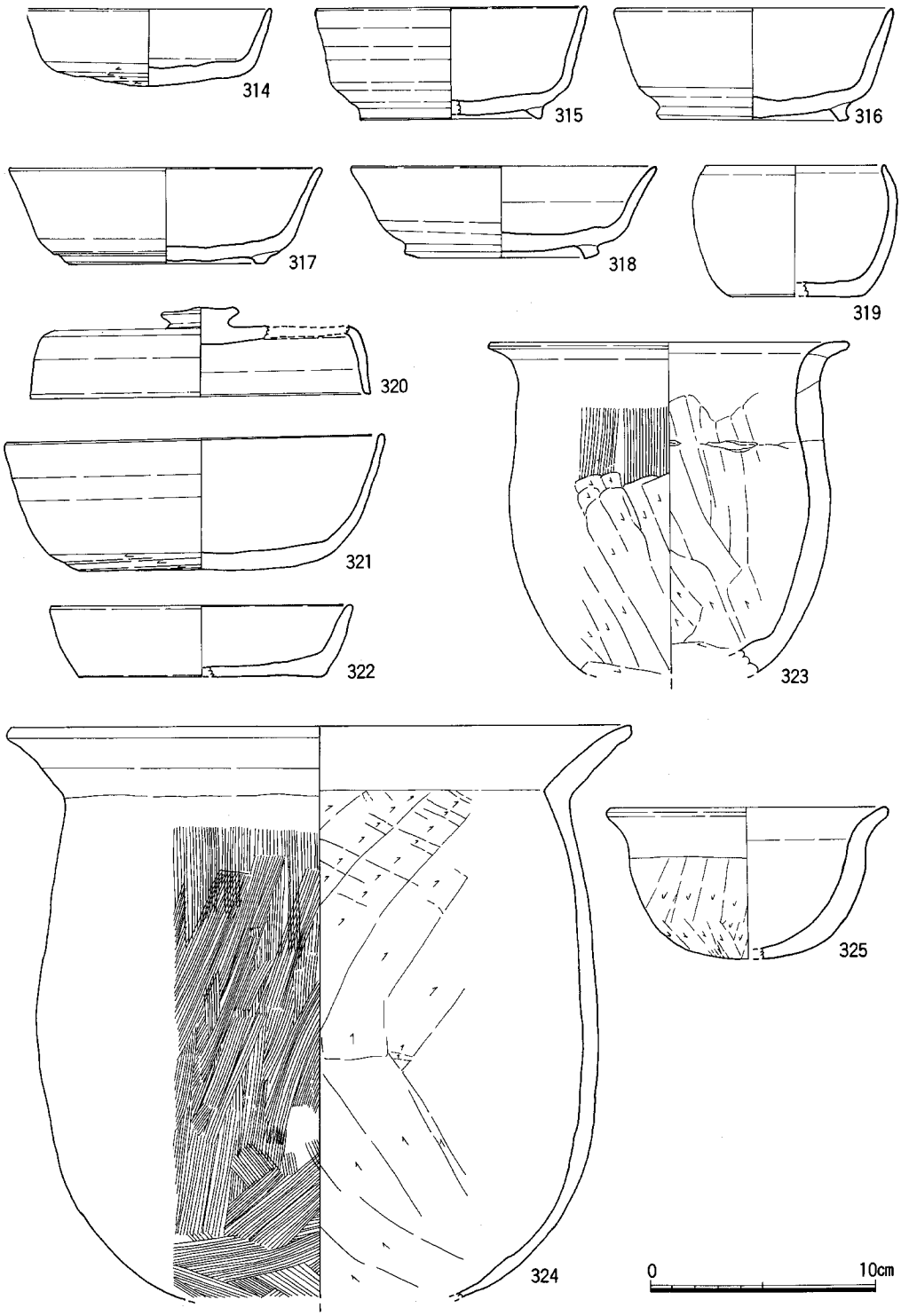
270は青磁椀である。無文で、全面にオリーブ色を呈する釉がかかる。畳付と高台の内側は釉が掻き取られている。器高7.2㎝、口径16.4㎝を計る。

**SK0193出土遺物**（271～283）

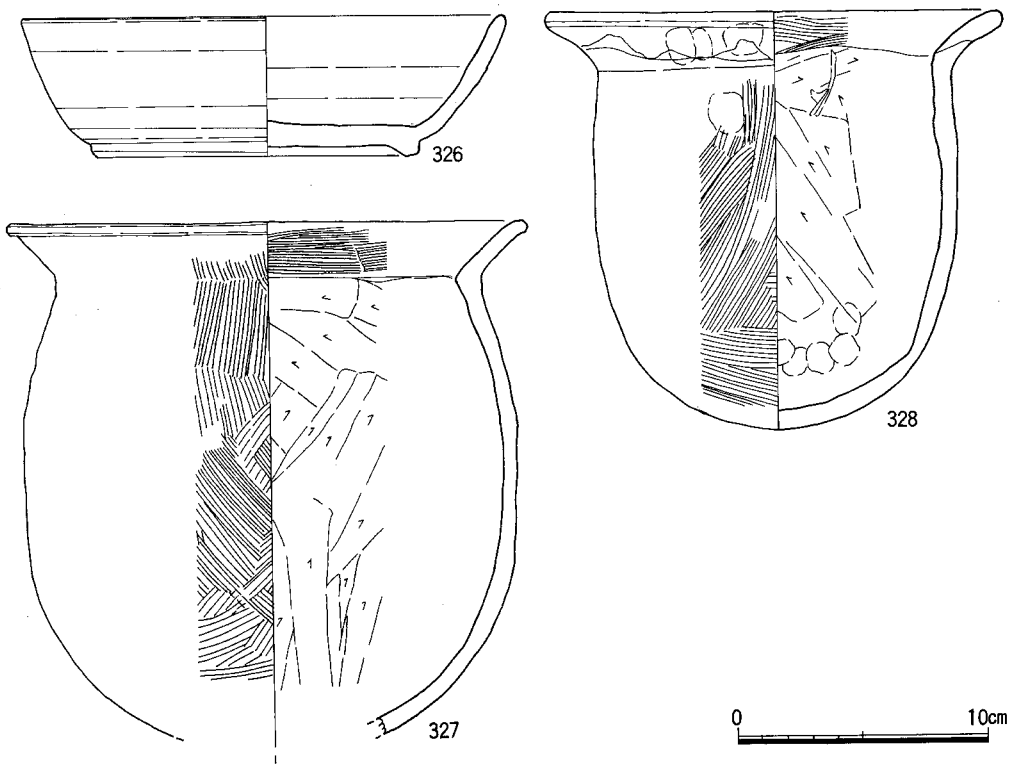
271、272は白磁椀である。玉縁の口縁で、271は見込みに沈線が巡る。273は施釉陶器の盤である。内面には釉下に鉄絵がある。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。釉は口縁と内面にかかり、淡い黄緑色を呈する。口縁の内外面には目跡が残る。

**SK0306出土遺物**（274～278）

274、275は白磁平底皿である。体部中位に沈線が巡り、そこを境に折れて立ち上がる。体部下半は露胎となる。釉色はオリーブ色、黄味がかった灰白色を呈する。276は体部は直線的に




第39図　SK0465出土遺物実測図（1/3）




第40図　SK0516出土遺物実測図（1/3）

開き、口縁は嘴状を呈する。内面には櫛描文が施される。277は天目椀である。口縁端部でわずかに外反する。胎土は砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。釉は黒色釉に、緑色の油滴がある。口縁端部のみ暗茶褐色を呈する。278は軒丸瓦である。内区に花文風の文様を施す。押圧文の軒平瓦に伴うとされている軒丸瓦である。

**SK0308出土遺物**（279～308）

279～303は土師器である。器面に煤が付着するものが多い。279～290は小皿で、底部の切離しはヘラ切りである。器高1.1～1.6cm、口径8.3～9.0cmを計る。281は底部に穿孔がある。291～293は坏で、器高2.5～2.6cm、口径14.1～15.6cmを計る。底部の切離しはヘラ切りである。291は体部に２カ所穿孔がある。394～301は丸底坏で、器高2.7～3.7cm、口径13.6～15.8cmを計る。底部の切離しはヘラ切りである。300は内面ヘラミガキが施される。302、303は椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、体部中位でわずかに脹らみを持つ。高台は低く、底部の中央寄りに付く。内外面とも丁寧にヘラケズリが施されるが、体部外面下半は多少の凹凸がある。高台の内側には板状圧痕が残る。302は高台の外側にヘラ切りの痕跡が見られる。色調は淡褐色を呈する。器高5.3、5.7cm、口径15.6、16.3cmを計る。304、305は白磁椀である。304は外面

に片切彫りの縦線文が施される。釉色はやや暗い灰白色を呈する。高台部分は露胎である。305は博多０－Ⅲ類の椀である。口縁は垂直に立ち上がり、端部でわずかに外反する。高台は高く、垂直に立つ。高台脇は削って稜がつく。胎土は砂粒が少し含み、白色を呈する。釉色は緑がかった灰白色を呈する。器高6.4cm、口径10.9cmを計る。306、307は高麗青磁である。306は体部は直線的に高く立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は逆台形を呈する。釉は全面にかけられ、畳付の部分のみ掻き取られる。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。見込みには片目跡が輪状に残る。二次焼成をうけている。器高7.4cm、口径14.6cmを計る。307は底部片である。釉は全面にかけられ、畳付の部分のみ掻き取られる。胎土は砂粒を少し含み、灰白色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。見込みと畳付には目跡が５カ所残る。二次焼成をうけている。308は緑釉陶器の壺の胴部片である。胎土は砂粒を少し含み、淡褐色を呈する。釉色は黄味まじりの緑色を呈する。

**SK0407出土遺物**（309～313）

309～311は土師器の小皿、坏、椀である。309は底部の切離しはヘラ切りで、底部には板状圧痕が残る。器高1.1cm、口径8.7cmを計る。310は底部の切離しは回転糸切りで、底部には板状圧痕が残る。器高3.6cm、口径12.8cmを計る。311は体部はやや下膨れで、太く、ハの字状に踏ん張った高台が付く。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。器高6.0cm、口径16.0cmを計る。底部には穿孔がある。312は高麗青磁の高台付皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は折れて外反する。釉は全面にかけられ、見込みと畳付に４カ所目跡が付く。胎土は砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。器高3.6cm、口径11.3cmを計る。313は越州窯系青磁の大型椀である。輪状の高台が付く。釉は全面にかけられ、見込みと畳付に目跡が残る。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。

**SK0465出土遺物**（314～325）

314～321は須恵器、322～325は土師器である。314は坏で、底部は回転ヘラケズリが施される。器高3.5cm、口径10.7cmを計る。315～318は高台付の坏である。315、316は体部は直線的に高く立ち上がる。低い高台が底部外寄りに付く。器高5.0cm、5.0cm、口径11.8cm、12.2cmを計る。317、318は体部は外反して立ち上がる。低い高台が底部外寄りに付く。器高4.2cm、4.1cm、口径13.7cm、13.5cmを計る。319は坏で、内湾気味に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。器高5.9cm、口径7.9cmを計る。320は蓋で、天井部に偏平の撮みが付く。口縁は垂直に折れて下垂する。天井部は回転ヘラケズリが施される。器高4.0cm、口径15.0cmを計る。321は大型の坏で、底部は回転ヘラケズリが施される。器高5.9cm、口径16.5cmを計る。322は坏で、底部の切離しは回転糸切りである。器高3.2cm、口径13.3cmを計る。混入品と考えられる。323、324は甕である。323は口縁は緩やかに外反する。調整は内面はヘラケズリ、外面は口縁はヨコナデ、胴部上半はハケメ、下半はヘラケズリが施される。324は口縁はくの字に折れる。調整は内面

はヘラケズリ、外面は口縁はヨコナデ、胴部はハケメが施される。325は鉢である。口縁は緩やかに外反し、胴部はヘラケズリが施される。

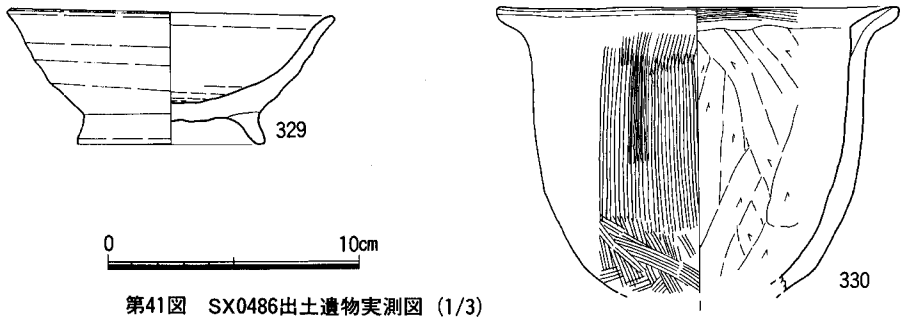
**SK0516出土遺物**（326～328）

326～328は土師器である。326は坏で、底部外寄りに低い高台が付く。器高5.5cm、口径10.8cmを計る。327は甕で、口縁はくの字に折れ、胴部は下膨れである。調整は内面はヘラケズリ、外面はハケメが施される。328は甕で、口縁は緩やかに外反し、胴部は寸胴である。調整は内面はヘラケズリ、外面はハケメを施す。

## 4）土壙墓出土遺物

**SX0486出土遺物**（329～330）

329、330は土師器である。329は坏で、ハの字に開く高い高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。器高5.2cm、口径12.6cmを計る。330は甕で、口縁はくの字に折れ、胴部は寸胴である。調整は内面はヘラケズリ、外面はハケメを施す。

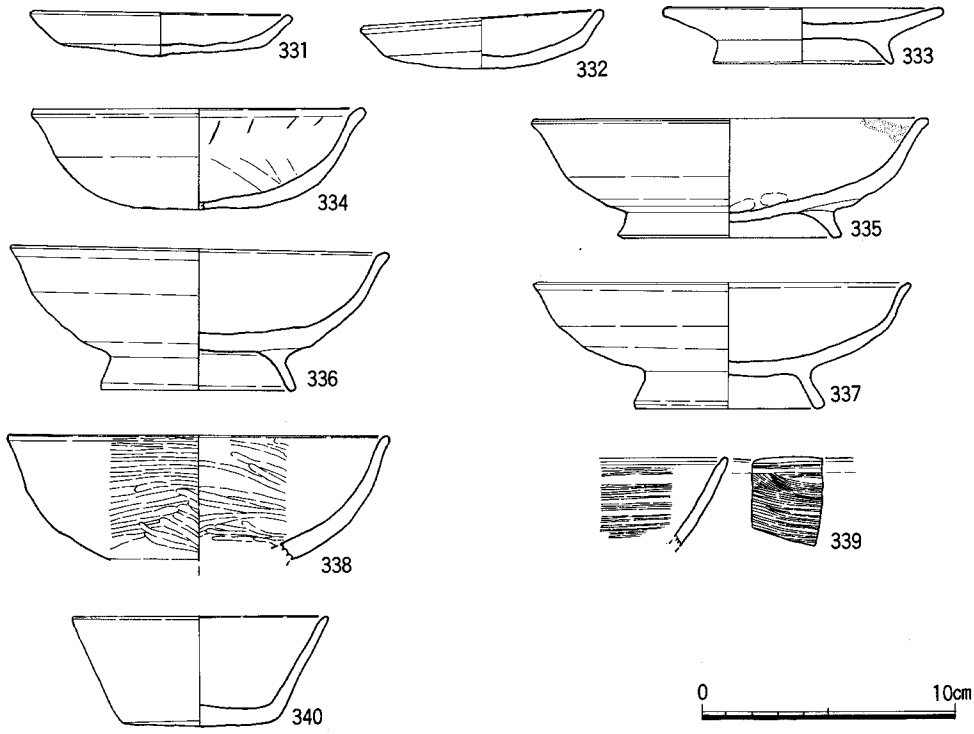



第41図　SX0486出土遺物実測図（1/3）

## 5）溝出土遺物

**SD0309出土遺物**（331～339）

331～337は土師器である。331、332は小皿で、底部の切離しはヘラ切りである。331は底部に板状圧痕が残る。器高1.7cm、2.1cm、口径9.9cm、9.2cmを計る。333は高台付の小皿で、ハの字に開く高台が付く。器高2.2cm、口径10.7cmを計る。334は丸底坏で、底部の切離しはヘラ切りで、底部に板状圧痕が残る。内面にはコテアテの痕跡が残る。器高4.0cm、口径12.8cmを計る。335～337は椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は上半で折れて、緩やかに外反する。底部中央寄りにハの字に開く高い高台が付く。調整は内外面ともナデである。高台内側には板状圧痕が残る。器高4.7cm、5.6cm、5.0cm、口径15.4cm、14.7cm、14.5cmを計る。338は黒色土器B類椀である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。339は瓦器椀で、楠葉型瓦器と考えられる。口縁直下に段を持ち、内外面とも細かいヘラミガキが施される。色調は黒




第42図　SD0309・0428出土遺物実測図（1/3）

色を呈する。

**SD0428出土遺物**（340）

340は須恵器坏である。体部は直線的に立ち上がる。底部の切離しはヘラ切りである。器高5.4cm、口径10.0cmを計る。

## 6）その他の遺物（341～399）

ここでは包含層や近世以降の遺構から出土した遺物について、図示した。

**国産土器**

341は黒色土器Ｂ類の托上椀である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。

**輸入陶磁器**

342～345は越州窯系青磁椀である。342は口縁は輪花状になる。343、344は輪状高台で、内面には花文が片切彫りされる。見込みと畳付には目跡が輪状に残る。胎土は砂粒を少し含み、灰色、褐色を呈する。釉色はオリーブ色、淡い緑褐色を呈する。345は同様の胴部片で、見込みに花文が片切彫りされる。346は青磁椀である。内面には複数の花文が片切彫りされる。釉は全面にかけられ、高台内面に目跡が残る。釉色はオリーブ色を呈する。347は青磁の香炉である。外面は蓮弁花が施される。畳付は釉を掻き取る。釉色は緑がかった灰白色を呈する。

348～350は高麗青磁である。348、349は椀で、断面逆台形の高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は折れて外反する。釉は全面にかかり、畳付のみ掻き取る。見込みと畳付に目跡が残る。胎土は砂粒を多く含み、釉色はオリーブ色を呈する。SK0308で同様の椀が出土している。350は蛇の目高台の椀で、体部は直線的に立ち上がる。釉は全面にかかり、畳付のみ掻き取る。畳付に目跡が残る。胎土は砂粒を少し含み、暗灰色を呈する。釉色は灰緑色を呈する。今回出土の高麗青磁の中では唯一の精製品である。

351、352は白磁である。351は坏で、体部は直線的に広く開く。外面には片切彫りで蓮弁を、内面には櫛描文を施す。胎土は砂粒を少し含み、白色を呈する。釉色はやや黄味がかった白色を呈する。全面に氷裂が見られる。352は椀で、見込みに花文が片切彫りされる。釉は高台脇までかかり、釉色は緑がかった灰白色を呈する。

353は青白磁の椀である。見込みには櫛描文を施す。底面は露胎である。

354～358は青白磁の合子である。354は蓋、355～358は身である。354は草花文が施される。358は底面に文字が型押しされる。「美□」か。

359～361は白磁の蓋付小壺である。359、340は口縁外面に菊花文が施される。

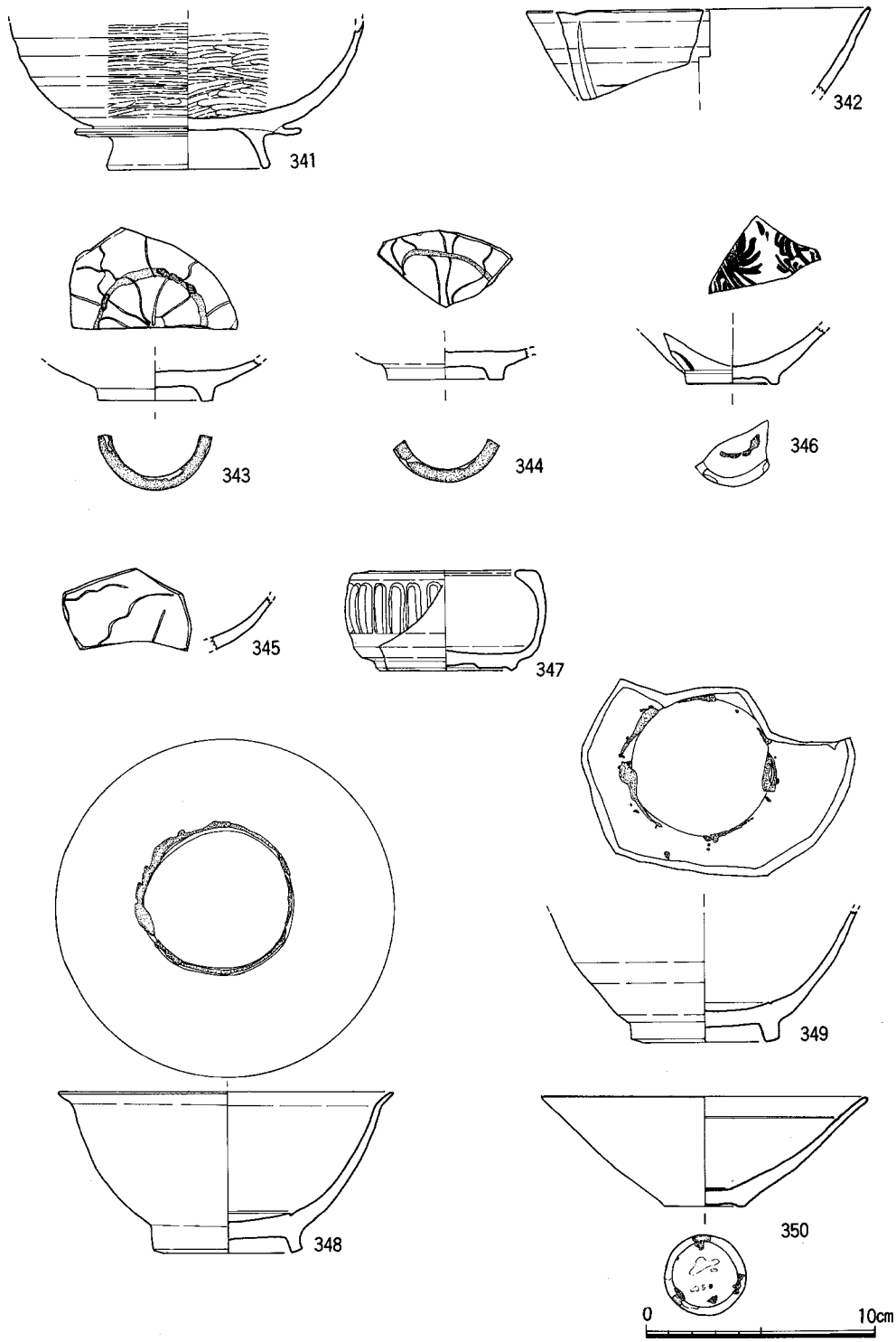
362～364は天目椀である。

**墨書土器**

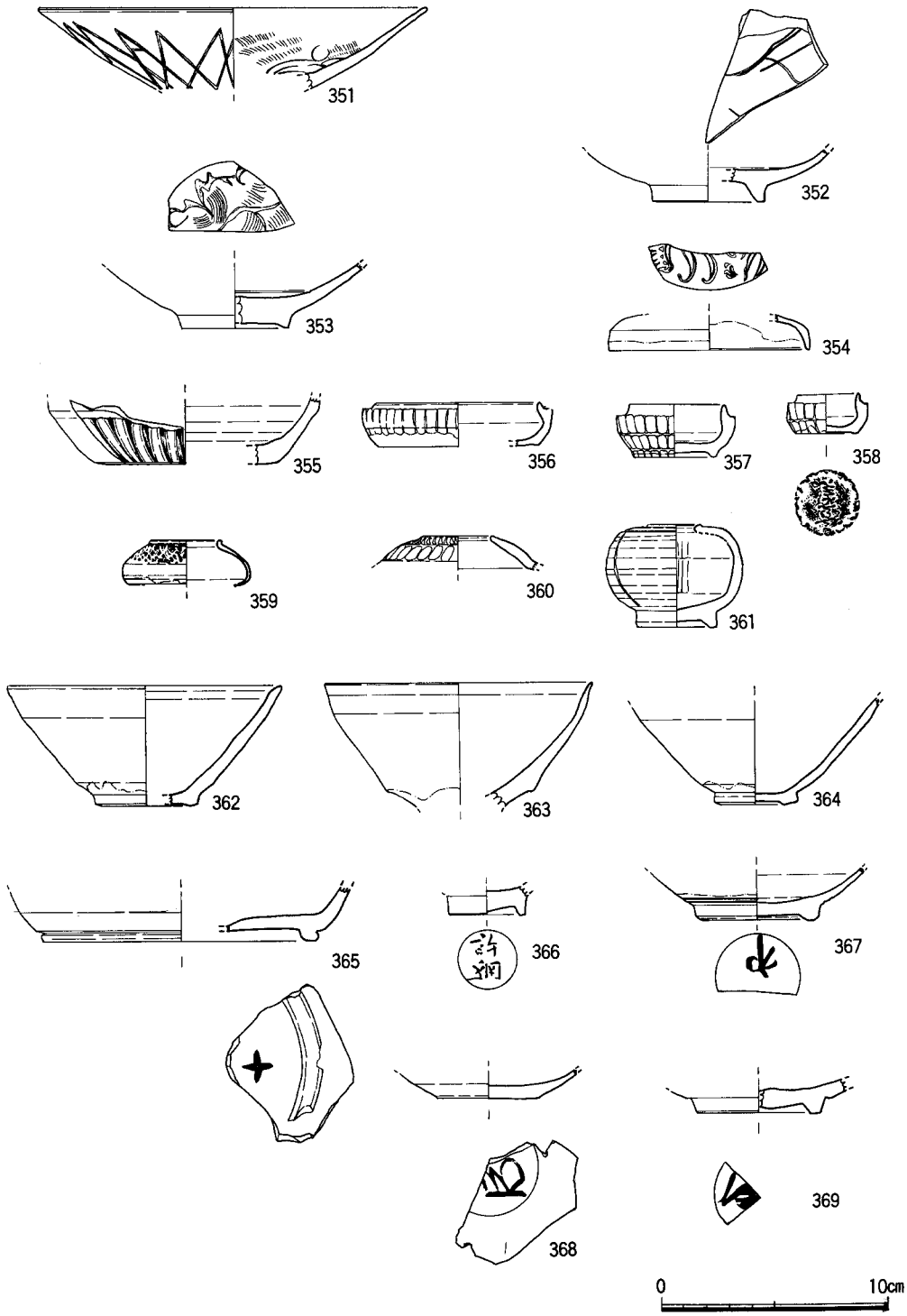
365は須恵器坏で、高台内側に「十」と書かれる。366は白磁椀で、高台内側に「許網」と書かれる。367～369は白磁で、花押が書かれる。

**石製品**

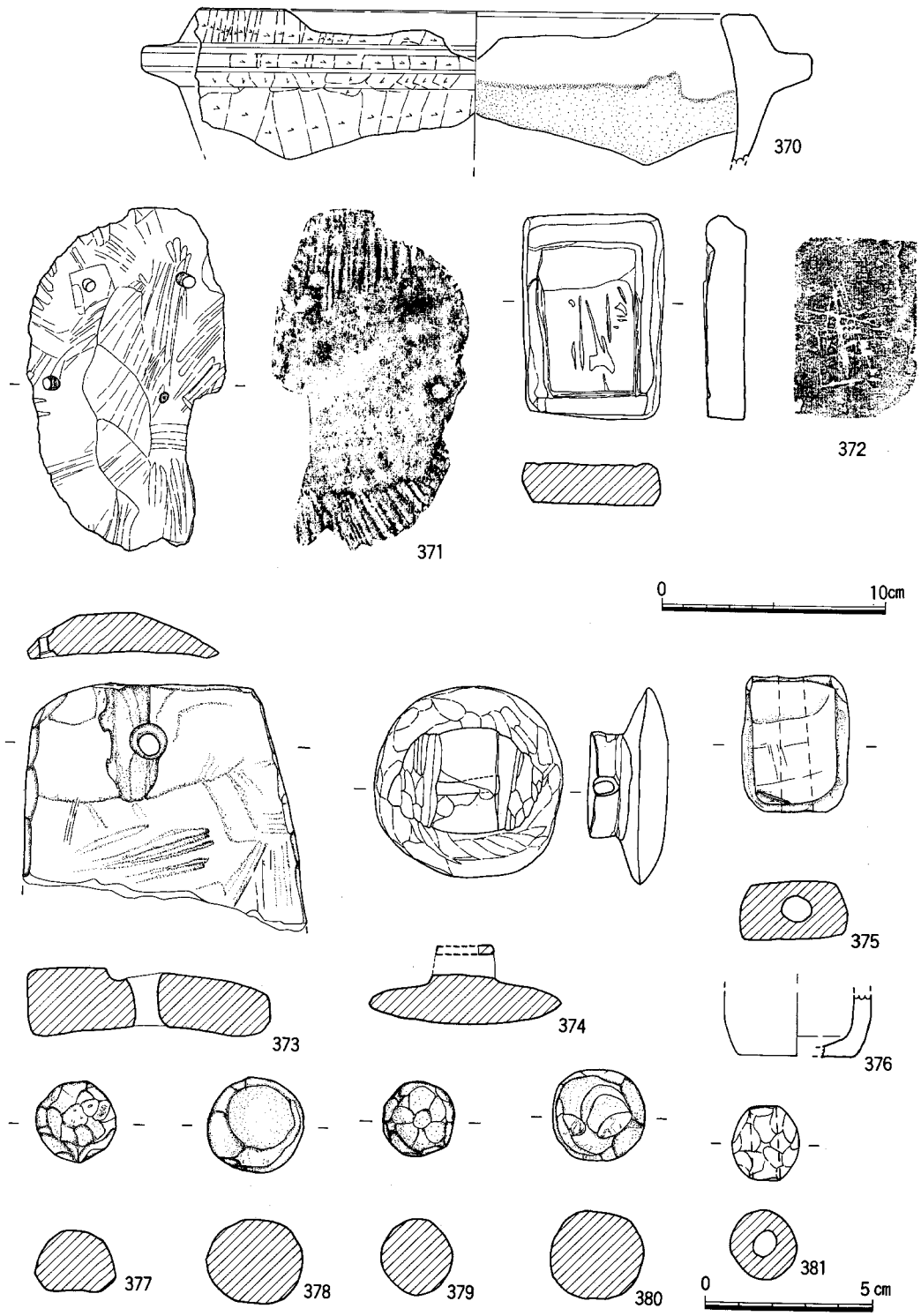
370は滑石製石鍋である。口縁下に鍔が巡る。371、373～375は滑石製品である。371は歪な楕円形を呈し、３カ所穿孔がある。鍋の転用品である。用途不明。372は硯である。373は平面形は台形を呈し、上方に１カ所穿孔がある。下部は欠損している。374は円形の体部に、長方



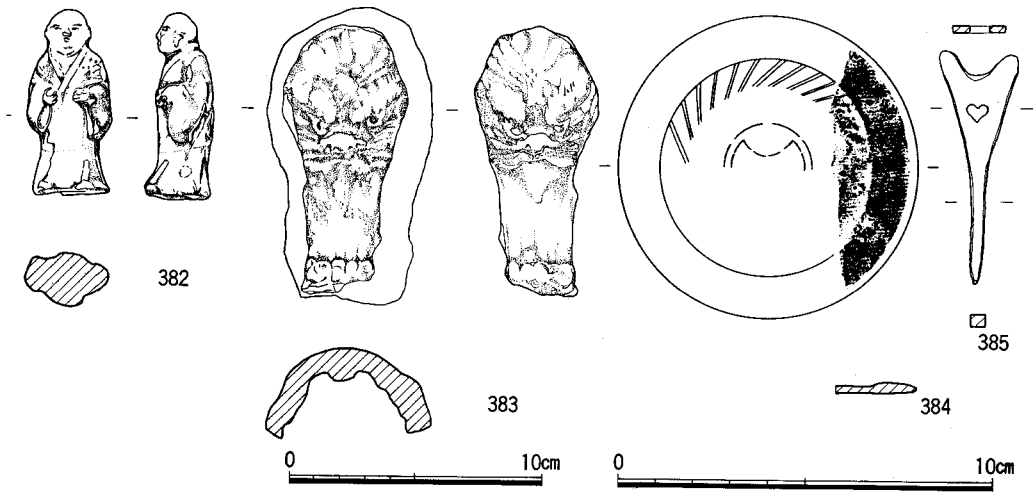

第43図　黒色土器・青磁実測図（1/3）




第44図　白磁・青白磁・天目・墨書土器実測図（1/3）




第45図　石製品・土製品実測図（1/2、1/3）




第46図　その他の出土遺物実測図（1/2、1/3）

形の撮みが付く。撮みには穿孔が施される。裏面は使用による磨耗がある。当て具か。375は平面形は長方形で、長軸方向に穿孔が施される。376は滑石製の容器である。377～380は砂岩質の玉である。表面に削り痕が残る。玩具か。径2.2～2.9cmを計る。

**土製品**

381は有孔の土製品である。径2.0～2.2cmを計る。

**陶製品**

382は陶製の人物像である。胎土は淡黄褐色を呈し、上から3/4まで淡黄色の釉がかかり、両肩の部分には緑釉がかかる。また、眉は墨で描かれる。高さ7.4cmを計る。肥前系陶器と考えられる。

**鋳型**

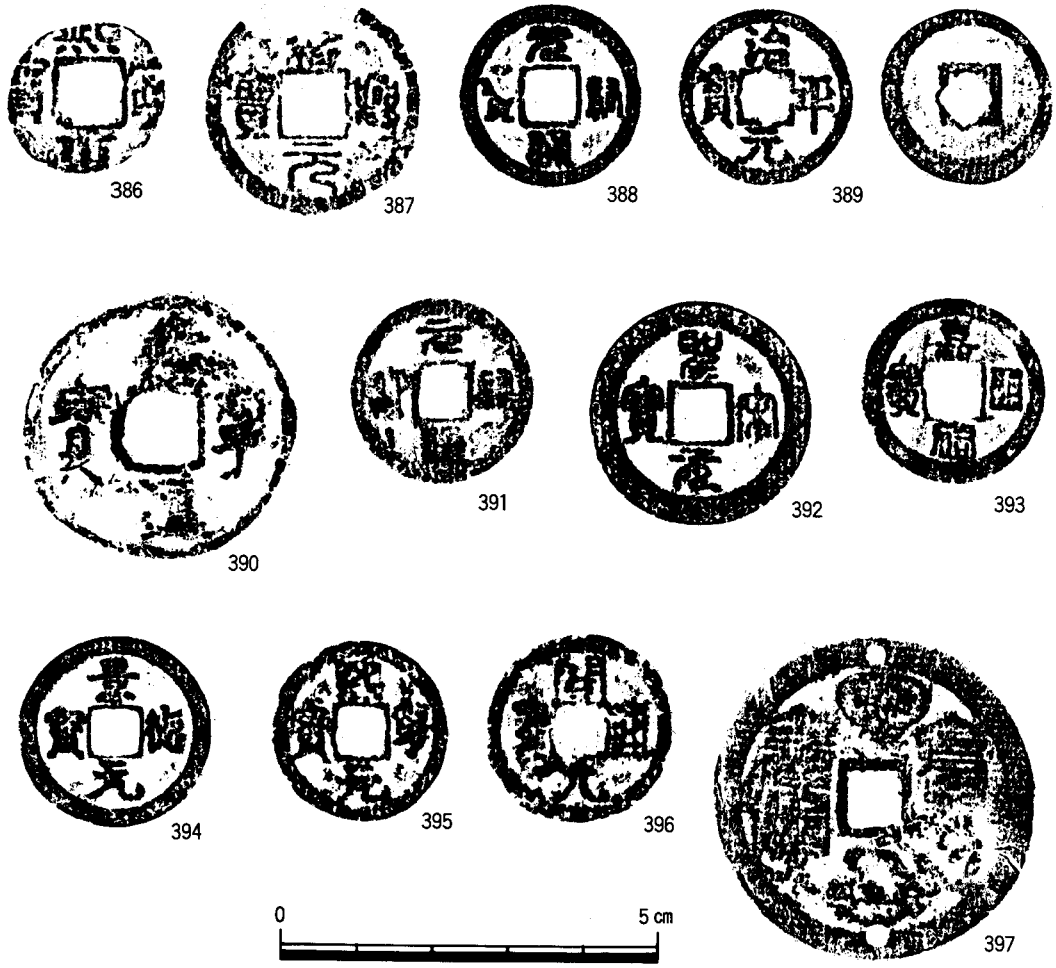
383は獣脚の鋳型である。香炉等の脚になると考えられる。内面の長さ10.1cm、幅5.0cmを計る。近世の井戸の掘方から出土しているため、時期は特定できないが、今回の調査ではSK0045で銅製容器の鋳型等が出土しており、同様の時期に属するとも考えられる。

**銅製品**

384は小型仿製鏡の縁の部分である。中央がやや膨らむ平縁で、右上がりの櫛歯文の文様帯がある。復元径8.0cm、縁の厚さ0.3cmを計る。385は鏃である。頸部は断面方形で、鏃身部は二股に分かれる。中央には透かし孔がある。長さ6.2cm、幅2.1cmを計る。

**銅銭**

386～398は銅銭である。銭名、初鋳年等は一覧表に示す通りである。386は縁が削られている。389は孔が星形に開けられている。いわゆる孔星銭である。397は絵銭で、上下二カ所に穿孔が施されている。




第47図　出土銅銭拓影（1/1）

| 番号 | 出土面 | 出土地点・遺構 | 銭　名 | 時代 | 初　　鋳 |
|---|---|---|---|---|---|
| 386 | 1 面 | 0017 | 熙寧元寶 | 北宋 | 熙寧元年　1068年 |
| 387 | 1 面 | 0045 | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年　1094年 |
| 388 | 1 面 | 0045 | 元祐通寶 | 北宋 | 元祐元年　1086年 |
| 389 | 1 面 | 0105 | 治平元寶 | 北宋 | 治平元年　1064年 |
| 390 | 1 面 | 0106 | 崇寧通寶 | 北宋 | 崇寧元年　1102年 |
| 391 | 1 面 | 0134 | 元祐通寶 | 北宋 | 元祐元年　1086年 |
| 392 | 1 面 | 0141 | 聖宋元寶 | 北宋 | 建中靖国元年　1101年 |
| 393 | 1 面 | 0218 | 嘉祐通寶 | 北宋 | 嘉祐元年　1056年 |
| 394 | 1 面 | 焼土中 | 景德元寶 | 北宋 | 景德元年　1004年 |
| 395 | 2 面 | 北側 | 熙寧元寶 | 北宋 | 熙寧元年　1068年 |
| 396 | 1 ～ 2 面 | ピット | 開元通寶 | 唐 | 武德 4 年　621年 |

第 2 表　出土銅銭一覧表

# 7 まとめ

今回の調査では古墳時代から近世にかけての遺構、遺物を検出した。ここではこの調査で得た成果と問題点について述べていく。

今回の調査では層序と遺構の検出状況に留意しながら、遺構面を3面設定した。しかし、地山の砂丘は北西側に緩やかに傾斜しており、第1面を設定した時点で既に一部地山が露出した所も見られた。従って、これらの遺構面は必ずしも同一の生活面ではなく、複数の時期の遺構が混在する状況にある。遺構を時期毎に見ていくと大きく5期に分けられる。

1期－古墳時代前期

2期－8～9世紀

3期－11世紀後半～12世紀後半

4期－13世紀後半～14世紀

5期－16世紀

それでは次に時期毎に主要な遺構について見ていく。

## 1 期

この時期の遺構にはSC0429、0514などがある。SC0429は調査区北西隅にあり、遺構の全容はつかむことはできなかったが、大量の古式土師器が廃棄されていた。土師器は布留式古段階に位置づけられる甕（布留型、山陰系）、壺（二重口縁壺、直口壺）、小型丸底壺、小型器台、鉢、高坏などがある。この時期の遺構は博多遺跡群では祇園町を中心として検出されている。本調査区の南側で行なわれていた第45次調査では同期の竪穴住居が検出されている。北側では第70次調査で方形周溝墓が検出されているが、博多遺跡群の古墳時代前期の集落の分布としては本調査地点は西限と考えられる。この他、遺物として小型仿製鏡の鏡片が出土した。出土遺構からは他には土師器、須恵器等が出土しており、遺構に伴うものではない。鏡は中央がやや膨らむ平縁で、櫛歯文帯がわずかに残存する。複元径約8.0cmを計る。鏡式としては内行花文鏡が考えられる。博多遺跡群では鏡の出土は地下鉄祇園町工区L区SK14で5世紀前後の素文鏡がある。

## 2 期

この時期の遺構にはSC0406、SE0342、SX0486等がある。SC0406は調査区南側で検出した竪穴住居で、平面形は長方形を呈する。規模は3.7m×5.0m前後で、小型の竪穴住居である。住居の西壁にはカマドが設けられる。遺構の時期は出土遺物に時期差が見られるが、奈良時代と考えられる。SX0486は調査区中央で検出した木棺墓で、両手及び下肢骨が残存していた。頭位は南向きで、左手横に土師器坏を副葬していた。これらの他、この時期の遺物を出土する遺

構はあるが、性格が不明なものがほとんどである。遺物として「十」と墨書した須恵器坏が出土している。

3　期

この時期は遺構としてはSE0050、SE0132、SE0385、SK0308、SD0309などがある。この時期は土師器の坏、小皿の底部の切り離しがヘラ切りから回転糸切りへの転換期でもあり、陶磁器としては白磁が大量に出土する時期でもある。SK0308は焼土、炭などを多量に含む土坑で、埋土中から多量の土師器坏、皿や輸入陶磁器が出土した。土師器坏、皿はヘラ切りのみで、器高2.5～2.6㎝、1.1～1.6㎝、口径14.1～15.6㎝、8.3～9.0㎝を計る。坏には丸底坏が半数以上を占める。この他、椀や黒色土器B類などが出土した。輸入陶磁器は白磁碗O－Ⅲ類、Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、越州窯系青磁、高麗青磁などが出土した。11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる。SE0050、SE0132は回転糸切りの土師器坏、皿のみが出土し、輸入陶磁器は白磁Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類に加え、同安窯糸青磁、龍泉窯系青磁等が伴う。12世紀後半に位置づけられる。

ところで、第Ⅰ面D区で焼土面を検出したが、焼土面下の遺構・遺物は3期に位置づけられることから、焼土面の時期は13世紀前半から後半と考えられる。

4　期

4期の遺構としてはSK0045、SK0136がある。SK0045からは多量の土師器坏、皿の他、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、口禿げの白磁碗等が出土したが、それらに伴って坩堝、ふいごの羽口、華瓶の鋳型が出土した。時期は特定できないが、近世の井戸の掘り方から獣脚の鋳型が出土しており、周辺に鋳造工房が存在した可能性がある。共伴遺物等から、13世紀後半～14世紀前半と考えられるが、その時期の鋳造関係の遺構としては本調査地点の北西300ｍにある第47次調査地点では多量の銅滓や坩堝、鋳型、炉壁、ふいごの羽口等が出土している。そこから東側100ｍにある第61次調査地点では炉の下部構造と考えられる粘土貼りの床面や溜枡が検出され、銅滓や坩堝、鋳型等が出土した。博多浜西側にはこのような遺構、遺物が幾つか見られるが、遺跡群の中での工房の在り方など検討すべき課題であろう。

5　期

この時期の遺構としてはSE0104がある。該期の遺構はこれ以外にはほとんど見られず、これ以降は近世の遺構となる。これは豊臣秀吉による博多復興の際の整地によって、削平されたことによると考える。SE0104は石組の井戸で、井戸側からは明染付、茶臼等が出土した。出土遺物から16世紀後半に位置づけられるが、博多遺跡群での石組井戸は16世紀代のものが大半である。今後、類例の増加を待って、井戸側の変遷を検討しなければならないだろう。

以上、今回の調査の概略を簡単に触れたが、遺構、遺物とも充分に報告できたと言い難い。今後の調査で、その責を果していきたい。

**第3表　土師器皿・坏法量一覧表**

| 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) | 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SC406(7) | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | 2.5 | 10.7 | 7.4 | ○ | | × | | | | | | | |
| ピット296・354(49・51) | | | | | | | | | | | | | |
| 49 | 1.6 | 10.2 | 7.2 | ○ | | ○ | 51 | 3.3 | 12.6 | 7.2 | ○ | | ○ |
| SE050(57～63) | | | | | | | | | | | | | |
| 57 | 1.0 | 8.8 | 7.6 | | ○ | ○ | 61 | 1.0 | 8.8 | 7.6 | | ○ | ○ |
| 58 | 1.1 | 8.4 | 7.0 | | ○ | ○ | 62 | 2.5 | 13.1 | 9.5 | | ○ | ○ |
| 59 | 1.1 | 8.5 | 6.0 | | ○ | ○ | 63 | 2.4 | 15.0 | 11.0 | | ○ | ○ |
| 60 | 1.2 | 9.8 | 8.3 | | ○ | ○ | | | | | | | |
| SE132・134(91～95、101) | | | | | | | | | | | | | |
| 91 | 1.2 | 8.2 | 6.3 | | ○ | ○ | 94 | 2.8 | 13.8 | 9.0 | | ○ | ○? |
| 92 | 1.0 | 8.4 | 7.2 | | ○ | ○ | 95 | 3.1 | 15.2 | 8.0 | ○ | | ○ |
| 93 | 1.3 | 9.7 | 7.9 | | ○ | ○ | 101 | 2.7 | 11.8 | 8.4 | | ○ | ○ |
| SE137(106、107) | | | | | | | | | | | | | |
| 106 | 2.5 | 11.7 | 8.5 | | ○ | ○ | 107 | 2.5 | 12.1 | 9.3 | | ○ | ○ |
| SK218(115・116) | | | | | | | | | | | | | |
| 115 | 1.4 | 9.3 | 7.7 | | ○ | ○ | 116 | 3.2 | 15.6 | 9.9 | | ○ | ○ |
| SE307・342(121・127) | | | | | | | | | | | | | |
| 121 | 3.1 | 15.5 | 10.3 | ○ | | ○ | 127 | 3.8 | 12.6 | 9.0 | ○ | | × |
| SE385(129～133) | | | | | | | | | | | | | |
| 129 | 1.2 | 8.5 | 6.5 | ○ | | ○ | 132 | 3.3 | 14.8 | 10.3 | ○ | | × |
| 130 | 1.2 | 8.8 | 6.9 | ○ | | ○ | 133 | 3.3 | 14.3 | 11.6 | ○ | | × |
| 131 | 1.6 | 8.3 | 6.9 | ○ | | × | | | | | | | |
| SK045(147～216) | | | | | | | | | | | | | |
| 147 | 1.2 | 7.7 | 6.6 | | ○ | × | 163 | 2.4 | 12.9 | 8.2 | | ○ | ○ |
| 148 | 1.2 | 7.4 | 5.7 | | ○ | ○ | 164 | 2.3 | 11.7 | 9.8 | | ○ | ○ |
| 149 | 1.1 | 6.9 | 5.9 | | ○ | ○ | 165 | 2.4 | 11.6 | 8.0 | | ○ | ○ |
| 150 | 1.4 | 7.9 | 6.2 | | ○ | ○ | 166 | 2.7 | 12.5 | 8.8 | | ○ | ○ |
| 151 | 1.3 | 8.2 | 6.0 | | ○ | × | 167 | 2.6 | 12.0 | 8.3 | | ○ | × |
| 152 | 1.3 | 7.9 | 6.5 | | ○ | ○ | 168 | 2.9 | 11.7 | 8.7 | | ○ | × |
| 153 | 1.2 | 7.5 | 6.2 | | ○ | ○ | 169 | 2.4 | 12.3 | 9.0 | | ○ | ○ |
| 154 | 1.2 | 7.5 | 6.4 | | ○ | × | 170 | 2.6 | 12.5 | 8.7 | | ○ | × |
| 155 | 1.2 | 7.5 | 5.5 | | ○ | × | 171 | 2.6 | 11.6 | 7.9 | | ○ | ○ |
| 156 | 1.4 | 8.5 | 6.3 | | ○ | × | 172 | 2.7 | 11.6 | 8.2 | | ○ | ○ |
| 157 | 1.4 | 8.4 | 5.8 | | ○ | ○ | 173 | 2.6 | 11.7 | 7.9 | | ○ | × |
| 158 | 1.3 | 8.0 | 6.4 | | ○ | × | 174 | 2.3 | 12.8 | 9.7 | | ○ | × |
| 159 | 1.3 | 7.5 | 5.5 | | ○ | ○ | 175 | 2.7 | 13.3 | 8.6 | | ○ | × |
| 160 | 1.3 | 8.1 | 6.7 | | ○ | ○ | 176 | 2.9 | 11.9 | 8.4 | | ○ | × |
| 161 | 1.2 | 7.2 | 6.8 | | ○ | ○ | 177 | 2.8 | 11.9 | 7.9 | | ○ | × |
| 162 | 2.4 | 11.8 | 8.1 | | ○ | ○ | 178 | 2.4 | 11.9 | 7.9 | | ○ | × |

| 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) | 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 179 | 2.6 | 12.9 | 9.3 | | ○ | ○? | 198 | 2.4 | 12.9 | 8.7 | | ○ | ○ |
| 180 | 2.6 | 13.4 | 9.0 | | ○ | × | 199 | 2.4 | 12.1 | 8.3 | | ○ | ○ |
| 181 | 2.6 | 11.5 | 8.5 | | ○ | × | 200 | 2.7 | 11.4 | 8.7 | | ○ | × |
| 182 | 2.6 | 11.8 | 8.7 | | ○ | × | 207 | 2.6 | 12.4 | 8.3 | | ○ | × |
| 183 | 2.6 | 12.3 | 8.9 | | ○ | × | 202 | 2.2 | 13.1 | 10.0 | | ○ | ○? |
| 184 | 2.4 | 12.0 | 9.4 | | ○ | × | 203 | 2.5 | 12.5 | 8.5 | | ○ | ○ |
| 185 | 2.6 | 12.7 | 9.0 | | ○ | ○ | 204 | 2.2 | 12.5 | 9.0 | | ○ | ○ |
| 186 | 2.2 | 12.5 | 8.7 | | ○ | ○ | 205 | 2.3 | 11.4 | 8.5 | | ○ | × |
| 187 | 2.6 | 11.8 | 8.0 | | ○ | × | 206 | 2.6 | 11.5 | 8.0 | | ○ | × |
| 188 | 2.3 | 11.6 | 8.4 | | ○ | × | 207 | 2.7 | 12.5 | 8.5 | | ○ | × |
| 189 | 2.3 | 11.9 | 8.5 | | ○ | ○ | 208 | 2.8 | 13.4 | 8.0 | | ○ | ○ |
| 190 | 2.6 | 11.3 | 7.5 | | ○ | × | 209 | 2.5 | 12.6 | 8.5 | | ○ | × |
| 191 | 2.7 | 11.8 | 8.2 | | ○ | × | 210 | 2.6 | 13.2 | 9.0 | | ○ | ○ |
| 192 | 2.7 | 12.4 | 9.7 | | ○ | ○ | 211 | 2.7 | 14.3 | 9.4 | | ○ | ○ |
| 193 | 2.3 | 12.2 | 7.7 | | ○ | × | 212 | 3.7 | 15.3 | 9.3 | | ○ | × |
| 194 | 2.6 | 12.3 | 8.2 | | ○ | × | 213 | 4.0 | 18.5 | 12.0 | | ○ | × |
| 195 | 2.4 | 11.7 | 7.7 | | ○ | ○ | 214 | 3.6 | 17.4 | 12.0 | | ○ | × |
| 196 | 2.4 | 12.8 | 9.6 | | ○ | ○ | 215 | 3.9 | 13.3 | 6.2 | | ○ | × |
| 197 | 2.7 | 12.3 | 9.0 | | ○ | ○ | 216 | 4.9 | 13.5 | 6.5 | | ○ | ○ |
| SK136(235～262) | | | | | | | | | | | | | |
| 235 | 1.3 | 7.5 | 5.6 | | ○ | × | 249 | 2.7 | 12.4 | 9.2 | | ○ | ○ |
| 236 | 1.4 | 7.9 | 5.7 | | ○ | × | 250 | 2.3 | 12.3 | 8.0 | | ○ | × |
| 237 | 1.3 | 8.4 | 6.3 | | ○ | ○ | 251 | 2.7 | 12.0 | 9.0 | | ○ | × |
| 238 | 1.4 | 7.2 | 5.0 | | ○ | ○ | 252 | 2.4 | 12.4 | 9.4 | | ○ | × |
| 239 | 1.6 | 7.7 | 5.0 | | ○ | × | 253 | 2.4 | 12.2 | 9.3 | | ○ | ○ |
| 240 | 2.8 | 12.0 | 8.5 | | ○ | × | 254 | 2.6. | 11.4 | 8.1 | | ○ | ○ |
| 241 | 2.9 | 12.4 | 9.0 | | ○ | × | 255 | 2.6 | 11.6 | 7.8 | | ○ | ○ |
| 242 | 2.6 | 11.8 | 9.0 | | ○ | × | 256 | 2.7 | 12.1 | 8.5 | | ○ | ○ |
| 243 | 2.7 | 12.3 | 10.0 | | ○ | ○ | 257 | 2.4 | 12.1 | 8.5 | | ○ | ○ |
| 244 | 2.6 | 12.0 | 8.3 | | ○ | × | 258 | 2.7 | 13.2 | 10.0 | | ○ | ○ |
| 245 | 2.4 | 12.1 | 8.8 | | ○ | ○ | 259 | 2.4 | 12.1 | 8.2 | | ○ | ○ |
| 246 | 2.5 | 12.2 | 8.5 | | ○ | × | 260 | 2.6 | 11.9 | 8.5 | | ○ | ○ |
| 247 | 2.7 | 12.0 | 8.8 | | ○ | ○ | 261 | 2.6 | 11.7 | 7.8 | | ○ | ○ |
| 248 | 2.6 | 12.5 | 9.3 | | ○ | × | 262 | 2.6 | 12.2 | 9.0 | | ○ | ○ |
| SK155(269) | | | | | | | | | | | | | |
| 269 | 3.0 | 14.6 | 10.4 | | ○ | ○ | | | | | | | |
| SK308(279～301) | | | | | | | | | | | | | |
| 279 | 1.2 | 9.0 | 7.7 | ○ | | × | 282 | 1.1 | 8.9 | 7.4 | ○ | | ○ |
| 280 | 1.1 | 8.8 | 7.3 | ○ | | ○ | 283 | 1.2 | 8.7 | 7.5 | ○ | | ○ |
| 281 | 1.4 | 8.7 | 7.7 | ○ | | ○ | 284 | 1.2 | 8.7 | 7.3 | ○ | | ○ |

| 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) | 番号 | 器高 | 口径 | 底径(cm) | ヘラ切り | 糸切り | 板状圧痕の有無(○、×) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 285 | 1.3 | 8.9 | 6.9 | ○ | | ○ | 294 | 3.5 | 14.4 | − | ○ | | × |
| 286 | 1.6 | 8.6 | 7.3 | ○ | | ○ | 295 | 2.7 | 13.8 | − | ○ | | × |
| 287 | 1.1 | 8.8 | 7.4 | ○ | | ○ | 296 | 3.2 | 14.7 | − | ○ | | ○? |
| 288 | 1.5 | 8.7 | 7.4 | ○ | | ○ | 297 | 3.5 | 14.4 | − | ○ | | ○ |
| 289 | 1.2 | 9.0 | 7.3 | ○ | | ○ | 298 | 3.1 | 14.7 | − | ○ | | × |
| 290 | 1.4 | 8.3 | 7.5 | ○ | | ○ | 299 | 3.4 | 15.8 | 13.0 | ○ | | ○ |
| 291 | 3.5 | 14.1 | 8.8 | ○ | | ○ | 300 | 3.7 | 15.2 | − | ○ | | × |
| 292 | 3.6 | 15.6 | 10.9 | ○ | | × | 301 | 3.3 | 13.6 | 11.2 | ○ | | ○ |
| 293 | 2.5 | 14.6 | 10.5 | ○ | | × | | | | | | | |
| SK407(309・310) | | | | | | | | | | | | | |
| 309 | 1.1 | 8.7 | 6.5 | ○ | | ○ | 310 | 3.6 | 12.8 | 7.8 | | ○ | ○ |
| SK465(322) | | | | | | | | | | | | | |
| 322 | 3.2 | 13.3 | 10.7 | ○ | | ○? | | | | | | | |
| SD309(331～334) | | | | | | | | | | | | | |
| 331 | 1.7 | 9.9 | 7.9 | ○ | | ○ | 334 | 4.0 | 12.8 | − | ○ | | ○ |
| 332 | 2.1 | 9.2 | 7.8 | ○ | | × | | | | | | | |

## 第4表　陶磁器分類一覧

**SK0024**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:2、Ⅱ-1、Ⅳ:2:1(1)、Ⅳ:5、Ⅴ-1:2、高台付皿Ⅰ:1、Ⅱ:2、平底皿0-Ⅱ:1(1)、Ⅱ-1:1、Ⅱ:5、Ⅳ-2:2、Ⅵ-1:2、香炉片:2 |
| | 青磁 | 龍泉碗Ⅰ-5:2、Ⅰ-9:1(1)、同安碗Ⅰ:1、Ⅱ:1、不明:1(1) |
| | 中国陶器 | A群Ⅱ-盤？:1、盤:3、Ⅰ-四耳壺:2、準A群四耳壺:3、B群袋物:7、皿:1、C群捏鉢3:1、捏鉢:1、D群大型容器:6、不明:2 |
| | その他 | 青白磁合子蓋:1、合子身:2 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:15、ヘラ:1、小皿糸:1 |
| | 陶磁器 | ― |
| | その他 | 瓦器碗:6、瓦質土器:1 |

**SK0045**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:8、Ⅱ:22(1)、Ⅳ-1:1(1)、Ⅳ-2:6(6)、Ⅳ:22(22)、Ⅴ-1:12、Ⅴ-2:2、Ⅵ－1:7、Ⅵ-3:8(5)、Ⅵ:3、Ⅸ:6(2)<br>高台付皿Ⅰ-2:1、Ⅰ:3(1)、Ⅱ:9(1)、平底皿Ⅱ-1:2、Ⅱ:12(3)、Ⅳ-2:1、Ⅵ:3(2)、口禿皿:13(4)、四耳壺:1、水注:1、袋物:11 |
| | 青磁 | 龍泉碗Ⅰ－2:2、Ⅰ-5:13(2)、Ⅰ-5:13(2)、Ⅰ-6:13、Ⅰ-8:2、Ⅰ-9:73(4)、スタンプ文:2(2)、Ⅱ-1:16(1)、Ⅱ-2:6、Ⅲ-碗6、Ⅲ:3鉢1、皿Ⅰ-1:2(1)、Ⅰ-2:1(1)、Ⅰ-5:1(1)、高台付皿:1(1)、香炉:1、同安碗Ⅱ:19(2)、高台付皿:1(1)、平皿Ⅰ-1:3(2)、Ⅰ-1:3(3)、高麗青磁碗:1(1) |
| | 中国陶器 | A群Ⅰ-盤-1:1、Ⅰ-盤-2:8、Ⅰ-盤-3:1、Ⅰ-盤-1:52、Ⅱ-盤:1、Ⅰ-四耳壺:4、Ⅲ-小口瓶:1、Ⅲ-鉢:1、蓋:1、壺:1、準A群四耳壺:62、B群水注:2、瓶:2、短頸壺:3、袋物:163、皿:5、鉢:11、C群捏鉢1:1、捏鉢2:1、捏鉢-3:5、捏鉢:19、D群:19 |
| | その他 | 青白磁碗:6、皿:3(2)、合子身:1、小壺:1、香炉:1、袋物:1、黒褐釉碗:1、天目碗:5 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:1293、ヘラ:2、小皿糸:227 |
| | 陶磁器 | 備前？甕:5 |
| | その他 | 瓦器碗:37、瓦質土器鉢:1、須恵質土器鉢:7 |

**SE0050**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:3、Ⅱ:10、Ⅳ－2:1、Ⅳ:4、Ⅴ-1:15、Ⅴ-2:1、Ⅵ-1:5、Ⅵ-4:2(1)、Ⅸ:3(1)、口禿碗:2、高台付皿Ⅰ:2(1)、Ⅱ:2、Ⅲ:1<br>平底皿Ⅱ:2(1)、Ⅳ－1:3(1)、口秀皿:2(1)、香炉？:1、四耳壺:3 |
| | 青磁 | 龍泉碗Ⅰ-5:7、Ⅰ-6:2、Ⅰ-8:1、Ⅰ-9:16(1)、Ⅱ-1:9、Ⅱ-2:8(1)、Ⅲ:3、同安碗Ⅰ:1、Ⅱ:7、皿Ⅱ-1:3(2)、越州碗:1 |
| | 中国陶器 | A群Ⅰ-盤-2:3、盤:14、Ⅰ-四耳壺:3、Ⅲ-小口壺:6、準A群四耳壺:78、B群四耳壺:1、注口:1、皿:3、袋物:44、鉢:4、蓋:1<br>燭台:1、C群袋物:1、水注の把手:1、捏鉢:3、すり鉢:1、盤口壺:1、D群大型容器:2 |
| | その他 | 青白磁碗:1(1)、皿:4、天目碗:1、茶褐釉袋物:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:105、小皿糸:68、小皿b:1 |
| | 陶磁器 | 備前？甕:3 |
| | その他 | 瓦器碗:2、須恵質土器鉢:7 |

**SE0132**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:2、Ⅱ:16、Ⅳ－1:1(1)、Ⅳ-2:1、Ⅳ:21、Ⅵ-1:6(1)、Ⅵ-3:1(1)、Ⅸ:8(1)、浅碗:1、高台付皿Ⅱ:2、平底皿0:2、Ⅱ-1:1<br>Ⅱ:28(9)、Ⅳ-1:2、Ⅴ:1(1)、Ⅵ-1:2(1)、袋物:1 |
| | 青磁 | 龍泉碗:3、同安碗:1、越州袋物:1 |
| | 中国陶器 | A群Ⅰ-盤-1:2、Ⅰ-盤-2:2、盤:11、Ⅰ-四耳壺:7、Ⅲ-小口壺:3、Ⅲ-軍持:1、Ⅲ-鉢:2、準A群四耳壺2、B群水口:1、袋物12、C群捏鉢3:3、捏鉢:1、D群大型容器:7 |
| | その他 | 青白磁碗:5、天目碗:1、黒褐釉碗:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:77、小皿糸:23 |
| | 陶磁器 | 備前？甕:5 |
| | その他 | 瓦器碗:48、皿:4、黒色土器B類:2 |

**SE0134**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:3、Ⅱ:15(1)、Ⅳ:14、Ⅴ-1:11、Ⅴ-2:1、Ⅵ-1:9、Ⅵ:14、Ⅶ:1(1)、Ⅸ:5、高台付皿Ⅱ:3(1)、Ⅲ:1、平底皿0:1、Ⅱ-1:1、Ⅱ:11(5)、Ⅳ-1:1、Ⅵ-1:3(3)、Ⅵ:2、袋物:1、四耳壺:1 |
| | 青磁 | 龍泉碗Ⅰ-2:3、Ⅰ-5:5、Ⅰ-8:1、Ⅰ-9:8、0?:1、皿:4、同安碗Ⅰ:1、Ⅱ:8(1)、皿:4、越州?袋物:1 |
| | 中国陶器 | A群Ⅰ-盤-1:9、Ⅰ-盤-2:2、Ⅰ-四耳壺:3、Ⅲ-小口壺:1、袋物:5、Ⅲ-小口壺:1、準A群四耳壺:21、B群四耳壺:2、水注:1、袋物:24、C群捏鉢3:3、D群大型容器:6<br>容器:2 |
| | その他 | 青白磁碗:2、皿:2、合子蓋:2、合子身:2、天目碗:1、緑釉陶器袋物:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:55、小皿糸:28 |
| | 陶磁器 | 備前?甕:2 |
| | その他 | 黒色土器A類:1、瓦器碗:26、須恵質土器鉢:1 |

**SK0136**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:4、Ⅳ-2:1、Ⅳ:6、Ⅴ-1:2、Ⅵ:1、蕉葉文碗:2、高台付皿Ⅲ:2、平底皿Ⅱ:7、Ⅵ-1:1 |
| | 青磁 | 龍泉碗:5(1)、皿:1(1)、同安碗:1、越州碗:1(1)、越州碗?:1、連江碗:1 |
| | 中国陶器 | A群盤:8、Ⅰ-四耳壺:1、緑釉袋物:1、準A群四耳壺:3、B群短頸壺:1、C群捏鉢3:1、D群大型容器:1 |
| | その他 | 青白磁皿:2、天目碗:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏ヘラ:52、糸:70、小皿糸:6 |
| | 陶磁器 | 備前?甕:1 |
| | その他 | 瓦器碗:6、須恵質土器鉢:1 |

**SE0218**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:4、Ⅱ:2、Ⅳ:5、Ⅵ:4(1)、Ⅵ:1、Ⅸ:2、高台付皿Ⅱ:1、平底皿Ⅱ:2、合子身:1、袋物:1 |
| | 青磁 | 龍泉碗Ⅰ-5:10(3)、Ⅰ-9:1(1)、皿:1(1)、同安碗Ⅱ:12、皿:3(3) |
| | 中国陶器 | A群盤:1、Ⅰ-四耳壺:1、Ⅰ-黄釉壺:1、Ⅲ-小口瓶:2、準A群四耳壺:11、B群袋物:2、鉢:5、C群捏鉢:1、D群大型容器:2 |
| | その他 | 青白磁皿:1、黒褐釉碗:1、朝鮮袋物?:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏ヘラ:2、糸:61、小皿ヘラ:3、糸:12、高台付碗:2 |
| | 陶磁器 | 備前?甕:4、鉢:1 |
| | その他 | 黒色土器A類:1、瓦器碗:4、須恵質土器鉢:4 |

**SE0385**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅴ:2、Ⅴ:2、小碗:1、平底皿Ⅱ:1 |
| | 青磁 | 高麗碗:2 |
| | 中国陶器 | 不明:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏ヘラ:1、小皿ヘラ:6、高台付碗:3 |
| | その他 | 瓦器碗:2 |

**SE0307**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:2、Ⅱ:8、Ⅳ:7(1)、Ⅴ:5、Ⅵ:1、Ⅵ:1、Ⅸ:1、高台付皿Ⅱ:2、平底皿0-1:1、Ⅱ-2:1、Ⅱ:2(1) |
| | 中国陶器 | A群盤:1、Ⅰ-四耳壺:2、準A群四耳壺:2、B群袋物:2、C群捏鉢3:2、無釉盤口壺:1、D群大型容器:3 |
| 国産品 | 土師器 | 坏糸:3、小皿糸:5、高台付碗:1 |
| | その他 | 黒色土器B類:1、瓦器碗:1、楠葉型碗瓦器:1 |

**SK0308**

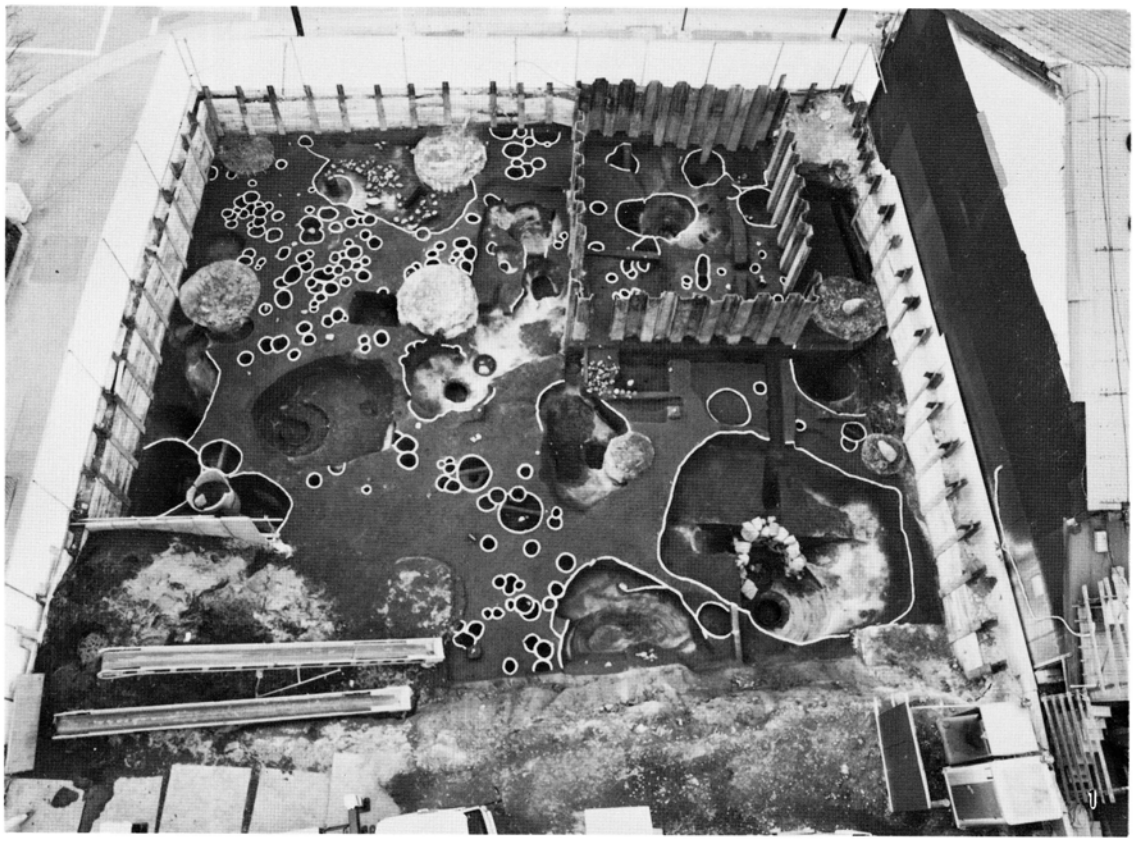
| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗0-Ⅲ:2(1)、Ⅱ-1:9(1)、Ⅱ:4、Ⅳ:14、Ⅴ-2:1(1)、小碗:1、小碗Ⅱ:1(1)、高台付皿:1(1)、平皿Ⅱ:1 |
| | 青磁 | 越州碗:6、高麗碗:3(1) |
| | 中国陶器 | A群Ⅰ-盤-1:1、Ⅰ-盤-2:1、Ⅰ-四耳壺:2、C群捏鉢3:1、D群大型容器:4 |
| | その他 | 青白磁碗:2(2)、緑釉壺:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏ヘラ:11、小皿ヘラ:12、高台付碗:7 |
| | その他 | 黒色土器B類:5、瓦器碗:6 |

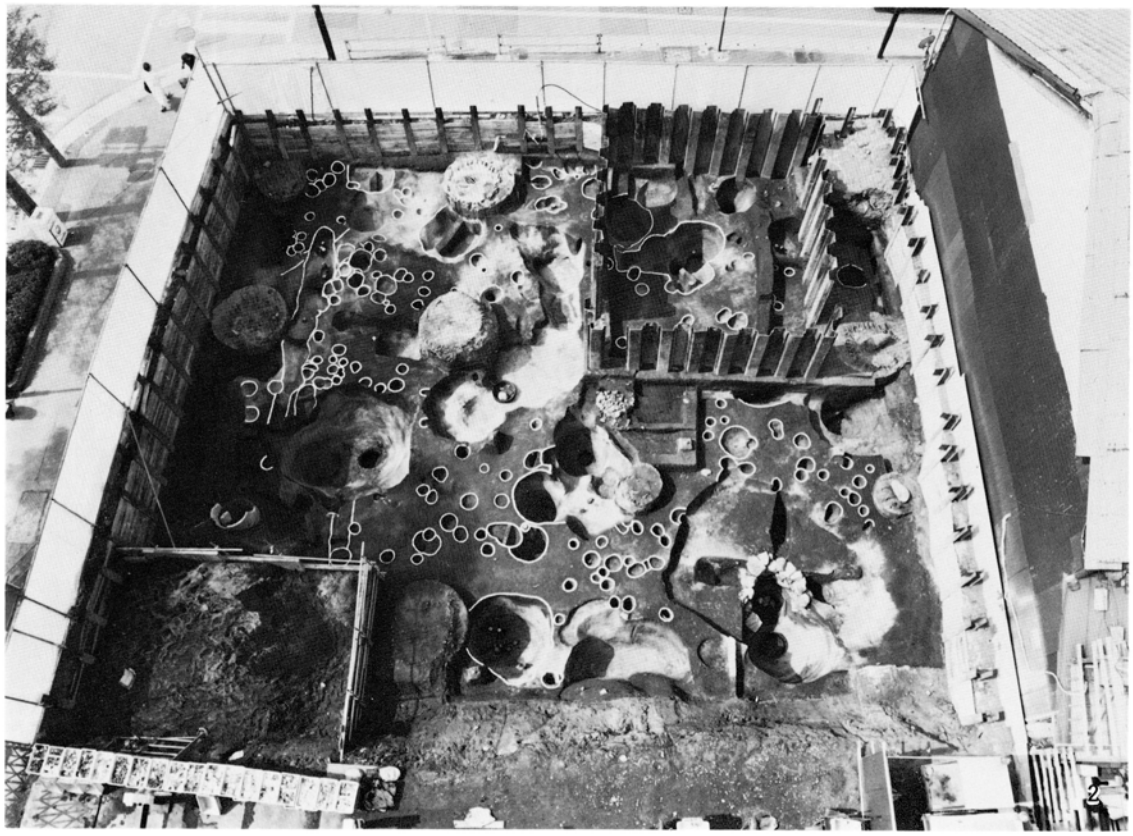
**SD0309**

| | | |
|---|---|---|
| 輸入陶磁器 | 白磁 | 碗Ⅱ-1:1、Ⅴ:1、越州:1、平皿:1 |
| | 青磁 | 同安碗:1 |
| | 中国陶器 | A群:1、B群袋物:1 |
| | その他 | 青白磁碗:1 |
| 国産品 | 土師器 | 坏ヘラ:1、小皿ヘラ:4、高台付碗:6、高台付皿:1 |
| | その他 | 黒色土器B類:1、瓦器碗:6、瓦器楠葉型碗:1 |

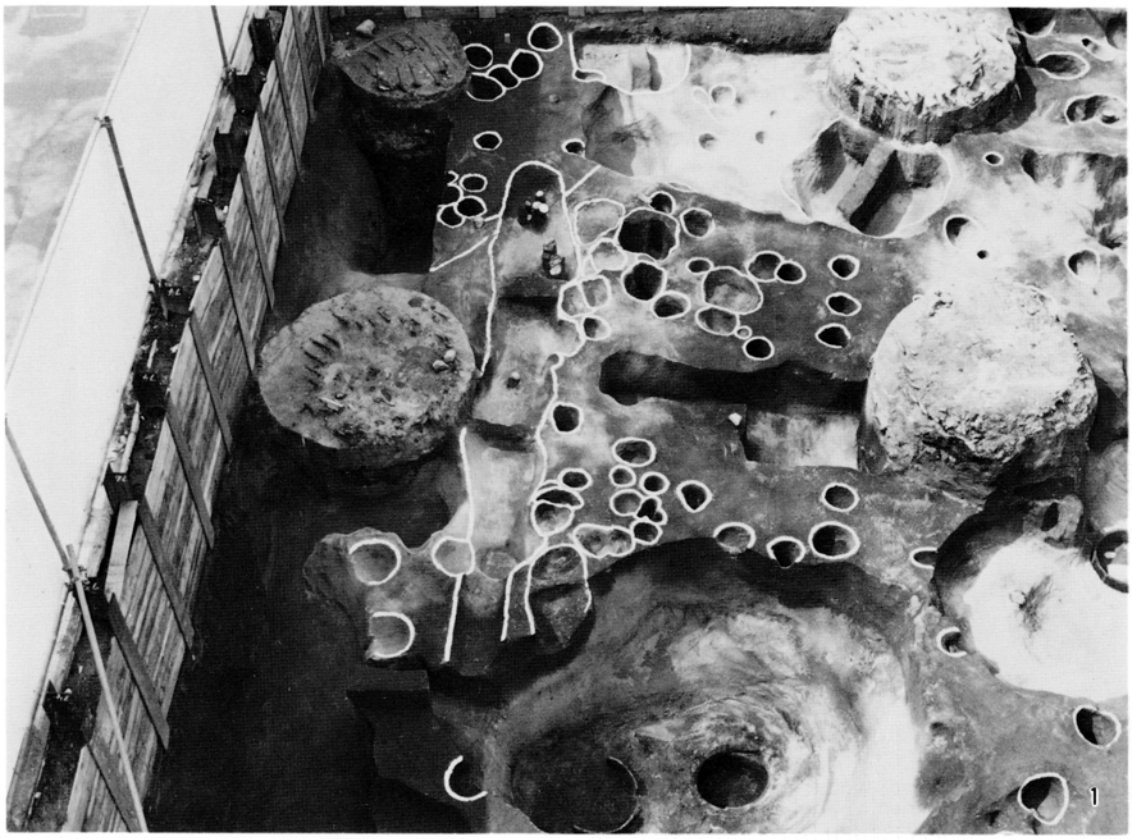
※ 陶磁器の分類は以下の文献に基づいた。
森本朝子「博多出土貿易陶磁器分類表」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第105集別冊　1984
※ 表中の数は破片数で、個体数ではない。(　) 内の数は底部の数。

# 図　　版

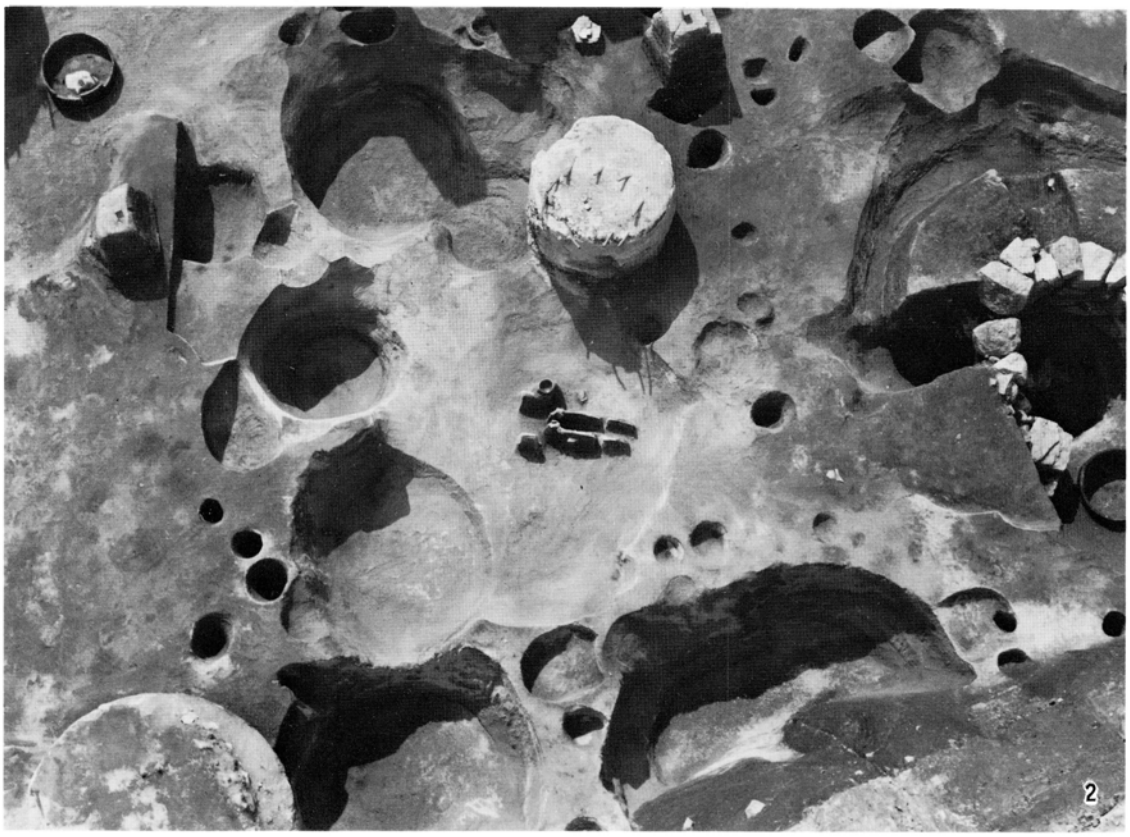




1　第Ⅰ面全景（東から）　　2　第Ⅱ面全景（東から）

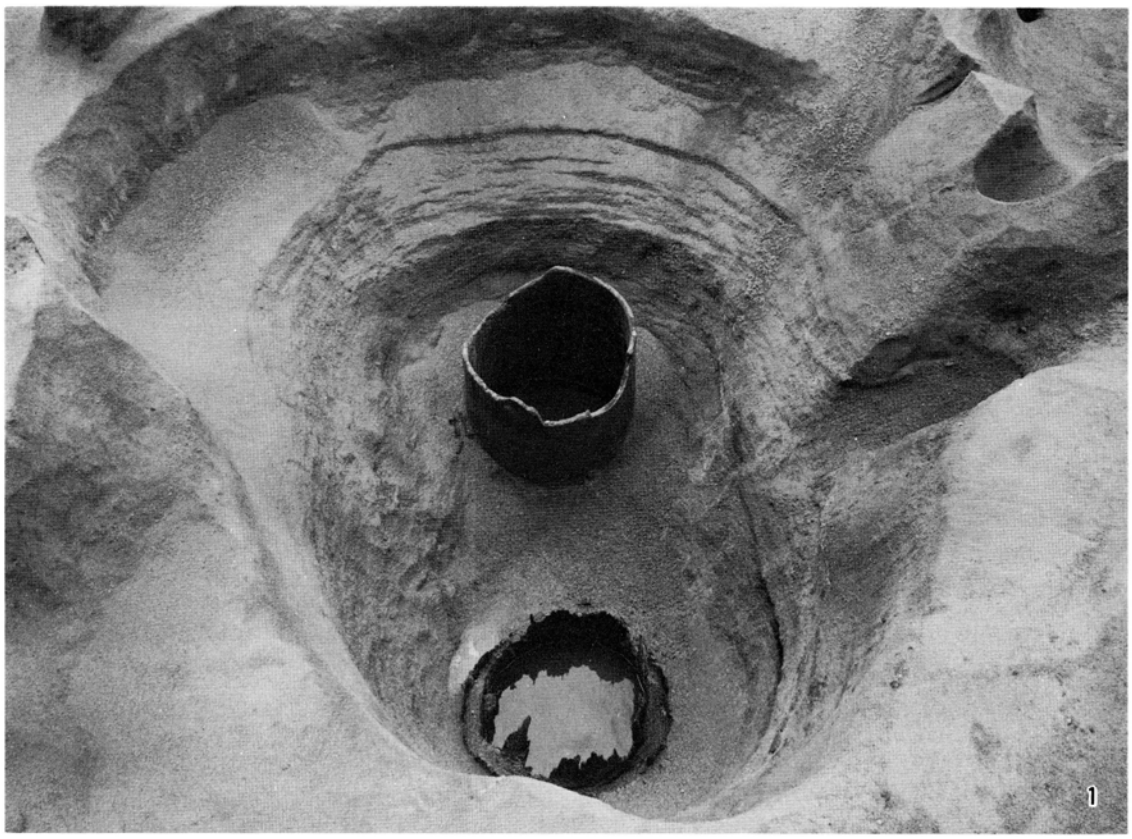


1　第Ⅱ面SD0309周辺（東から）　　2　第Ⅲ面全景（東から）



1　第Ⅲ面 SC0406周辺（北東から）　　2　第Ⅲ面 SX0486周辺（東南から）

1　SC0406（東から）　　2　SC0429・SD0428（西から）



1　SE0013・0014（南から）　　2　SE0104井戸側（東から）

1　SE0050（東から）　　2　SE0107・0139（南から）

1　SE0119（西から）　　2　SE0342（東から）

1　SK0024（北から）　　2　SK0045（南から）

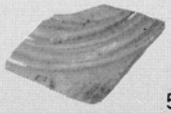
1　SK0307（北から）　　2　SK0308（北から）

1　SK0407（南から）　　2　SK0465（東から）

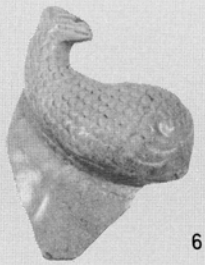
1　SK0503（東から）　　2　SK0507（東から）

1　SX0486（南から）　　2　SX0486人骨（東北から）

SB0106



5

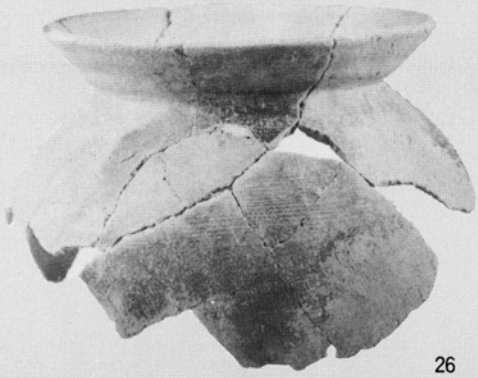


6

SC0429

15

16



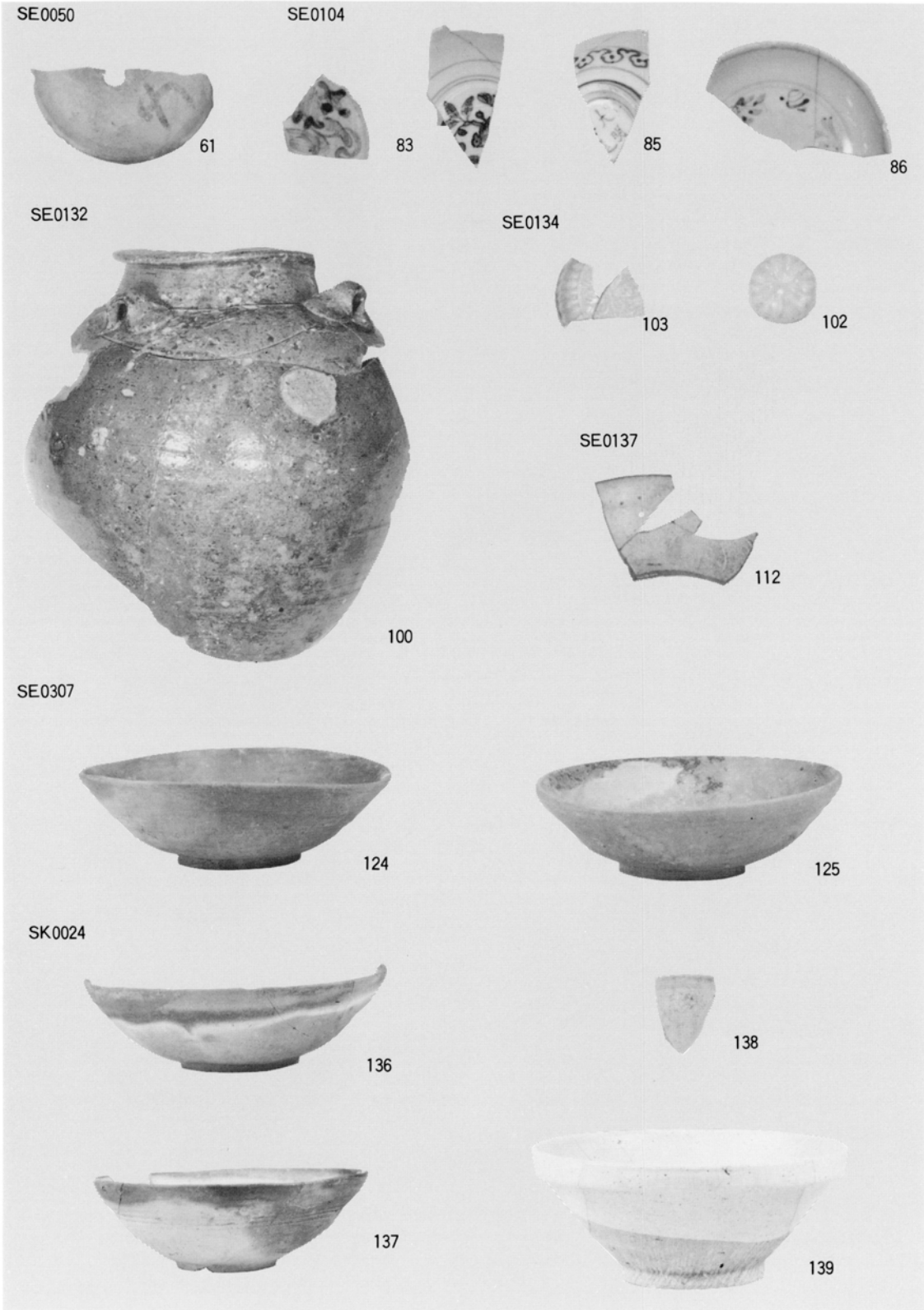
26

19

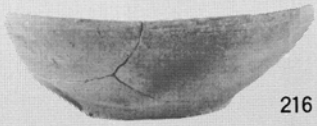
31

28

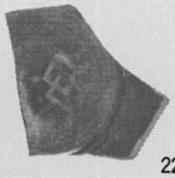
出土遺物Ⅰ


SE0050
61
SE0104
83
85
86
SE0132
100
SE0134
103
102
SE0137
112
SE0307
124
125
SK0024
136
138
137
139

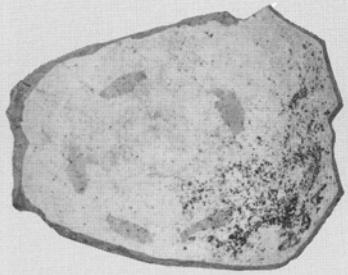
SK0045

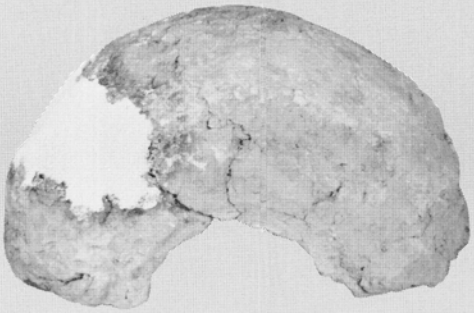


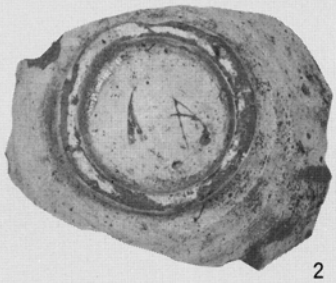
216



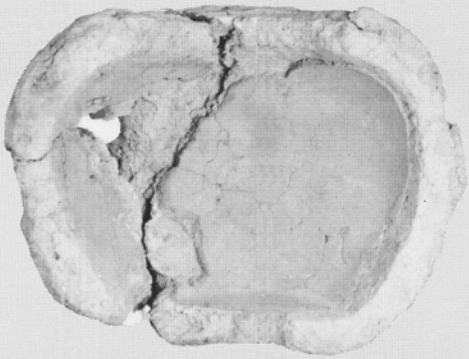
223

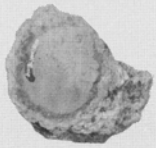


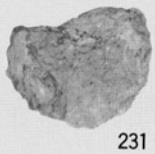




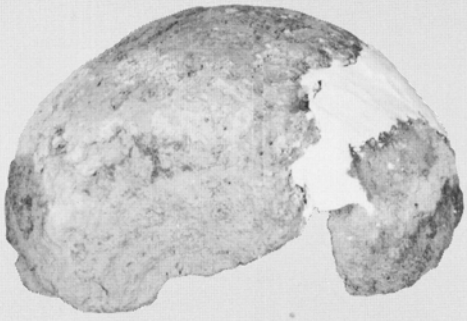
2







231



230

232

SK0140

266

267・268

SK0185

270

SK0407

313

288

299

303

302

305

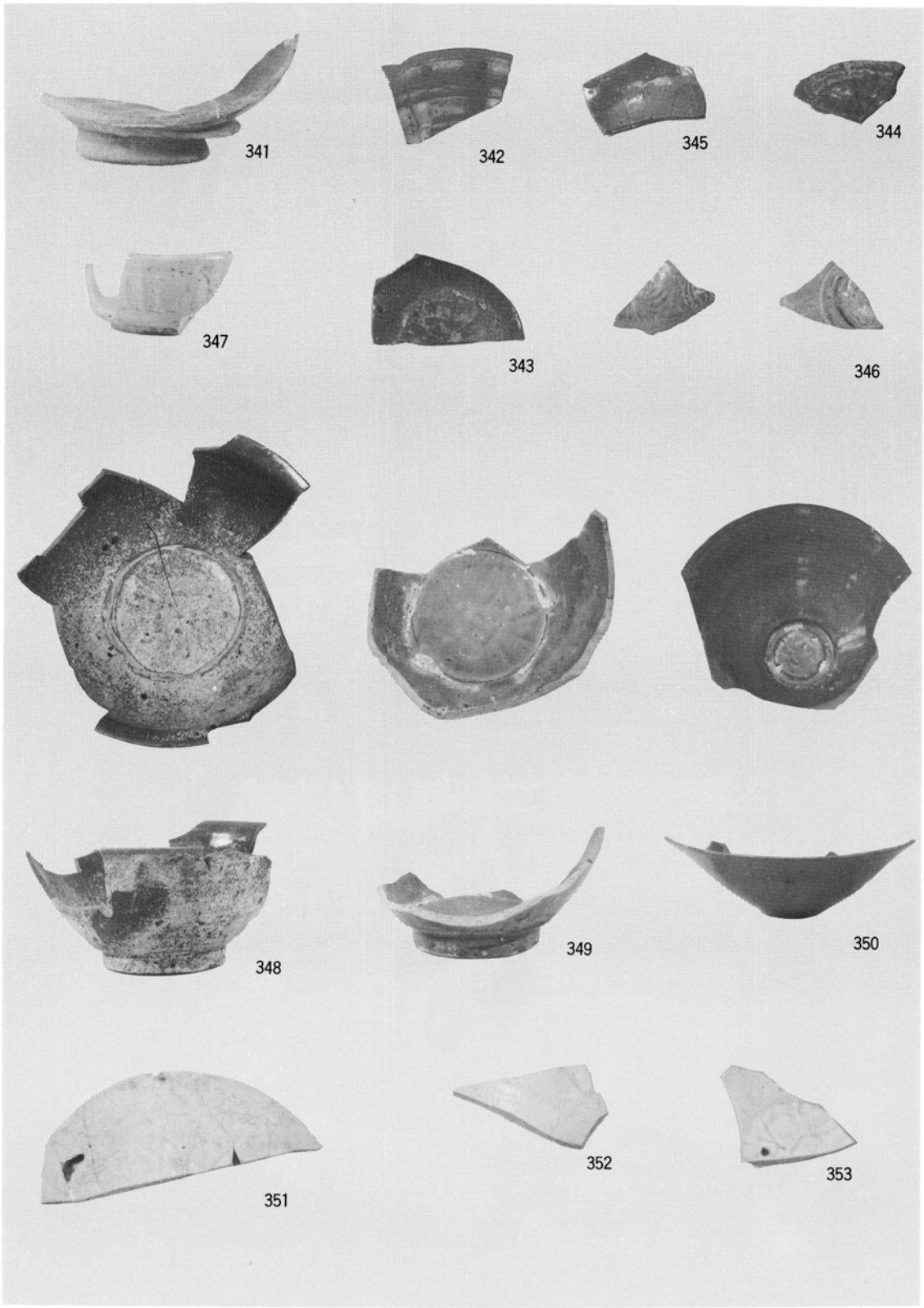
304

306

307

308

出土遺物Ⅳ




出土遺物Ⅴ

354

355

357

358

359

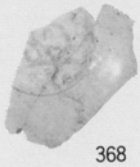
360

361

365

366

367


368

369

372

383

384

福岡市埋蔵文化財調査報告書第286集

博　多　31

1992年3月13日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺3丁目28番1号